其の時は饅頭を食ひながら少々呆れた位後が食ひ度なつた。それに腹は減つてゐる。其の上相手がどてらである。此のどてらが事もなけに、砂のついた饅頭をぱくつく所を見ると、多少は競爭の氣味にもなつて、神經などは有つても役に立たない、起すだけが損だと云ふ心持になる。そこで自分はとう〳〵神さんにたのんで饅頭の御代りを貰つた。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云はずに、木皿が床几の上に乘るや否や、自分の方で先づ一つ頬張つた。するとどてらも「や、濟まない」とも何とも云はずに、だまつて一つ頬張つた。次に自分が又一つ頬張る。次にどてらが又一つ頬張る。互違に頬張りつ子をして六つ目迄來た時、たつた一つ殘つた。是が幸ひ自分の番に當つて居るので、どてらが手を出さないうちに、自分が頬張つて仕舞つた。それから又御代りを貰つた。

「君大分遣るね」

とどてらが云つた。自分は大分遣る氣も何もなかつたが、云はれて見ると大分遣に違ない。然し是は初手にどてらの方で自分の食ひ度ないものを、むしや〳〵食つて見せて、自分の食慾を誘致した結果が與つて力ある樣だ。所がどてらの方では全然此方の責任で大分遣つてる樣な口氣であつた。だから自分は何だかどてらに對して辯解して見たい氣がしたが、辯解する言葉が一寸出て來なかつた。只雲を摑む樣にどてらにも責任があるんだらうと思ふ丈で、どこが責任なんだか分らなかつたから默つて居た。すると

「君、揚饅頭が餘つ程好きと見えるね」

と今度は云つた。饅頭にも寄り切りで、一昨日揚げた砂だらけの蠅だらけの饅頭が好きな譯はない。とこゝつて現に二皿迄代へて食ふものを嫌だとは無論云はれない。だから今度も默つて居た。そこへ茶店の神さんが突然口を出した。——

「うちの御饅は名代の御饅だから、みんなが旨がつて食るだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてる樣な氣がした。そこで益默つて仕舞つた。默つて聞いてると、

「旨い事此の上なしだ」

とどてらが云つてる。本當なんだか御世辭なんだか一寸見當が附かなかつた。兎に角饅頭はどうでも構はないから、肝心の勞働問題を聞糾して見樣と思つて、

「先刻の御話ですがね。實は僕も色々の事情があつて、働いて飯を食はなくつちやならない身分なんですが、一體どんな事をやるんですか」

と此方から口を切つて見た。どてらは正面の菓子臺を眺めてゐたが、此時急に顏丈自分の方へ向けて

「君、儲かるんだぜ。嘘ぢやない、本當に儲かる話なんだから是非遣り給へ」

と、又ぞろ自分を君呼はりにして、しきりに儲けさせたがつてゐる。此方へ向き直つて、自分を誘ひ出さうと力める顏附を見ると、頬骨の下が自然と落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎の枠で角張てゐる。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下から弓形に出來上つた皺が深く映つてゐる。此の樣子を見た自分は何となく儲けるのが恐ろしくなつた。

「僕はそんなに儲けなくつても、いゝです。然し働く事は働くです。神聖な勞働なら何でもやるです」

どてらの頰の邊には、はてなと云ふ景色が一寸見えたが、やがて、かの弓形の皺を左右に開いて、脂だらけの齒を遠慮なく剝き出して、さうして一種特別な笑ひ方をした。あとから考へるとどてらには神聖な勞働と云ふ意味が通じなかつたらしい。苟も人間たるものが金儲の意味さへ知らないで、小六づかしい口巧者な事を云ふから、氣の毒だと云ふのでどてらは笑つたのである。自分は今が今迄死ぬ氣でゐた。死なない迄も人間の居ない所へ行く氣でゐた。それが出來損つたから、生きる爲に働く氣になつた迄である。儲かるとか儲からないとか云ふ問題は、てんで頭の中にはない。今ない許りぢやない、東京にゐて親の厄介になつてる時分からなかつた。どころぢやない儲主義は大いに輕蔑してゐた。日本中どこへ行つても其の位な考へは誰にもあるだらう位に信じてゐた。だからどてらがさつきから儲かる〳〵と云ふのを聞くたんびに何の爲だらうと不思議に思つてゐた。無論癩には障らない。癩に障る樣な身分でもなし、境遇でも、ないから、一向平氣ではゐたが、是が人間に對する至大の甘言で、勸誘の方法として、尤も利目のあるものだとは夢にも想ひ至らなかつた。そこで、どてらから笑はれちまつた。笑はれてさへ一向通じなかつた。今考へると馬鹿々々しい。

一種特別な笑ひ方をしたどてらは、其の笑ひの收まりかけに、

「お前さん、全體今迄働いた事があんなさるのかね」

と少し眞面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日自宅を逃げ出した許りである。自分の經驗で、働いた試しは擊劍の稽古と野球の練習位なもので、稼いで食た事はまだ一日もない。

「働いた事はないです。然し是から働かなくつちあならない身分です」

「さうだらう。働いた事がなくつちや……ぢや、君、まだ儲けた事もないんだね」

と當り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、默つてると、茶店のかみさんが、菓子臺の後から、

「働くからにや、儲けなくつちやあね」

と云ひながら、立ち上がつた。どてらが、

「全くだ。儲けやうつたつて、今時さう儲け口が轉がつてるもんぢやない」

と幾分か自分に對して恩に被せる樣に答へるのを、

「さうさ」

と幾分かさげすむ樣に聞き流して、裏へ出て行つた。此さうさが妙に氣になつて、ことによると、まだ其の後があるかも知れないと思つた所爲か、何氣なく後姿を見送つてゐると、大きな黑松の根方の處へ行つて、立小便をし始めたから、急に顏を背けて、どてらの方を向いた。どてらはすぐ、

「私だから、お前さん、見ず知らずの他人にこんな旨い話をするんだ。是が外のものだつたら、受合つてたゞぢや話しつこない旨い口なんだからね」

と又恩に被せる。自分は、面倒くさいから大人しく、

「難有いです」

と四角張つて答へて置いた。

「實はかう云ふ口なんだがね」

と、どてらが、すぐに云ふ。自分は默つて聞いてゐた。

「實はかう云ふ口なんだがね。銅山へ行つて仕事をするんだが、私が周旋さへすれば、すぐ坑夫になれる。すぐ坑夫になれりや大したもんぢやないか」

自分は何か返事を促される樣な氣がしたけれども、どうもどてらの調子に載せられて、さうですとは答へる譯に行かなかつた。坑夫と云へば鑛山の穴の中で働く勞働者に違ない。世の中に勞働者の種類は大分あるだらうが、其のうちで尤も苦しくつて、尤も下等なものが坑夫だと許考へてゐた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと云はれたのだから、調子を合す所の騷ぎぢやない、おやと思ふ位内心では少からず驚いた。坑夫の下にはまだ〳〵坑夫より下等な種屬があると云ふのは、大晦日の後にまだ澤山日が餘つてると云ふのと同じ事で、自分には殆ど想像がつかなかつた。實を云ふとどてらがこんな事を饒舌るのは、自分を若年と侮つて、好い加減に人を瞞すのではないかと考へた。所が相手は存外眞面目である。

「何しろ、取附からすぐに坑夫なんだからね。坑夫なら樂なもんさ。忽ちのうちに金がうんと溜つちまつて、好な事が出來らあね。なに銀行もあるんだから、預け樣と思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めつから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向を持つて行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足した儘の顏をして

「さうとも、今からすぐ坑夫になつて置きあ四五年立つうちにや、唸る程溜る許りだ。――働き盛りだ。――今のうち儲けなくつちや損だ」

と一句、一句間を置いて獨り言の樣に述べてゐる。

要するに此のかみさんも是非坑夫になれと云はぬ許りの口占で、全然どてらと同意見を持つてゐる樣に思はれた。無論夫でよろしい。又夫でなくつても一向構はない。妙な事に此の時程大人しい氣分になれた事は自分が生れて以來始めてゞあつた。相手がどんな間違を主張しても自分は只はい〳〵と云つて聞いて居たらうと思ふ。實を云ふと過去一年間に於て仕出かした不都合やら義理やら人情やら煩悶やらが破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなく茲所迄落ちて來たのだから、昨日迄の自分の事を考へると、どうしたつて、こんなに溫和しくなれる譯がないのだが、實際此の時は人に逆ふ樣な氣分は藥にしたくつても出て來なかつた。さうして又それを矛盾とも不思議とも考へなかつた。恐らく考へる餘裕がなかつたんだらう。人間のうちで纏つたものは身體丈である。身體が纏つてゐるもんだから、心も同樣に片附いたものだと思つて、昨日と今日と丸で反對の事をしながらも、矢張り故の通りの自分だと平氣で濟ましてゐるものが大分ある。のみならず一旦責任問題が持ち上がつて、自分の反覆を詰られた時ですら、いや私の心は記憶がある許りで、實はばら〳〵なんですからと答へるものがないのは何故だらう。かう云ふ矛盾を屢經驗した自分ですら、無理と思ひながらも、聊か責任を感ずる樣だ。して見ると人間は中々重寶に社會の犧牲になる樣に出來上つたものだ。

同時に自分のばら〳〵な魂がふら〳〵不規則に活動する現狀を目擊して、自分を他人扱ひに觀察した最眞目なしの眞相から割り出して考へると、人間程的にならないものはない。約束とか契とか云ふものは自分の魂を自覺した人にはとても出來ない話だ。又其の約束を楯にとつて相手をぎゆ〳〵押し附けるなんて蠻行は野暮の至りである。太抵の約束を實行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があ

るにも拘らず、其の無理を強て壓しかくして、知らぬ顔で遣つて退ける迄である。決して魂の自由行動ぢやない。はやくから、こゝに氣が附いたなら、無暗に人を恨んだり、悶えたり、苦しまぎれに自宅を飛び出したりしなくつても濟んだかも知れない。たとひ飛び出しても此の茶店迄來て、どてらと神さんに對する自分の態度が、昨日迄の自分とは打つて變つた所を、他人扱ひに落ち着き拂つて比較する丈の餘裕があつたら、少しは悟れたらう。

惜い事に當時の自分には自分に對する研究心と云ふものが丸でなかつた。只口惜しくつて、苦しくつて、悲しくつて、腹立たしくつて、さうして氣の毒で、濟まなくつて、世の中が厭になつて、人間が棄て切れないで、居ても立つても、居たゝまれないで、無茶苦茶に歩いて、どてらに引つ掛つて、揚饅頭を喰つた許りである。昨日は昨日、今日は今日、一時間前は一時間前、三十分後は三十分後、只眼前の心より外に心と云ふものが丸でなくなつちまつて、平生から繋續の取れない魂かいとゞふわつき出して、實際あるんだか、ないんだか頗る明瞭でない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢の樣に、朦朧と一團の妖氣となつて、虛空遙に際限もなく立て罩めてる樣な心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、何故坑夫になれば結構なんだとか、どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲ける事許を目的に働く人間ぢやないとか、儲けさへすりや何處がいゝんだとか、何とか蚊とか理窟を捏ねて、出來る丈自己を主張しなければ勘辨しない所を、只大人しく控へて居た。口丈大人しいのではない、腹の中から丸で抵抗する氣が出なかつたのである。

何でも此の時の自分は、單に働けばいゝと云ふ事丈を考へて居たらしい。苟しくも働きさへすれば、——

——苟しくも此のふわ〳〵の魂が五體のうちに、うろつきながらも居られさへすれば、——要するに死に切れないものを、強て殺して仕舞ふほどの無理を冒さない以上は、坑夫以上だらうが、坑夫以下だらうが、儲からうが、儲かるまいが、頓と問題にならなかつたものと見える。口働く口さへ出來れば夫で結構であるから、働き方の等級や、性質や、結果に就て、如何に自分の意見と相容れぬ法螺を吹かれても、又其の法螺が、單に自分を誘致する爲にする打算的の法螺であつても、又其の法螺に乘る以上は理知の人間として自分の人格に尠からぬ汚點を貽す恐れがあつても、丸で氣にならなかつたんだらう。こんな時には複雜な人間が非常に單純になるもんだ。

其の上坑夫と聞いた時、何となく嬉しい心持がした。自分は第一に死ぬかも知れないと云ふ決心で自宅を飛出したのである。夫れが第二には死なゝくつても、好いから人の居ない所へ行きたいと移つて來た。それが又何時の間にか移つて、第三にはともかくも働かうと變化しちまつた。所で、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がいゝ、一歩進めて云へば第一に緣故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心變りがした樣なものゝ、變りつゝ進んで來た、心の狀態は、有耶無耶の間に緣を引いて、擦れ落ちながらも、振り返つて、故の所を慕ひつゝ、押されて行くのである。單に働くと云ふ決心が、第二を振り切る程突飛でもなかつたし、第一と交渉を絶つ程遠くにも居なかつたと見える。働きながら、人の居ない所にゐて、尤も死に近い狀態で作業が出來れば、最後の決心は意の如くに運びながら、幾分か當初の目的にも叶ふ譯になる。坑夫と云へば名前の示す如く、坑の中で、日の目を見ない家業である。婆婆に居ながら、婆婆から下へ潛り込んで、暗い所で、鐵塊土塊を相手に、浮世の聲を聞かないで濟む。定めて

陰氣だらう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごて〳〵るるが、自分程坑夫に適したものは決してないに違ない。坑夫は自分に取つて天職である。――と茲所迄明瞭には無論考へなかつたが、只坑夫と聞いた時、何となく陰氣な心持ちがして、其の陰氣が又何となく嬉しかつた。今思ひ出して見ると、矢つ張りどうあつても他人の事としか受け取れない。

そこで自分はどてらに向つてかう云つた。

「僕は一生懸命に働く積ですが、坑夫にして呉れるでせうか」

するとどてらは中々鷹揚な態度で、

「すぐ坑夫になるのは中々六づかしいんだが、私が周旋さへすりや屹度出來る」

と云ふから自分もそんなものかなと考へて、暫く默つてゐると、茶店のかみさんが又口を出した。

「長藏さんが口を利きさへすりや、坑夫は受合だ」

自分は此の時始めてどてらの名前が長藏だと云ふ事を知つた。夫から一所に汽車に乘つたり、下りたりする時に、自分も此の男を捕へて二三度長藏さんと呼んだ事がある。然し長藏とはどう書くのか今以て知らない。こゝに書いたのは勿論當字である。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引つ張つて、思ひも寄らない見當に向けた、云はば自分の生活狀態に一轉化を與へた人の名前を口で覺えて居ながら、筆に書けないのは異な事だ。

偖此の長藏さんと、茶店のかみさんが屹度坑夫になれると受合ふから、自分もなれるんだらうと思つて、

「ぢや、どうか何分願ひます」

と頼んだ。然し此の茶店に腰を掛けてゐるものが、どうして、何處へ行つて、どんな手續で坑夫になるんだか其の邊は薩張り分らなかつた。

何しろ先方で此の位勸めるものだから、何分願ひますと云つたら、長藏さんがどうかするに違ないと思つて、あとは聞かずに默つてゐた。すると長藏さんは、勢ひよくどてらの尻を床几から立てゝ、

「それぢや是から、すぐに出掛け樣。御前さん、支度はいゝかい。忘れものゝない樣によく氣をつけて」

と云つた。自分はうちを出る時、着のみ着の儘で出たのだから、身體より外に忘れ物のある筈がない。そこで、

「何にも無いです」

と立ち上がつたが、神さんと顏を見合せて氣が附いた。肝心の揚饅頭の代を忘れてゐる。長藏さんは平氣な面をして、もう半分程葭簀の外に出て往來を眺めてゐた。自分は懷中から三十二錢入りの墓口を出して饅頭三皿の代を拂つて、序だから茶代として五錢やつた。饅頭の代はとう〳〵忘れちまつて思ひ出せない。たゞ其の時かみさんが、

「坑夫になつて、うんと溜めて歸りに又御寄」

と云つたのを記憶してゐる。其の後坑夫はやめたが、遂に此の茶店へは寄る機會がなかつた。それから長藏さんに尾いて、例の飽き〳〵した松原へ出て、一本筋を足の甲迄埃を上げて、やつて來ると、さつきの長たらしいのに引き易へて今度は存外早く片附いちまつた。何時の間にやら松がなくなつたら、板橋街道

の樣な希知な宿の入口に出て來た。矢ッ張り板橋街道の樣に我多馬車が通る。一足先へ出た長藏さんが、振り返つて、

「御前さん馬車へ乘るかい」

と聞くから、

「乘つても好いです」

と答へた。さうしたら今度は

「乘らなくつても可いかい」

と反對の事を尋ねた。自分は

「乘らなくつても可いです」

と答へた。長藏さんは三度目に

「どうするね」

と云つたから、

「どうでも可いです」

と答へた。其の内に馬車は遠くへ行つて仕舞つた。

「ぢや、歩く事にしやう」

と長藏さんは歩き出した。自分も歩き出した。向ふを見ると、今通つた馬車の埃が日光にまぶれて、往來が濁つた樣に黄色く見える。そのうちに人通りが段々多くなる。町並が次第に立派になる。仕舞には牛込

の神樂坂位な繁昌する所へ出た。こゝいらの店付や人の樣子や、衣服は全く東京と同じ事であつた。長藏さんの樣なのは殆ど見當らない。自分は長藏さんに、

「此所は何と云ふ所です」

と聞いたら、長藏さんは、

「此所？此所を知らないのかい」

と驚いた樣子であつたが、笑ひもせずすぐ教へて呉れた。それで所の名は分つたがこゝにはわざと云はない。自分が此の繁華な町の名を知らなかつたのを餘程不思議に感じたと見えて、長藏さんは、

「お前さん、一體生れは何處だい」

と聞き出した。考へると、今迄長藏さんが自分の過去や經歴について、ついぞ一と口も自分に聞いた事がなかつたのは、人を周旋する男の所爲としては、少しく無頓着過ぎる樣にも思はれたが、此の男は全くそんな事に冷淡な性であつた事が後で分つた。此の時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た好奇心に過ぎなかつた。其の證據には自分が、

「東京です」

と答へたら、

「さうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引つ張る樣にして、ある横町を曲つた。

貧を云ふと自分は相當の地位を有つたものゝ子である。込み入つた事情があつて、耐へ切れずに生家を

飛び出した樣なものゝ、あながち親に對する不平や面當許りの無分別ぢやない。何となく世間が厭になつた結果として、わが生家迄面白くなくなつたと思つたら、もう親の顏も親類の顏も我慢にも見てゐられなくなつてゐた。是は大變だと氣がついて、根氣に心を取り直さうとしたが、遲かつた。踏み答へて見樣と百方に焦慮れば焦慮る程厭になる。揚句の果は踏張の栓が一度にどつと拔けて、堪忍の陣立が總崩れとなつた。其の晩にとう〳〵生家を飛び出して仕舞つたのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がゐる。さうして其少女の傍に又一人の少女がゐる。此の二人の少女の周圍に親がある。親類がある。世間が萬遍なく取り捲いてゐる。所が第一の少女が自分に對して丸くなつたり、四角になつたりする。すると何かの因緣で自分も丸くなつたり、四角になつたりしなくつちやならなくなる。然し自分はさう丸くなつたり四角になつたりしては、第二の少女に對して濟まない約束を以て生れて來た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく辨別て居た。が濟まないと思へば思ふ程丸くなつたり四角になつたりする。仕舞には形態ばかりぢやない組織迄變る樣になつて來た。夫を第二の少女が恨めしさうに見てゐる。親も親類も見てゐる。世間も見てゐる。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲つたりくねつたりする所を、どうかして隱さうと力めたが、何しろ第一の少女の方で少しも已めて呉れないで、無暗に伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隱し終せる段ぢやない。親にも親類にも目附かつて仕舞つた。怪しかるとは自分でも思つて居なかつたが、段々聞き糾して見ると、怪しからん意味が大分違つてる。そこで色々辯解して見たが中々聞いて呉れない。親の癖に自分の云ふ事をちつとも信用しないのが第一不都合だと思ふと同時に、第一の少女の傍に居たら、此の先どうなるか分らない、ことに因ると實際辯解の出來ない樣な怪しからん事が出來するかも知れないと考へ出した。がどうしても離れる事が出來ない。しかも第二の少女に對しては氣の毒である、濟まん事になつたと云ふ念が日々烈しくなる。――こんな具合で三方四方から、兩立しない感情が攻め寄せて來て、五色の絲のこんがらかつた樣に、此方を引くと、彼方の筋が詰る、彼方をゆるめると此方が釣れると云ふ按排で、亂れた頭はどうあつても解けない。色々に工夫を積んで自分に愛想の盡きる程ひねくつて見たが、到底思ふ樣に纏まらないと云ふ一點張に落ちて來た時に――やつと氣がついた。つまり自分が苦しんでゐるんだから、自分で苦みを留めるより外に道はない譯だ。今迄は自分で苦しみながら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のいゝ樣な解決があるだらうと、只管に外のみを當にしてゐた。つまり往來で人と行き合つた時、此方は突ッ立つた儘、向ふが泥濘へ避けてくれる工面ばかりしてゐたのだ。此方が動かない今の儘の此方で、夫で相手の方丈を思ふ通りに動かさうと云ふ出來ない相談を持ち懸けてゐたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に寫る自分の影を氣にしたつて、どうなるもんぢやない。世間の掟といふ鏡が容易に動かせないとすると、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。

そこで自分は此の入り組んだ關係の中から、自分丈をふいと煙にして仕舞はうと決心した。然し本當に煙にするには自殺するより外に致し方がない。そこで度々自殺をしかけて見た。所が仕掛るたんびにどきんとして已めて仕舞つた。自殺はいくら稽古をしても上手にならないものだと云ふ事を漸く悟つた。自殺が急に出來なければ自滅するのが好からうとなつた。然し自分は前に云ふ通り相當の身分のある親を持つ

て朝夕に事を缺かぬ身分であるから生家に居ては自滅しやうがない。どうしても逃亡が必要である。

逃亡をしても此關係を忘れる事は出來まいとも考へた。又忘れる事が出來るだらうとも考へた。要するに、して見なければ分らないと考へた。たとひ煩悶が逃亡に附き纏つて來るにしても夫は自分の事である。あとに殘つた人は自分の逃亡の爲に助かるに違ひないと考へた。のみならず逃亡をしたつて、何時迄も逃亡てゐる譯ぢやない。急に自滅がしにくいから、まづ其一着として逃亡て見るんである。だから逃亡て見ても矢張り過去に追はれて苦しい樣なら、其の時徐に自滅の計を廻らしても遲くはない。それでも駄目と極まれば其時こそ屹度自殺して見せる。——かう書くと自分は如何にも下らない人間になつて仕舞ふが、事實を露骨に云ふと是丈の事に過ぎないんだから仕方がない。又かう書けばこそ下らなくなるが、其の當時のほんやりした意氣込を、ほんやりした意氣込の儘に敍したなら、是でも小說の主人公になる資格は十分あるんだらうと考へる。

それでなくつても實際其の當時の、二人の少女の有樣やら、日毎に變る局面の轉換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類の忠告やら、何やら蚊やらを、そつくり其の儘書き立てたら、大分面白い續きものが出來るんだが、そんな筆もなし時もないから、まあ已めにして、折角の坑夫事件丈けを話す事にする。

兎に角かう云ふ譯で自分は愈々となつて出奔したんだから、固より生きながら葬られる覺悟でもあり、又自ら葬つて仕舞ふ了簡でもあつたが、遺に親の名前や過去の歷史はいくら棄鉢になつても長藏さんには話し度なかつた。長藏さん許りぢやない、凡ての人間に話し度なかつた。凡ての人間は愚か、自分にさへ出

來る事なら話り度ない程情ない心持でひよろ〳〵してゐた。だから長藏さんが人を周旋する男にも似合ず、自分の身元に就て一言も聞き糺さなかつたのは、變と思ひながらも、內々嬉しかつた。本當を云ふと、當時の自分はまだ嘘を突く事を能く練習して居なかつたし、胡魔化すと云ふ事は大變な惡事の樣に考へてゐたんだから、聞かれたら定めし困つたらうと思ふ。

そこで長藏さんに尾いて、橫町を曲つて行くと、一二丁行つたか行かないうちに町並が急に疎になつて、所々は田圃の片割れが細く透て見える。表はあんなに繁昌しても、繁昌は橫幅丈であるなと氣が附たら、又急に橫町を曲らせられて、又賑かな所へ出された。その突當りが停車場であつた。汽車に乘らなくつては坑夫になる手續きが濟まないんだと云ふ事を此時漸く知つた。實は鑛山の出張所でも此の町にあつて、まづそこへ連れて行かれて、其處から又役人が山へでも護送してくれるんだらうと思つてゐた。

そこで停車場へ這入る五六間手前になつてから、

「長藏さん、汽車に乘るんですか」

と後から、呼び掛けながら聞いて見た。自分が此の男を長藏さんと云つたのは此の時が始めてゞある。長藏さんは一寸振り返つたが、あかの他人から名前を呼ばれたのを不審がる樣子もなく、すぐ、

「あゝ、乘るんだよ」

と答へたなり、停車場に這入つた。

自分は停車場の入口に立て考へ出した。あの男は一體自分と一所に汽車へ乘つて先方迄行く氣なんだらうか、夫にしては餘り親切過ぎる。なんぼなんでも見ず知らずの自分にかう叮嚀な世話を燒くのは可笑し

い。ことによると彼奴は詐欺師かも知れない。自分は下らん事に今更の如くはつと氣が附いて急に汽車へ乘るのが厭になつて來た。一層の事又停車場を飛び出さうかしらと思つて、今迄プラットフォームの方を向いて居た足を、入口の見當に向け易へた。然しまだ歩き出す程の決心も附かなかつたと見えて、茫然として、停車場前の茶屋の赤い暖簾を眺めて居ると、いきなり大きな聲を出して遠くから呼びとめられた。自分は此聲を聞くと共に、其所有者は長藏さんであつて、松原以來の聲であると云ふ事を悟つた。振り返ると、長藏さんは遠方から顔丈斜に出して、しきりに此方を見て、首を堅に振つてゐる。何でも身體は便所の塀にかくれてゐるらしい。折角呼ぶものだからと思つて、自分は長藏さんの顔を目的に歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乘る前に一寸用を足したら善からう」

と云ふ。自分は夫には及ばんから、一應辭退して見たが、中々承知しさうもないから、そこで長藏さんと相並んで、きたない話だが、小便を垂れた。其の時自分の考へは又變つた。自分は身體より外に何にも持つて居ない。取られ樣にも瞞られ樣にも、名譽も財產もないんだから初手から見込の立たない代物である。昨日の自分と今日の自分とを混同して、長藏さんを恐ろしがつたのは、免職になりながら俸給の差し押を苦にする樣なものであつた。長藏さんは教育のある男ではあるまいが、自分の風體を見て一目騙るべからずと看破するには教育も何も要つたものではない。だからことによると、自分を坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだらうと思ひ出した。夫れなら夫れで構はない。給料のうちを幾分か遣れば濟む事だと考へながら用を足した。——實は自分が此丈の結論に到着する爲には、僅かの時間内だが是程の手數と推論とを要したのである。此位骨を折つてすら、まだ長藏さんのボン引きなる事を所謂ボン引きなる純粹の意味に於て會得する事が出來なかつたのは、年が十九だつたからである。

年の若いのは實に損なもので、こんなにボン引きの近所迄どうか、かうか、漕ぎ附けながら、夫でも、もしや好意づくの世話ずきから起つた親切ぢやあるまいかと思つて、飛んだ氣兼をしたのは可笑しかつた。實は二人して、用を足して、のそ〳〵三等待合所の入口迄來た時、自分は比較的威儀を正して長藏さんに、こんな事を云つたんである。

「あなたに、わざ〳〵先方迄連れて行つて頂いては恐縮ですから、もう是れで澤山です」

すると長藏さんは返事もせずに變な顏をして、默つて自分の方を見て居るから、是は禮の云ひ樣がわるいのかとも思つて、

「色々御世話になつて難有いです。是から先はもう僕一人で遣りますから、どうか御構ひなく」

と云つて、頻に頭を下げた。すると、

「一人で遣れるものかね」

と長藏さんが云つた。此の時丈は御前さんを省いた樣である。

「なに遣れます」

と答へたら、

「どうして」

と聞き返されたんで、少し面喰つたが、

「今貴方に伺つて置けば、先へ行つて貴方の名前を云つて、どうかしますから」

ともぢ〳〵述べ立てると、
「御前さん、私の名前位で、すぐ坑夫になれると思つてるのは大間違ひだよ。坑夫なんて、そんなに容易になれるもんぢやないよ」
と跳附けられちまつた。仕方がないから
「でも御氣の毒ですから」
と言譯旁挨拶をすると、
「なに遠慮しないでもいゝ、先方迄送つてあげるから心配しないがいゝ。――袖摩り合ふも何とかの因縁だ。ハ、、、、」
と笑つた。そこで自分は最後に、
「どうも濟みません」
と禮を述べて置いた。
夫から二人でベンチへ隣り合せに腰を掛けてゐると、段々停車場へ人が寄つてくる。大抵は田舍者である。中には長藏さんの樣な袢天兼どてらを着た上に、天秤棒さへ荷いだのがある。さうかと思ふと光澤のある前掛を締めて、中折帽を妙に凹ました江戸ッ子流の商人もある。其他の何やら蚊やらでベンチの四方が足音と人聲でざわついて來た時に、切符口の戸がかたりと開いた。待ち兼ねた連中は急いで立ち上がつて、みんな鐵網の前へ集つてくる。此の時長藏さんの態度は落ちつき拂つたものであつた。例の太刀の如く反つ繰返つた「朝日」を厚い唇の間に啣へながら、あの角張つた顏を三が二程自分の方へ向けて、

「御前さん、汽車賃を持つて居なさるかい」
と聞た。又自分の未熟な所を發表する樣だが、實を云ふと汽車賃の事は今が今迄自分の考へには毫も上らなかつたのである。汽車に乘るんだなと思ひながら、幾何金を拂ふものか、又金を拂ふ必要があるものか、頓と思ひ至らなかつたのは愚の至である。愚はどこ迄も承認するが此の質問に出逢ふ迄は無賃で乘れるかの如き心持で平氣でゐたのは事實である。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長藏さんに
さへ食つ附いてさへ居れば、どうか爲て呉れるんだらうと云ふ依賴心が妙に潛んでゐたんだらう。但し自分ぢや決してさう思つて居なかつた。今でもさうだとは自分の事ながら申しにくい。けれども、斯う云ふ安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつて、停車場へ來て汽車賃の汽の字も考へずに居られるもんぢやない。其の癖こんなに依賴して居る長藏さんに對して、もう御世話にならなくつても、好う御座いますの、是から一人で行きますのと平に同行を斷つたのは、どう云ふ了簡だらう。自分は斯う云ふ場合に度々出逢つてから、仕舞には自分で一つの理論を立てた。――病氣に潛伏期がある如く、吾々の思想や、感情にも潛伏期がある。此の潛伏期の間には自分で其の思想を有ちながら、其の感情に制せられながら、ちつとも自覺しない。又此の思想や感情が外界の因緣で意識の表面へ出て來る機會がないと、生涯其の思想や感情の支配を受けながら、自分は決してそんな影響を豪つた覺がないと主張する。其の證據は此の通りと、どし〳〵反對の行爲言動をして見せる。が其の行爲言動が、傍から見ると矛盾になつてゐる。自分でもはてなと思ふ事がある。はてなと氣が附かないでも飛んだ苦しみを受ける場合が起つてくる。自分が前に云つた少女に苦しめられたのも、元はと云へば、矢つ張り此の潛伏者を自覺し得なかつたからである。

此の正體の知れないものが、少しも自分の心を冒さない先に、劇藥でも注射して、悉く殺し盡す事が出來たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに濟んだらうに、所がさう思ふ樣に行かんのは、人にも自分にも氣の毒の至りである。

それで、自分が長藏さんから「御前さん汽車賃を持つて居なさるか」と問はれた時に、自分ははつと思つて、少からず狼狽た。三十二錢のうちで饅頭の代と茶代を引くと何にもありやしない。汽車賃もない癖に、坑夫にならうなんて呑込顏に受合つたんだから、自分は少し圖迂々々しい人間であつたんだと氣がついたら、急に頰邊が熱くなつた。其の時分の事を考へると自分ながら可愛らしい。是れが今だつたら、たとひ電車の中で借金の催促をされ樣とも、只困る丈で、決して赤面はしない。ましてほん引きの長藏さん抔に對して、神聖なる羞恥の血色を見せるなんて勿體ない事は、夢にも遣る氣遣ひはありやしない。

自分はどう云ふものか、長藏さんに對して汽車賃はありますと答へたかつた。然し實際がないんだから嘘を吐く譯には行かない。嘘を吐きつ放にして濟ませられるなら、思ひ切つて、嘘を吐く事にしたらうが、とにかく今切符を買ふと云ふ間際で、吐けばすぐ露現して仕舞ふんだから始末がわるい。と云つて汽車賃はありませんと答るのが如何にも苦痛である。どうも子供だから、しかも滿更の子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色氣の附いた、煩悶をしてゐる、つまらん常識がある樣な、ない樣な子供だから、猶々不都合だつた。そこで汽車賃はありますとも、ありませんとも云ひにくかつたもんだから、

「少しあります」

と答へた。それも響の物に應ずる如く、停滯なく出ればよかつたが、何しろ勿體なくも頰邊を赤くしたあとで、甚だ恐縮の態度で出したんだから、馬鹿である。

「少しつて、御前さん、若干持つてるい」

と長藏さんが聞き返した。長藏さんは自分が頰邊を赤くしても、恐縮しても、丸で頓着しない。たゞいくら持つてるか聞きたい樣子であつた。所が生憎肝心の自分にはいくらあるか判然しない。何しろ〆て三十二錢のうち、饅頭を三皿食つて、茶代を五錢やつたんだから、殘る所は澤山ぢやない。あつても無くつても同じ位なものだ。

「ほんの僅かです。とても足りさうもないです」

と正直な所を云ふと、

「足りない所は、私が足して上げるから、構はない。何しろ有る丈御出し」

と、思つたよりは平氣である。自分は此の際一錢銅や二錢銅を勘定するのは、如何にも體裁がわるいと考へた上に、有るものを無いと隱す樣に取られては厭だから、懷から例の墓口を取り出して、墓口ごと長藏さんに渡した。此の墓口は鰐の皮で拵へた頗る上等なもので、親父から貰ふ時も、是れは高價な品であると云ふ講釋を篤と聽かされた贅澤物である。長藏さんは墓口を受け取つて、ちよつと眺めて居たが、

「ふゝん、安くないね」

と云つたなり中味も改めずに腹掛の隱しへ入れちまつた。中味を改めない所はよかつたが、

「ぢや、私が切符を買つて來て上げるから、ちやんと茲處に待つて居なくつちや、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすた〳〵行つて仕舞つた。見てゐると人込の中へ這入つたなり振り返りもしないで切符を買ふ番のくるのを待つてゐる。さつき松原の掛茶屋を出てから、今先方迄の長藏さんは始終自分の傍に食つ附いて居て、たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶ位であつたのに、墓口を受け取つて、切符を買ふ時は丸で自分を忘れて居る樣に見受けられた。あんまり人が多くつて、此方へ眼をつける暇がなかつたんだらう。之に反して自分は一生懸命に長藏さんの後姿を見守つて、札を買ふ順番が一人々々に廻つて來るたんびに長藏さんが段々切符口へ近附いて行くのを、遠くから妙な神經を起して眺めてゐた。墓口は立派だが中を開けられたら銅貨が出る許りだ。開けて見て、何だ是つぱかりしか持つてゐないのかと長藏さんが驚くに違ない。どうも氣の毒である。いくら足し前をするんだらう抔と入らざる事を苦に病んで居ると、やがて長藏さんは平生の顔付で歸つて來た。

「さあ、是れが御前さんの分だ」

と云ひながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも云はない。極りが悪かつたから、自分も只

「難有う」

と受取つたぎり賃錢の事は口へ出さなかつた。墓口の事もそれなりにして置いた。長藏さんの方でも墓口の事はそれつきり云はなかつた。從つて墓口はつひに長藏さんに遣つた事になる。

それから、とう〳〵二人して汽車へ乘つた。汽車の中では別に是と云ふ出來事もなかつた。只自分の隣りに腫物だらけの、腐爛目の、痙攣のある男が乘つたので、急に心持が惡くなつて向ふ側へ廂を移した。

544
414
190

どうも當時の狀態を今からよく考へて見ると餘つ程可笑しい。生家を逃亡て、坑夫に迄、なり下る決心なんだから、大抵の事に辟易しさうもないもんだが矢張り醜ないもの丶傍へは寄りつき度なかつた。あの按排では自殺の一日前でも、腐爛目の隣を逃げ出したに違ない。それなら萬事かう几帳面に段落を附けるかと思ふと、さうでないから困る。第一長藏さんや茶店のかみさんに逢つた時なんぞは平生の自分にも似ず、喝の音も出さずに心から大人しくしてゐた。議論も主張も氣慨も何もあつたもんぢやありやしない。尤も是れは大分餓じい時であつたから、少しは差引いて勘定を立るのが至當だが、決して空腹の爲ばかりとは思へない。どうも矛盾——又矛盾が出たから廢さう。

自分は自分の生活中尤も色彩の多い當時の冒險を暇さへあれば考へ出して見る癖がある。考へ出す度に、昔の自分の事だから遠慮なく嚴密なる解剖の刀を揮つて、縱横十文字に自分の心緒を切りさいなんで見るが、其の結果はいつも千遍一律で、要するに分らないとなる。昔しだから忘れちまつたんだ抔と云つては不可ない。此の位切實な經驗は自分の生涯中に二度とありやしない。二十以下の無分別から出た無茶だから、其の筋道が入り亂れて要領を得んのだと評しては猶不可ない。經驗の當時こそ入り亂れて滅多矢鱈に旨動するが、其の旨動に立ち至る迄の經過は、落ち着いた今日の頭腦の批判を待たなければとても分らないものだ。此の鑛山行だつて、昔の夢の今日だから、此の位人に解る樣に書く事が出來る。色氣がなくなつたから、あらひざらひ書き立てる勇氣があると云ふ許りぢやない。其時の自分を今の眼の前に引擦り出して、根掘り葉掘り研究する餘裕がなければ、たとひ是程にだつて到底書けるものぢやない。俗人は其の時其の場合に書いた經驗が一番正しいと思ふが、大間違である。刻下の事情と云ふものは、轉瞬の客

氣に驅られて、飛んでもない誤謬を傳へ勝ちのものである。自分の鑛山行抔も其の時其の儘の心持を、日記にでも書いて置いたら、定めし乳臭い、氣取つた、僞りの多いものが出來上つたらう。到底、かうやつて人の前へ御覽下さいと出された義理ぢやない。

自分が腐爛目の難を避けて、向ふ側に席を移すと、長藏さんは一目一寸自分と腐爛目を見たなりで、矢張り元の所へ腰を掛けた儘動かなかつた。長藏さんの神經が自分より餘程剛健なのには少からず驚嘆した。のみならず、平氣な顏で腐爛目と話し出したに至つて、少しく愛想が盡きた。

「又山行きかね」

「あゝ又一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長藏さんは此の時何か返事をしかけたんだらうが不圖自分と顏を見合せたものだから、其の儘厚い唇を閉ぢて横を向いて仕舞つた。其の顏について廻つて、腐爛目は、

「又大分儲かるね」

と云つた。自分は此言葉を聞くや否や忽ち窓の外へ顏を出した。さうして窓から唾液をした。すると其唾液が汽車の風で自分の顏へ飛んで來た。何だが不愉快だつた。前の腰掛で知らない男が二人辯じてゐる。

「泥棒が這入るとするぜ」

「こそ〳〵がかい」

「なに强盜がよ。それで以て、拔身か何かで威嚇した時によ」

「うん、それで」

「それで、主人が、泥棒だからつてんで賍錢を遣つて歸したとするんだ」

「うんそれから」

「後で泥棒が賍錢と氣がついて、あすこの亭主は賍錢使だ〳〵つて方々振て歩くんだ。常公の前だが、何方が罪が重いと思ふ」

「何方たあ」

「其の亭主と泥棒がよ」

「さうさなあ」

と相手は解決に苦しんでゐる。自分は眠くなつたから、窓の所へ頭を持たしてうと〳〵した。

寐ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の經過が苦痛になるものは寐るに限る。死んでも恐らく同じ事だらう。然し死ぬのは、やさしい樣で中々容易でない。先づ凡人は死ぬ代りに睡眠で間に合せて置く方が輕便である。柔道をやる人が、時々朋友に咽喉を締めて貰ふ事がある。夏の日永のだるい時抔は、絕息した儘五分も道場に死んで居て、それから活を入れさせると、生れ代る樣な好い氣分になる――但し人の話だが。――自分は、もしや死につきりに死んぢまやしないかと云ふ神經の爲に、ついぞ此の荒療治を賴んだ事がない。睡眠は是程の效驗もあるまいが、其代り生き戻り損ふ危險も伴つてゐないから、心配のあるもの、煩悶の多いもの、苦痛に堪へぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものに取つては、至大なる自然の賚である。其の自然の賚が偶然にも今自分の頭の上に落ちて來た。難有いと

禮を云ふ閑もないうちに、うつとりとしちまつて、生きてゐる以上は是非共其の經過を自覺しなければならない時間を、丸潰しに潰してゐた。所が眼が覺めた。後から考へて見たら、汽車の動いてる最中に寐込んだもんだから、汽車の留つた爲に、眠りが調子を失つて何處かへ飛んで行つたのである。自分は眠つて居ると、時間の經過丈は忘れてゐるが、空間の運動には依然として反應を呈する能力がある樣だ。だから本當に煩悶を忘れる爲には矢張り本當に死なゝくつては駄目だ。但し煩悶がなくなつた時分には、又生き返り度なるに極つてるから、正直に理想を云ふと、死んだり生きたり互違にするのが一番よろしい。――こんな事をかくと、何だか剽輕な冗談を云つてる樣だが決してそんな浮いた了見ぢやない。本氣に眞面目を話してる積である。其の證據には此の理想は只今過去を回想して、面白半分興に乘じて、好い加減に附け加へたんぢやない。實際汽車が留つて、不意に眼が覺めた時、この通りに出て來たのである。馬鹿氣た感じだから滑稽の樣に思はれるけれども其の時は正直にこんな馬鹿氣た感じが起つたんだから仕方がない。此の感じが滑稽に近ければ近い程、自分は當時の自分を可愛想に思ふのである。こんな常識をはづれた希望を、眞面目に抱かねばならぬ程、其の時の自分は情ない境遇に居つたんだと云ふ事が判然するからである。

自分が不圖眼を開けると、汽車はもう留つてゐた。汽車が留まつたなと云ふ考へよりも、自分は汽車に乘つて居たんだなと云ふ考へが第一に起つた。起つたと思ふが早いか、長藏さんが居るんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかつたんだ、生家を出奔したんだ、何うしたんだ、かうしたんだと丸で十二三のたんだがむら〳〵と塊まつて、頭の底から一度に湧いて來た。其の速い事と云つたら、言語に絶すると云はうか、電光石火と評しやうか、實に恐ろしい位だつた。ある人が、瀧れか、つた其の刹那に、自分の過去の一生を、細大漏らさずあり〳〵と、眼の前に見た事があると云ふ話を其の後聞いたが、自分の此の時の經驗に因つて考へると、これは決して嘘ぢやなからうと思ふ。要するに其の位早く、自分は自分の實世界に於ける立場と境遇とを自覺したのである。自覺すると同時に、急に厭な心持になつた。只厭では、とても形容が出來ないんだが、去ればと云つて、別に敍述し樣もない心持ちだからたゞの厭でとめて置く。自分と同じ樣な心持ちを經驗した人ならば、只是丈で、成程あれだなと、直ぐ覺づくだらう。又經驗した事がないならば、それこそ幸福だ。決して知るに及ばない。

其の内同じ車室に乘つてゐたものが二三人立ち上がる。外からも二三人這入つて來る。何處へ陣取らうかと云ふ眼附できよろ〳〵するのと、忘れものはないかと云ふ顏附きでうろ〳〵するのと、それから何の用もないのに姿勢を更へて窓へ首を出したり、欠伸をしたりするのと、が一度に合併して、凡て動搖の狀態に世の中を崩し始めて來た、自分は自分の周圍のものが、悉く活動しかけるのを自覺してゐた。自覺すると共に、自分は普通の人間と違つて、みんなが活動する時分でさへ、他に釣り込まれて氣分が動いて來ない樣な仲間外れだと考へた。袖が觸れ違つて、膝を突き合せてゐながらも、魂丈は丸で緣も山緒もない、他界から迷ひ込んだ幽靈の樣な氣持であつた。今迄は、どうか、かうか、人並に調子を取つて來たのが汽車が留まるや否や、世間は急に陽氣になつて上へ騰る。自分は急に陰氣になつて下へ降る、到底交際は出來ないんだと思ふと、脊中と胸の厚さがしゆうと減つて、臟腑が薄つ片な一枚の紙の樣に壓しつけられる。途端に魂丈が地面の下へ拔け出しちまつた。洵に申譯のない、御恥づかしい心持ちをふらつかせ

て、凹んでゐた。

所へ長藏さんが、立つて來て、

「御前さん、まだ眼が覺めないかね。此處から降りるんだよ」

と注意して呉れた。それで漸く成程と氣が附いて立ち上つた。魂が地の底へ拔け出して行く途中でも、手足に血が通つてゐるうちは、呼ぶと返つて來るから可笑しなものだ。然し是れがもう少し烈しくなると、中中思ふ樣に魂が身體に寄りついて呉れない。其の後臺灣沖で難船した時抔は、殆ど魂に愛想を盡かされて、非常な難義をした事がある。何にでも上には上があるもんだ。是れが行き留りだの、突き當りだのと思つて、安心してかゝると、飛んだ目に逢ふ。然し此の時は此の心持が自分に取つて尤も新しくて、しかも甚だ苦い經驗であつた。

長藏さんのどてらの尻を嗅ぎながら改札場から表へ出ると、大きな宿の通りへ出た。一本筋の通りだが存外廣い、許りではない、心持の判然する程眞直である。自分は此の廣い往還の眞中に立つて遙か向ふの宿外を見下した。其の時一種妙な心持になつた。此の心持ちも自分の生涯中にあつて新らしいものであるから、序に此處に書いて置く。自分は肺の底が拔けて魂が逃げ出しさうな所を、漸く呼びとめて、多少人間らしい了簡になつて、宿の中へ顏を出した許りであるから、魂が吸く息につれて、やつと胎内に舞ひ戻つた丈で、まだふわ〳〵してゐる。少しも落ち附いてゐない。だから此の世にゐても、此の汽車から降りても、此の停車場から出ても、又此の宿の眞中に立つても、云はゞ魂がいや〳〵ながら、義理に働いてくれた樣なもので、決して本氣の沙汰で、自分の仕事として引き受けた專門の職責とは、心得られなかつた

位、鈍い意識の所有者であつた。そこで、ふらついてゐる、氣の遠くなつてゐる、凡てに興味を失つた、かなつぼ眼を開いて見ると、今迄は汽車の箱に詰め込まれて、上下四方とも四角に仕切られてゐた眼界が、はつと云ふ間に、一本筋の往還を沿うて、十丁許り飛んで行つた。しかも其の突當りに滴る程の山が、自分の眼を遮りながらも、邪魔にならぬ距離を有つて、どろんとしたわが眸を翠の裡に吸寄せてゐる。——そこで何んとなく今云つた樣な心持になつちまつたのである。

第一には大道砥の如しと、成語にもなつてる位で、平たい眞直な道は蟠まりのない爽なものである。もつと分り安く云ふと、眼を迷附せない。心配せずに此方へ御出と誘ふ樣に出來上つてるから、少しも遠慮や氣兼をする必要がない。許りぢやない。御出と云ふから一本筋の後を食ッ附いて行くと、何處迄も行ける。奇體な事に眼が横町へ曲り度ない。道が眞直に續いてゐればゐる程、眼も眞直に行かなくつては、窮屈で且不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して成り上つたものと自分は堅く信じてゐる。夫れから左右の家並を見ると、——是は瓦葺も藁葺もあるんだが——瓦葺だらうが、藁葺だらうが、そんな差別はない。遠くへ行けば行く程次第々々に屋根が低くなつて、何百軒とある家が、一本の針金で勾配を纏められる爲に向ふのはづれから此方迄突き通されてる樣に、行儀よく、斜に一筋を引つ張つて、何處迄も進んでゐる。さうして進めば進む程、地面に近寄つてくる。自分の立つてゐる左右の二階屋抔は——宿屋の樣に覺えてゐるが——見上げる程の高さであるのに、宿外れの軒を透して見ると、指の股に這入ると思はれる位低い。其途中に暖簾が風に動いてゐたり、腰障子に大きな蛤がかいてあつたりして、多少の變化は無論あるけれども、軒並丈を遠く迄追つ掛けて行くと、一里が半秒で眼の中に飛び込んで來る。夫程

明瞭である。

前に云つた通り自分の魂は二日醉の體たらくで、何處迄もとろんとしてゐた。所へ停車場を出るや否や斷りなしに此の明瞭な――盲目にさへ明瞭な此景色にばつたり打つかつたのである。魂の方では驚かなくつちやならない。又實際驚いたには違ひないが、今迄あやふやに不精々々に徘徊じて居た情性を一變して屹となるには、多少の時間がかゝる。自分の前に云つた一種妙な心持ちと云ふのは、魂が寐返りを打たないさき、景色が如何にも明瞭であるなと心附いたあと、――其の際どい中間に起つた心持ちである。此の景色は斯樣に暢達して、斯樣に明白で、今迄の自分の情緒とは、丸で似つかない、景氣のいゝものであつたが、自身の魂がおやと思つて、本氣に此の外界に對ひ出したが最後、いくら明かでも、いくら暢びりしてゐても、全く實世界の事實となつて仕舞ふ。實世界の事實となると如何な御光でも難有味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂、がある特殊の狀態に居た爲――明かな外界を明かなりと感受する程の能力は持ちながら、是れは實感であると自覺する程作用が鋭くなかつた爲――此の眞直な道、此の眞直な軒を、事實に等しい明かな夢と見たのである。此の世でなければ見る事の出來ない明瞭な程度と、これに伴ふ爽涼した快感を以て、他界の幻影に接したと同樣の心持になつたのである。自分は大きな往來の眞中に立つてゐる。其往來は飽迄も長くつて、飽迄も一本筋に通つて居る。歩いて行けば其外迄行かれる。慥に此宿を通り抜る事は出來る。左右の家は觸れば觸る事が出來る。二階へ上れば上る事が出來る。出來ると云ふ事はちやんと心得てゐながらも、出來ると云ふ觀念を全く遺失して、單に切實なる感能の印象丈を眸のなかに受けながら立つてゐた。

自分は學者でないから、かう云ふ心持ちは何と云ふんだか分らない。殘念な事に名前を知らないのでついかう長くかいて仕舞つた。學問のある人から見たら、そんな事をと笑はれるかも知れないが仕方がない。其の後是れに似た心持は時々經驗した事がある。然し此の時程強く起つた事は曾てない。だから、ひよつとすると何かの參考になりはすまいかと思つて、わざ〳〵此處に書いたのである。但し此心持ちは起ると忽ち消えて仕舞つた。

見ると日はもう傾きかけてゐる。初夏の日永の頃だから、日差から判斷して見ると、まだ四時過ぎ、恐らく五時にはなるまい。山に近い所爲か、天氣は思つた程よくないが、現に日が出てゐる位だから惡いとは云はれない。自分は斜かけに、長い一筋の町を照らす太陽を眺めた時、あれが西の方だと思つた。東京を出て北へ北へと走つた積だが、汽車から降りて見ると、丸で方角がわからなくなつてゐた。此の町を眞直に町の通つてゐるなりに、下ると、突き當りが山で、其の山は方角から推すと、矢張り北であるから、自分と長藏さんは相變らず、北の方へ行くんだと思つた。

其の山は距離から云ふと大分ある樣に思はれた。高さも決して低くはない。色は眞蒼で、横から日の差す所丈が光る所爲か、陰の方は蒼い底が黑ずんで見えた。尤も是れは日の加減と云ふよりも杉檜の多い爲かも知れない。ともかくも蓊鬱として、奥深い樣子であつた。自分は傾きかけた太陽から、眼を移して此の蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だらうか、又は續きが奥の方にあるんだらうかと考へた。長藏さんと竝んで、段々山の方へ歩いて行くと、どうあつても、向ふに見える山の奥の又其の奥が果しもなく續いてゐて、さうして其山々は悉く北へ北へと連なつてゐるとしか思はれなかつた。是れは自分達が山の方へ

歩いて行くけれど、只行く丈で中々麓へ足が屆かないから、山の方で奥へ〳〵と引き込んでいく樣な氣がする結果とも云はれるし。日が段々傾いて陰の方は蒼い山の上皮と、蒼い空の下層とが、雙方で本分を忘れて、好い加減に他の領分を犯し合つてるんで、眺める自分の眼にも、山と空の區劃が判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云ふ意識を忘却して、矢張り山の續きとして空を見るからだとも云はれる。さうして其の空は大變廣い。さうして際限なく北へ延びてゐる。さうして自分と長藏さんは北へ行くんである。

自分は昨夕東京を出て、千住の大橋迄來て、袷の尻を端折つたなり、松原へかゝつても、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乘つても、空腔の儘で押し通して來た。それでも暑い位であつた。所が此の町へ這入つてから何だか空腔では寒い氣持がする。寒いと云ふよりも淋しいんだらう。長藏さんと默つて足丈を動かしてゐると、丸で秋の中を通り抜けてる樣である。そこで自分は又空腹になつた。度々空腹になつた事許りを書くのは如何はしい事で、且此の際空腹になつては、どうも詩的でないが、致し方がない。實際自分は空腹になつた。家を出てから、只歩く丈で、人間の食ふものを食はないから、忽ち空腹になつちまふ。どんなに氣分がわるくつても、煩悶があつても、魂が逃げ出しさうでも、腹丈は十分減るものである。いや、さう云ふよりも、魂を落附ける爲には飯を供へなくつちや不可ないと云ひ換へるのが適當かも知れない。品の惡い話だが、自分は長藏さんと竝んで往來の眞中を歩きながら、左右に眼をくばつて、兩側の飲食店を覗き込む樣にして長い町を下つて行つた。所が此の町には飲食店が大分ある。旅屋とか料理屋とか云ふ上等なものは駄目としても、自分と長藏さんが這入つて然るべきやたいち流のがあすこにも此處にも見える。然し長藏さんは毫も支度をしさうにない。最前の我多馬車の時の樣に「御前さん夕食を食ふかね」とも聞いて呉れない。其の癖自分と同じ樣に、きよろ〳〵「兩側に眼を配つて何だか發見したい樣な氣色があり」と見える。自分は今に長藏さんが恰好な所を見附けて、晩食をしたゝめに自分を連れ込む事と自信して、氣を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下つて行つた。

自分は空腹を自白したが、倒れる程ひもじくは無かつた。胃の中にはまだ先刻の饅頭が多少殘つてる樣にも感ぜられた。だから歩けば歩かれる。たゞ汽車を下りるや否や減り込みさうな精神が、眞直な往來の眞中に抛り出されて、おやと眼を覺したら、山里の空氣がひやりと、夕日の間から皮膚を冒して來たんで、心機一轉の結果として茲に何か食つて見たくなつたんである。從つて食はなければ食はないでも濟む。長藏さん何か食はして呉れませんかと云ふ程苦しくもなかつた。然し何だか口が淋しいと見えて、しきりに繩暖簾や、お煮〆や、御中食所が氣にかゝる。相手の長藏さんが又申し合せた樣に右左と覗き込むので、此方は益〻食意地が張つてくる。自分は此の長い町を通りながら、自分等に適當と思ふ程度の一膳めし屋を遂に九軒迄勘定した。數へて九軒目に至つたら、左しもに長い宿はとう〳〵御仕舞になり掛けて、もう一町も行けば宿外れへ出拔けさうである。甚だ心細かつた。時に不圖右側を見ると、又酒めしと云ふ看板に逢着した。すると自分の心のうちに是れが最後だなと云ふ感じが起つた。それが爲か煤けた軒の腰障子に、肉太に認めた酒めし、御肴と云ふ文字が尤も劇烈な印象を以て自分の頭に映じて來た。其映じた文字がいまだに消えない。酒の字でも、めしの字でも、御肴の字でもあり〳〵見える。此の樣子では、いくら毫祿しても此の五字丈は、そつくり其の儘、紙の上に書く事が出來るだらう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみ〴〵見てゐると、不思議な事に長藏さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけてゐる。自分は流石頑強の長藏さんも今度こそ食ひに這入るに違なからうと思つた。所が這入らない。其の代りぴたりと留つた。見ると腰障子の奥の方では何だか赤いものが動いてゐる。長藏さんの顔色を窺ふと、何でも此の赤いものを見詰めてゐるらしい。此の赤いものは無論人間である。が長藏さんが何故立ち留つて此の赤い人間を覗き込むのか、頓と自分には分らなかつた。人間には違ないが、只漠暗く赤い許りで、顔附抔は無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かた〴〵立ち留つてゐると、やがて障子の奥から赤毛布が飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だらうと云ふ人があるかも知れないが、實際此の男は赤毛布で身を堅めて居た。其の代り下には手織の單衣一枚丈しきや着てゐないんだから、つまり〴〵て見ると自分と大した相違はない事になる。尤も單衣一枚で凌いでると云ふ事は、あとからの發見で、障子の影から飛び出した時には只赤い許りであつた。

すると長藏さんは、いきなり、此の赤い男の側へつか〴〵遣つて行つて、

「お前さん、働く氣はないかね」

と云つた。自分が長藏さんに捕まつた時に聞かされた、第一の質問は矢張り「働く氣はないかね」であつたから、自分はおや又働かせる氣かなと思つて、少からぬ興味の念に驅られながら二人を見物してゐた。其の時此の長藏さんは、誰を見ても手頃な若い衆とさへ鑑定すれば、働く氣はないかねと持ち掛ける男だと云ふ事を判然と覺つた。つまり長藏さんは働かせる事を商賣にするんで、決して自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推擧した譯ではなかつた。大方どこで、どんな人に、幾人逢はうとも、販行で押した樣な口調で御前さん働く氣はないかねを根氣よく繰返し得る男なんだらう。考へると、よくこんな商賣を厭きもせず、長の歳月遣られたものだ。長藏さんだつて、天性御前さん働く氣はないかねに適した譯でもあるまい。矢つ張り何かの事情已を得ず御前さんを復習してゐるんだらう。かう思へば、まことに罪のない男である。要するに藝がないから外の事は出來ないんだが、外の事が出來ないんだと意識して煩悶する氣色もなく、自分でなくつちや御前さんをやり得る人間は天下廣しと雖も二人と有るまいと云ふ程の平氣な顔で、やつてゐる。

其の當時自分に是丈の長藏觀があつたら大分面白かつたらうが、何しろ魂に逃げだされ損なつてゐる最中だつたから、中々そんな餘裕は出て來なかつた。此の長藏觀は當時の自分を他人と見做して、若い時の回想を紙の上に寫す只今、始めて序の節に浮かんだのである。だから矢ッ張り紙の上丈で消えてなくなるんだらう。然し其の時其の砌りの長藏觀と比較して見ると大分違つてる樣だ。――

自分は長藏さんと赤毛布の立談を聞きながら、自分は長藏さんから毫も人格を認められてゐなかつたと云ふ事を見出した。――尤も人格は此際少し可笑しい。苟くも東京を出奔して坑夫に迄なり下がるものが人格を云々するのは變挺な矛盾である。夫は自分も承知してゐる。現に今筆を執つて人格と書き出したら、何となく馬鹿氣てゐて、思はず噴き出しさうになつた位である。自分の過去を顧みて噴き出しさうになる今の身分を、昔と比べて見ると實に結構の至りであるが、其の時は中々噴き出す所の騒ぎではなかつた。

――長藏さんは明かに自分の人格を認めてゐなかつた。

と云ふのは彼れは此の酒、めし、御肴の裏から飛び出した若い男を捕まへて、第二世の自分である如く、

全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もつと立ち入つて云へば、同じ熱心の程度を以て、同じく坑夫になれと勸誘してゐる。それを自分は何故だか少々怪しからん樣に考へた。其の意味を今から說明して見ると、ざつとこんな譯なんだらう。——

坑夫は長藏さんの云ふ如く頗る結構な家業だとは、常識を質に入れた當時の自分にも尤もと思ひ樣がなかつた。先牛から馬、馬から坑夫といふ位の順だから、坑夫になるのは不名譽だと心得てゐた。自慢にやならないと覺つてゐた。だから坑夫の候補者が自分ばかりと思の外突然居酒屋の入口から赤毛布になつて、あらはれ樣とも別段神經を惱す程の大事件ぢやない位は分りきつてる。然し此の赤毛布の取扱方が全然自分と同樣であると、同樣であると云ふ點に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般な人間であると云ふ氣になつちまう。取扱方の同樣なのを延き伸ばして行くと、つまり取り扱はれるものが同樣だからと云ふ妙な結論に到着してくる。自分はふら〳〵と其處へ到着してゐたと見える。長藏さんが働かないと談判してゐるのは赤毛布で、赤毛布は卽はち自分である。何だか他人が赤毛布を着て立つてる樣には思はれない。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、さうして長藏さんから坑夫になれと談じつけられてゐる。そこで、どうも情なくなつちまつた。自分が直接に長藏さんと應對してゐる間は、人格も何も忘れてゐるんだが、自分が赤毛布になつて、君儲かるんだぜと說得されてゐる體裁を、自分が傍へ立つて見た日には方なしである。自分は果してこんなものかと、少しく興を醒まして赤毛布を、つら〳〵觀察してゐた。

所が不思議にも此の赤毛布が又自分と同じ樣な返事をする。被つてる赤毛布ばかりぢやない、心底から、

此の若い男は自分と同じ人間だつた。そこで自分はつく〳〵詰まらないなと感じた。其の上もう一つ詰らない事が重なつたのは、長藏さんが、にぐ〳〵しい程公平で、自分の方が赤毛布よりも坑夫に適してゐると云ふ所を少しも見せない。全く器械的にやつてゐる。先口だから、もう少し此方を贔屓にしたら好からうと思ふ位であつた。——是れで見ると人間の虛榮心はどこ迄も拔けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならないとか云ふ切齒詰つた時でさへ自分は是れ程の虛榮心を有つてゐた。泥棒に義理があつたり、乞食に禮式があるのも全く此の格なんだらう。——然し此の虛榮心の方は、自分卽ち赤毛布であると云ふことを自覺して、大に詰らなくなつたよりも、餘程詰らなさ加減が少かつた。

自分が大に詰らなくなつて、ぼんやり立つてゐると、二人の談判は見る間に片附いて仕舞つた。是れは必ずしも長藏さんが事程左樣に上手だからと云ふ譯ではない。赤毛布の方が事程左樣に馬鹿だつたからである。自分は此の男を一概に馬鹿と云ふが、あながち、自分に比較して輕蔑する氣ぢや決してない。自分の當時は、長藏さんの話をはい〳〵聞く點に於て、すぐ坑夫にならうと承知する點に於て、其の他色々の點に於て、全く此の若い男と同等卽ち馬鹿であつたのである。もし强ひて違ふ所を詮議したら赤毛布を被つてるのと紺を着てゐるとの差違位なものだらう。だから馬鹿と云ふのは、自分と同じく氣の毒な人と云ふ意味で、馬鹿のうちに少し位は同情の意を寓した積である。

で、馬鹿が二人長藏さんに尾いて一所に銅山迄引つ張られる事になつた。然るに自分が赤毛布と肩を竝べて歩き出した時、不圖氣が附いて見ると、さつきの詰まらない心持ちがもう消えてゐた。どうも人間の了見程出たり引つ込んだりするものはない。有るんだなと安心してゐると、既にない。ないから大丈夫と

思つてると、いや有る。有る樣で、ない樣で其の正體はどこ迄行つても捕まらない。其の後去る溫泉場で退屈だから、宿の本を借りて讀んで見たら色々下らない御經の文句が竝べてあつたなかに、心は三世にわたつて不可得なりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟な法螺だらうが、不可得と云ふのは、こんな事を云ふんぢやなからうかと思ふ。尤もある人が自分の話を聞いて、いや夫は念と云ふもので心ぢやないと反對した事がある。自分は孰れでも御隨意だから默つてゐた。こんな議論は全く餘計な事だが、何故云ひ度なるかといふと、世間には大變利口な人物でありながら、全く人間の心を解してゐないものが大分ある。心は固形體だから、去年も今年も蟲さへ食なければ大抵同じもんだらう位に考へてゐるには弱らせられる。さうして、さう云ふ呑氣な料簡で、人を自由に取り扱ふの、教育するの、思ふ樣にして見せるのと騷いでゐるから驚いちまふ。水だつて流れりや返つて來やしない。愚圖々々して居りや蒸發しちまふ。

兎に角此の際は、赤毛布と竝んで歩き出した時、もう先刻の詰らない考へが蒸發してゐたと云ふ事丈を記憶して置いて貰へばいゝ。——さうして吾ながら驚いたのは、どうも赤毛布と竝んで歩くのが愉快になつて來た。尤も此の男は茨城が何かの田舍もので、鼻から逃げる妙な發音をする。芋の事を芋と訓じたのは是から先きの逸話に屬するが、歩き出してから、あんまり難有い音聲ではなかつた。其の上顔が人並に出來てゐなかつた。此の男に比べると角張つた顎の、厚唇の長藏さん抔は威風堂々たるものである。のみならず茨城の田舍を突つ走つたのみで、未だ曾て東京の地を踏んだことがない。さうして、赤い毛布が妙に臭い。それにも拘らず自分は此の山里で、銅山行きの味方を得た樣な心持ちがして嬉しかつた。自分はどうせ捨てる身だけれども、一人で捨てるより道伴があつて欲い。一人で零落れるのは一人で零落れるのよりも淋しいもんだ。さう明らさまに申しては失禮に當るが、自分は此男に就て何一つ好いてる所はなかつたけれども、只一所に零落てくれると云ふ點丈が難有いので夫れが爲大いに愉快を感じた。それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見た位に、近しい仲となつて仕舞つた。是れから推して考へると、川で死ぬ時は、屹度船頭の一人や二人を引き擦り込みたくなるに相違ない。もし死んでから地獄へでも行く樣な事があつたなら、人の居ない地獄よりも、必ず鬼の居る地獄を擇ぶだらう。

さう云ふ譯で、忽ち赤毛布が好きになつて、約一二町も歩いて來たら、又空腹を覺え出した。よく空腹を覺える樣だが、是れは前段の續きで決して新しい空腹ではない。順序を云ふと、第一に精神が稀薄になつて、尤も刻下感に乏しい時に汽車を下りたんで、次に眞直な往來を眞直に突き當りの山迄見下したもんだから漸く正氣づいたのは前申した通りである。それが機緣になつて、今度は食氣が附いて、それから人格を認められてゐない事を認識して、甚だ詰らなくなつて、詰らなくなつたと思つたら坑夫の同類が出來て、少しく頽勢を挽回したと云ふ次第になる。だに因つて又空腹に立ち戻つたと說明したら善く呑み込めるだらう。偖空腹にはなつたが、最後の一膳飯屋はもう通り越してゐる。宿は既に盡きかゝつた。行く手は暗い山道である。到底願は叶ひさうもない。それに赤毛布は今食つた許りの腹だから、勇ましくどんどん歩く。どうも、降參しちまつた。そこで思ひ切つて、最後の手段として長藏さんに話しかけて見た。

「長藏さん、是からあの山を越すんですか」

「あの取附の山かい。あれを越しちや大變だ。是れから左へ切れるんさ」

と云つたなり又すたゝ歩いて行く。どうも是非に及ばない。

「まだ餘ッ程あるんですか、僕は少し腹が減つたんだが」
と、とう〳〵空腹の由を自白した。すると長藏さんは
「さうかい、芋でも食ふべい」
と、云ひながら、すぐさま、左側の芋屋へ飛び込んだ。よく約束した樣に、そこん所に芋屋があつたもんだ。之を大袈裟に云へば天佑である。今でも此の時の上出來に行つた有樣を回顧すると、可笑しい許ぢやない、嬉しい。尤も東京の芋屋の樣に奇麗ぢやなかつた。殆ど名狀しがたい位に眞黑になつた芋屋で、芋屋と云へば芋屋だが、芋專門ぢやない。と云つて芋の外に何を賣つてるんだつたか、今は忘れちまつた。食ふ方に氣を取られ過ぎた所爲かとも思ふ。
やがて長藏さんは兩手に芋を載せて、眞黑な家から、のそりと出て來た。入れ物がないもんだから、兩手を前へ出して、
「さあ、食つた」
と云ふ。自分は眼前に芋を突き附けられながら、たゞ
「難有う」
と禮を述べて、芋を眺めてゐた。どの芋にしやうかと考へた譯ではない。そんな選擇を許す樣な芋ではなかつた。赤くつて、黑くつて、瘠せてゐて、濕つぽさうで、夫で所々皮が剝げて、剝げた中から綠靑を吹いた樣な味が出てゐる。どれに打つかつたつて大同小異である。そんなら一目慘澹たる此芋の光景に辟易して、手を出さなかつたかと云ふと、さうでもない。自分の胃の狀況から察すると、芋中の纖多とも云はゐるべき此の御薩を快よく賞翫する食欲は十分有つた樣に思ふ。然し「さあ、食つた」と突き附けられた時は、何だかおびえた樣な氣分で、おいきたと手を出し損なつた。是れは大方「さあ、食つた」の云ひ方が惡かつたんだらう。
自分が芋を取らないのを見て、長藏さんは、少々もどかしいと云ふ眼附で、再び
「さあ」
と、例の顎で芋を指しながら、前へ出した手頸を、食へと云ふ相圖に一寸動かした。よく考へて見ると、兩手が芋で塞つてるんで、自分がどうかして遣らないと、長藏さんは、いくら芋が食ひ度ても、口へ持つて行く事が出來ないんであつた。じれたのも尤もである。そこで自分は漸く氣がついて、二の腕で、變な曲線を描いて、右の手を芋迄持つて行かうとすると、持つて行く途中で、芋の方が一本ころ〳〵と往來の中へ落ちた。是はすぐさま赤毛布が拾つた。拾つたと思つたら、
「此芋は好芋だ。おれが貰はう」
と云つた。夫で此の男は芋を芋と發音すると云ふ事が分つた。
自分は此時長藏さんから、最初に三本、あとから一本締て五本、前後二回に受取つたと記憶してゐる。
さうしてそれを懷かしげに食ひながら、愈宿外れ迄來ると又一事件起つた。
宿の外れには橋がある。橋の下は谷川で、靑い水が流れてゐる。自分はもう町が盡きるんだなとは思ひながら、つい芋に心を奪はれて、橋の上へ乘つかゝる迄は川があるとも氣がつかなかつた。所が急に水の音がするんで、おやと思ふと橋へ出てゐる。川がある。水が流れてゐる。——何だか馬鹿氣た話だが、事

實に尤も近い敍述をやらうとすると、まあ、かう書くのが一番適切だらう、かう書いて置く。決して小說家の弄ぶ樣な法螺七分の形容ではない。是が形容でないとすると其の時の自分が如何に芋を旨がつたかゞおのづから分明になる。偖水音に驚いて、欄干から下を見ると、音のするのは尤もで、川の中に大きな石が大分ある。さうして其の形狀が如何にも不作法に出來上つて、恰も水の通り道の邪魔になる樣に寢たり、突つ立つたりしてゐる。それへ水がやけに打つかる。しかも其の水には勾配がついてゐる。山から落ちた勢ひを濟し崩しに持ち越して、追つ懸けられる樣に跳つて來る。だから川と云ふ樣なものゝ、實は幅の廣い瀑を月賦に引き延ばした位なものである。從つて水の少い割には大變烈しい。鼻つ端の强い江戸ッ子の樣に無暗矢鱈に突つかゝつて來る。さうして白い泡を噴たり、青い飴の樣になつたり、曲つたり、くねつたりして下へ流れて行く。どうも非常に八釜しい。時に日は段々暮れてくる。仰向いて見たが、日向は何處にも見えない。只日の落ちた方角がほうつと明るくなつて、其の明かるい空を脊負つてる山丈が目立つて蒼黑くなつて來た。時は五月だけれども寒いもんだ。此の水音丈でも夏とは思はれない。況して入日を脊中から浴びて、正面は陰になつた山の色と來たら、——ありや全體何と云ふ色だらう。只形容する丈なら紫でも黑でも蒼でも構はないんだが、あの色の氣持を書かうとすると駄目だ。何でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ來て、どつと壓つ被さるんぢやあるまいかと感じた。それで寒いんだらう。實際今から一時間か二時間のうちには、自分の左右前後四方八方悉く、あの山の樣な氣味のわるい色になつて、自分も長藏さんも茨城縣も、全く世界一色の內に裏まれて仕舞ふに違ないと云ふ事を、夫とはなく意識して、一二時間後に起る全體の色を、一二時間前に、入日の方の局部の色として認めたから、局部から全體を唆かされて、今にあの山の色が廣がるんだなと、どつかで蟲が知らせた爲に、山の方が動き出して頭の上へ壓つ被さるんぢやあるまいかと云ふ氣を起したんだなと——自分は今机の前で解剖して見た。閑があると兎角餘計な事がしたくなつて困る。其の時は只寒い許りであつた。傍に居る茨城縣の毛布が羨ましくなつて來た位であつた。

すると橋の向ふから——向たつて突き當りが山で、左右が林だから、人家なんぞは一軒もありやしない。——實際自分はかう突然人家が盡きて仕舞はうとは、自分が自分の足で橋板を踏む迄も思ひも寄らなかつたのである。——其淋しい山の方から、小僧が一人やつて來た。年は十三四位で、冷飯草履を穿いて居る。顏は始めのうちはよく分らなかつたが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り拔けてる石ころ路を、たつた一人して此方へひよこ〳〵歩いて來る。どこから、どうして現れたんだか分らない。木下闇の一本路が一二丁先で、ぐるりと廻り込んで、先が見えないから、不意に姿を出したり、隱したりする樣な仕掛に出來てるのかも知れないが、何しろ時が時、場所が場所だから、一寸驚いた。自分は四本目の芋を口へ宛がつたなり、顎を動かす事を忘れて、此の小僧を少時の間眺めてゐた。尤も少時と云つたつて、僅か二十秒位なものである。芋は夫れからすぐに食ひ始めたに違ひない。

小僧の方では、自分等を見て、驚いたか驚かないか、其の邊はしかと確められないが、何しろ遠慮なく近附いて來た。五六間の此方から見ると頭の丸い、顏の丸い、鼻の丸い、いづれも丸く出來上つた小僧である。品質から云ふと赤毛布よりもずつと上製である。自分等が三人竝んで橋向ふの小路を塞いでゐるのを、頓と苦にならない樣子で通り拔け樣とする。頗る平氣な態度であつた。すると長藏さんが、又、

「おい、小僧さん」
と呼び留めた。小僧は臆した氣色もなく
「なんだ」
と答へた。ぴたりと踏み留つた。其の度胸には自分も少々驚いた。さすが此の日暮に山から一人で降りて來るがものはある。自分抔が此の小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を拔けるのが聊か苦になつたものだ。中中えらいと感心してゐると、長藏さんは、
「芋を食はないかね」
と云ひながら、食ひ殘しを、氣前よく、二本、小僧の鼻の前に出した。すると小僧は忽ち二本とも引つたくる樣に受け取つて、難有うとも何とも云はず、すぐ其の一本を食ひ始めた。此の手つ取り早い行動を熟視した自分は、成程山から一人で下りてくる丈あつて自分とは少々譯が違ふなと、又感心しちまつた。夫とも知らぬ小僧は無我無心に芋を食つてゐる。しかも頰張た奴を、唾液も交ぜずに、無暗に呑み下すので、咽喉が、ぐい〳〵と鳴る樣に思はれた。もう少し落ち附いて食ふ方が樂だらうと心配するにも拘らず、當人は、傍で見る程苦しくはないと云はんばかりにぐい〳〵食ふ。芋だから無論堅いもんぢやない。いくら鵜呑にしたつて咽喉に傷の出來つ子はあるまいが、其の代り咽喉が一杯に塞がつて、芋が食道を通り越す迄は呼息の詰る恐れがある。夫を小僧は一向苦にしない。今咽喉がぐいと動いたかと思ふと、又ぐいと動く。後の芋が、前の芋を追つ懸けてぐい〳〵胃の腑へ落ち込んで行く樣だ。二本の芋は、隨分大きな奴だつたが、之れが爲忽ち見る間に無くなつて仕舞つた。さうして、小僧は遂に何等の異狀もなかつた。自分

等三人は何にも云はずに、三方から、此の小僧の芋を食ふ所を見て居たが、三人共、食つて仕舞ふ迄、一句も言葉を交はさなかつた。自分は腹の中で少しは可笑しいと思つた。然し何となく憐れだつた。是れは單に同情の念ばかりではない。自分が空腹になつて、長藏さんに芋をねだつたのは、つい、今しがたで、餓じい記憶は氣の毒な程近くにあるのに、此の小僧の食ひ方は、自分より二三層倍餓じさうに見えたからである。そこへ持つて來て、長藏さんが、
「旨まかつたか」
と聞いた。自分は芋へ手を出さない先から難有うと禮を述べた位だから、食つたあとの小僧は無論何とか云ふだらうと思つて居たら、小僧は生憎何とも云はない。默つて立つてゐる。さうして暮れかゝる山の方を見た。後から分つたが此小僧は全く野生で、丸で禮を云ふ事を知らないんだつた。それが分つてからは左程にも思はなかつたが、此の時は何だ顏に似合はない無愛嬌な奴だなと思つた。然し其の丸い顏を半分傾けて、高い山の黑ずんで行く天邊を妙に眺めた時は、又可愛想になつた。夫から又少し物騷になつた。何故物騷になつたんだかは一寸疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の宿とが、何か深い因緣で互に持ち合つてるのかも知れない。詩だの文章だのと云ふものは、あんまり讀んだ事がないが、恐らくこんな因緣に勿體をつけて書くもんぢやないかしら。さうすると妙な所で詩を拾つたり、文章に打つかつたりするもんだ。自分は此永年方々を流浪してあるいて、折々こんな因緣に出つ食はして我ながら變に感じた事が時々ある。――然しそれも落ちついて考へると、大概解けるに違ない。此の小僧なんか矢つ張り子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで來たが化け損なつた所位だらう。それ以上は餘計な事だから考へ

ずに置く。何しろ小僧は妙な顔をして、黑い山の天邊を眺めてゐた。

すると長藏さんが又聞き出した。

「御前、何處へ行くかね」

小僧は忽ち黑い山から眼を離して、

「何處へも行きあしねえ」

と答へた。顏に似合はず頗る無愛想である。長藏さんは平氣なもんで、

「ぢや何處へ歸るかね」

と、聞き直した。小僧も平氣なもんで、

「何處へも歸りやしねえ」

と云つてる。自分は此の問答を聞きながら、益物騷な感じがした。此の小僧は宿無に違ないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、さうして、こんなに度胸の据つた宿無を、今迄曾て想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、只の宿無に附屬する憐れとか氣の毒とかの念慮よりも、物騷の方が自然勢力を得た次第である。尤も長藏さんにはそんな感じは少しも起らなかつたらしい。長藏さんは、此小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさへすれば、それで澤山だつたんだらう。どこへも行かない、又どこへも歸らない小僧に向つて、

「ぢや、おいらと一所に御出。御金を儲けさしてやるから一

と云ふと、小僧は考へもせず、すぐ、

「うん」

と承知した。赤毛布と云ひ、小僧と云ひ、實に面白い樣に早く話が纏まつて仕舞ふには驚いた。人間も此位簡單に出來て居たら、御互に世話はなからう。然しさう云ふ自分が此の赤毛布にも此の小僧にも遜らない尤も世話のかゝらない一人であつたんだから妙なもんだ。自分は此の小僧の安受合を見て、少からず驚くと共に、天下には自分の樣に右へでも左へでも誘はれ次第、好い加減に、ふわつきながら、流れて行くものが大分あるんだと云ふ事に氣が附いた。東京に居るときは、目眩い程人が動いてゐても、動きながら、みんな根が生えてゐるんで、たま〳〵根が拔けて動き出したのは、天下廣しと雖も、自分丈であらう位で、千住から尻を端折つて歩き出した。だから心細さも人一倍であつたが、此の宿で、はからずも赤毛布を手に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十分と立たないうちに又此の小僧を手に入れた。さうして二人とも自分よりは遙に根が拔けてゐる。かう續々同志が出來てくると、行く先は山だらうが、河だらうが、あまり苦にはならない。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日の午後九時迄は申し分のない坊ちやんとして生活してゐた。煩悶も坊ちやんとしての煩悶であつたのは勿論だが、煩悶の極試みた此の驅落も、矢つ張り坊ちやんとしての驅落であつた。去ればこそ、此の驅落に對して、不相當に勿體ぶつた意味をつけて、難有がらない迄も、一生の大事件の樣に考へてゐた。生死の分れ路の樣に考へてゐた。と云ふものは坊ちやんの眼で見渡した世の中には、驅落をしたものは一人もない。——たまにあれば新聞にある許りである。所が新聞では驅落が平面になつて、一枚の紙に浮いて出る丈で、云はゞあぶり出しの驅落だから、食べたつて身にはならない。恰も別世界から、電話がかゝつた樣なもので、はあ、はあ、と聞いて

る分の事である。だから本當の意味で切實な驅落をするのは自分丈だと云ふ有難味がつけ加はつてくる。尤も自分はたゞ煩悶して、たゞ驅落をした迄で、詩とか美文とか云ふものを、あんまり讀んだ事がないから、自分の境遇の苦しさ悲しさを一部の小說と見立てゝ、それから自分で此の小說の中を縱橫に飛び廻つて、大いに苦しがつたり又大いに悲しがつたりして、さうして同時に自分の慘狀を局外から自分と觀察して、どうも詩的だ抔と感心する程なませた考へは少しもなかつた。自分が自分の驅落に不相當な有難味を附けたと云ふのは、自分の不經驗からして、左程大袈裟に考へないでも濟む事を、さも仰山に買ひ被つて、獨りでどぎまぎしてゐた事實を指すのである。然るに此のどぎまぎが赤毛布に逢ひ、小僧に逢つて、兩人の平然たる態度を見ると共に、何時の間にやら薄らいだのは、矢張經驗の賜である。白狀すると當時の赤毛布でも當時の小僧でも、當時の自分より餘つ程偉かつた樣だ。

かう手もなく赤毛布がかゝる。小僧がかゝる。さう云ふ自分も、たわいもなく攻め落された事實を綜合して考へて見ると、成程長藏さんの商賣も、滿更待ち草臥の骨折損になる譯でもなかつた。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、ぢやなりませうと二つ返事で承知する馬鹿は、天下廣しと雖も、尻端折で夜逃をした自分位と思つてゐた。從つて長藏さんの樣な氣樂な商賣は日本にたつた一人あれば澤山で、しかも其の一人が、まぐれ當りに自分に廻り合せると云ふ運勢を以て生れて來なくつちや、とても商賣にならない筈だ。だから大川端で眼の下三尺の鯉を釣るよりも餘つ程の根氣仕事だと、始めから腰を据ゑてかゝるのが當然なんだが、長藏さんは頓とそんな自覺は無用だと云はぬ許りの顏をして、是れが世間尤も普通の商賣であると社會から公認された樣な態度で、わるびれずに往來の男を捉まへる。すると其の捉まへられた男が、不思議な事に、一も二もなく、すぐにうんと云ふ。何となく是れが世間尤も普通の商賣ぢやあるまいかと疑念を起す樣に成功する。これ程成功する商賣なら、日本に一人ぢや迚も間に合はない、幾人あつても差支ないと云ふ氣になる。——當人は無論さう思つてゐるんだらう。自分もさう思つた。

此の呑氣な長藏さんと、更に呑氣な小僧に赤毛布と、それから見樣見眞似で、大いに呑氣になりかけた自分と、都合四人で橋向ふの小路を左へ切れた。是から川に沿つて登りになるんだから、氣を附けるが好いと云ふ注意を受けた。自分は今芋を食つた許だから、もう空腹ぢやない。足は昨夕から歩き續けで草臥れてはゐるが、あるけばまだ歩ける。そこで注意の通り、成るべく氣を附けて、長藏さんと赤毛布の後を跟けて行つた。路があまり廣くないので四人は一行に竝べない。だから後を跟ける事にした。小僧は小さいから是れも一足後れて、自分と摺々位になつて食つ附いてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いのとの兩方で、口を利くのが厭になつた。長藏さんも橋を渡つてから以後頓と御前さんを使はなくなつた。赤毛布はさつき一膳飯屋の前で談判をした時から、餘り多辯ではなかつたが、どう云ふものかこゝに至つて益無口となつちまつた。小僧の無口は更に甚だしかつた。穿いてゐる冷飯草履がぴちやく〳〵鳴る許りである。

かう、みんな默つて仕舞うと、山路は靜かなものである。ことに夜だから猶淋しい。夜と云つたつて、まだ日が落ちた許りだから、歩いてる道丈はどうか、かうか分る。左手を落ちて行く水が、氣の所爲か、少しづゝ光つて見える。尤もきらく〳〵光るんぢやない。なんだか、どす黑く動く所が光る樣に見える丈だ。岩にあたつて碎ける所は比較的判然と白くなつてゐる。さうして其の聲がさあ〳〵と絕え間なくする。中

中八釜しい。それで中々淋しい。

其の中細い道が少し宛、上りになる樣な氣持がしだした。上り丈なら此の位な事はさう骨は折れないんだが、路が何だか凸凹する。岩の根が川の底から續いて來て、急に地面の上へ出たり、引つ込んだりするんだらう。此の凸凹に下駄を突つ掛ける。烈しいときは内臓が飛び上がる樣になる。大分難義になつて來た。長藏さんと赤毛布は山路に馴れてゐると見えて、よくも見えない木下闇を、すた〳〵調子よくあるいて行く。是れは仕方がないが、小僧が――此の小僧は實際物騷である。冷飯草履をぴしや〳〵云はして、暗い凸凹を平氣に飛び越して行く。しかも全く無言である。晝間なら左程にも思はないんだが、此の際だから、薄暗い中でぴしやり〳〵と草履の尻の鳴るのが氣になる。何だか蝙蝠と一所に歩いてる樣だ。

其のうち路が段々登りになる。川はいつしか遠くなる。呼息が切れる。凸凹は益烈しくなる。耳がぐわあんと鳴つて來た。是れが驅落でなくつて、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだが、根が自殺の仕損ひから起つた自滅の第一着なんだから、苦しくつても、辛くつても、誰に難題を持ち掛ける譯にも行かない。相手は誰だと云へば、自分より外に誰も居やしない。よし居たつて、こだわる丈の勇氣はない。其の上先方は相手になつてくれない程平氣である。すた〳〵歩いて行く。口さへ利かない。丸で取附端がない。已を得ず呼吸を切らして、耳をぐわあんと鳴らして、默つて後から神妙に尾いて行く。神妙と云ふ字は子供の時から覺えてゐたんだが、神妙の意味を悟つたのは此の時が始めてゞある。尤も是れが悟り始めの悟り仕舞だと笑ひ話にもなるが、一度悟り出したら、其の悟りが大分長い事續いて、つひに籤山の中で絶高頂に達して仕舞つた。神妙の極に達すると、出るべき涙さへ遠慮して出ない樣になる。涙

がこぼれる程だと警に云ふが、涙が出る位なら安心なものだ。涙が出るうちは笑ふ事も出來るに極つてる。

不思議な事に是程神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切神妙氣を出さないのみか、人からは横着者の樣に思はれてゐる。其時御世話になつた長藏さんから見たら、定めし增長した野郎だと思ふ事だらう。が又今の朋友から評すると、昔は氣の毒だつたと云つて呉れるかも知れない。增長したにしても氣の毒だつたにしても構はない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の狀態である。人間はかう出來てるんだから致し方がない。夏になつても冬の心を忘れずに、ぶる〳〵悸へて居ろつたつて出來ない相談である。病氣で熱の出た時、牛肉を食はなかつたから、もう生涯ロースの鍋へ箸を着けちやならんぞと云ふ命令はどんな御大名だつて無理だ。咽喉元過ぐれば熱さを忘れると云つて、よく、忘れては怪しからん樣に持ち掛けてくるが、あれは忘れる方が當り前で、忘れない方が嘘である。かう云ふと詭辯の樣に聞えるが、詭辯でもなんでもない。正直正銘の所を云ふんである。一體人間は、自分を四角張つた不變體の樣に思ひ込み過ぎて困る樣に思ふ。周圍の狀況なんて事を眼中に置かないで、平押に他人を壓し附けたがる事が大分ある。他人なら理窟も立つが、自分で自分をきゆ〳〵云ふ目に逢はせて嬉しがつてるのは聞えない樣だ。さう一本調子にしやうとすると、立體世界を逃げて、平面國へでも行かなければならない始末が出來てくる。無暗に他人の不信とか不義とか變心とかを咎めて、萬事萬端向ふがわるい樣に噪ぎ立てるのは、みんな平面國に籍を置いて、活版に印刷した心を睨んで、旗を揚げる人達である。御孃さん、坊つちやん、學者、世間見ず、御大名、にはこんなのが多くて、話が分り惡くつて、困るもんだ。自分もあの時驅落をしずに、可愛らしい坊つちやんとして大人しく成人したなら、――自分の心の始終動いてゐるのも知らずに、

動かないもんだ、變らないもんだ、變つちや大變だ、罪惡だ抔とくよ〳〵思つて、年を取つたら――只學問をして、月給をもらつて、平和な家庭と、尋常な友達に滿足して、內省の工夫を必要と感ずるに至らなかつたら、又內省が出來る程の心機轉換の活作用に見參しなかつたならば――あらゆる苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流轉と、あらゆる漂泊と、困憊と、懊惱と、得喪と、利害とより得た此の經驗と、最後に此の經驗を尤も公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかつたなら――難有い事に自分は此の至大なる賚を有つてゐる、――凡て是等がなかつたならば、自分はこんな思ひ切つた事を云やしない。いくら思ひ切つた事を云つたつて自慢にやならない。たゞ此の通りだから此の通りだと云ふ迄である。其代り昔し神妙なものが、今横着になる位だから、今の横着がいつ何時又神妙にならんとは限らない。――拔けさうな足を棒の樣に立てゝ聞くと、ぐわんと鳴つてる耳の中へ、遠くからさあ〳〵水音が這入つてくる。自分は益神妙になつた。

此の狀態で大分來た。何里だか見當のつかない程來た。夜道だから平生よりは、只でさへ長く思はれる上へ持つてきて、凸凹の登りを膨つ脛が腫れて、膝頭の骨と骨が擦れ合つて、股が地面へ落ちさうに歩くんだから、長いの、長くないのつて――夫れでも、生きてる證據には、どうか、かうか、長藏さんの尻を五六間と離れずに、遣つて來た。是はたゞ神妙に自己を沒却した諦の體たらくから生じた結果ではない。五六間以上後れると、長藏さんが、振り返つて五六歩宛は待合してくれるから、仕方なしに追ひ附くと、追ひ附かない先に向ふは又歩き出すんで、已を得ずだら〳〵、ちび〳〵に自己を奮興させた成行に過ぎない。夫にしても長藏さんは、よく後が見えたもんだ。ことに夜中である。右も左も黑い木が空を見事に突う切つて、頭の上は細く上迄開てゐるなと、側向いた時、始めて勘づく位な暗い路である。星明りと云ふけれど、あまり便にやならない。提燈なんか無論持ち合せ樣筈がない。自分の方から云ふと、先へ行く赤毛布が目標である。夜だから赤くは見えないが、何だか赤毛布らしく思はれる。明るいうちから、あの毛布、あの毛布と御題目の樣に見詰めて覘を附けて來たせいで　日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか、分らない所を、自分丈にはちやんと赤毛布に見えるんだらう。信心の功德なんてえのは大方こんな所から出るに違ない。自分はかう云ふ譯で、どうにか目標丈は附けて置いた樣なもゝ、長藏さんに至つては、どの位あとから自分が跟いてくるか分り樣がない。所をちやんと五六間以上になると留まつて呉れる。留まつてくれるんだか、留まる方が向ふの勝手なんだか、判然しないが、兎に角留まることは慥だつた。到底素人にや出來ない藝である。自分は苦しいうちにも、是れが長藏さんの商賣に必要な藝で、長藏さんは此の藝を長い間練習して、此れ迄に仕上げたんだなと、少からず感心した。赤毛布は長藏さんと並んでるんだから、長藏さんさへ留まれば屹度とまる。長藏さんが歩き出せば必ず歩き出す。丸で人形の樣に活動する男であつた。やゝともすると後れ勝ちの自分よりは此の赤毛布の方が遙に取り扱ひ易かつたに違ない。小僧は――例の小僧は消えて無くなつちまつた。始めのうちこそ小僧だから後になるんだらうと思つて、草臥れたら勵ましてやらう位の了簡があつたんだが、かの冷飯草履をぴしやり〳〵と鳴らしながら凸凹路を飛び跳ねて進行する有樣を目擊してから、こりや敵はないと覺悟をしたのは、餘程前の事である。それでも暫らくの間はぴしやり〳〵が自分の袖と擦れ〳〵位になつて、登つて來たが、今ぢやもう自分の近所には影さへなくなつた。竝んで歩くうちは、あまり小僧の癖に活潑にあるくんで――活潑丈ならいゝ

が、活潑の上に非常に沈默なんで――、隨分物騷な心持ちだつた。もし笑ふなら、極めて小さくつて、非常に活潑で、さうして口を利かない動物を想像して見ると分る。滅多にありやしない。こんな動物と一所に夜山越をしたとすると、誰だつて物騷な氣持になる。自分は此の時此の小僧の事を今考へても、妙な感じが出て來る。さつき蝙蝠の樣だと云つたが、全く蝙蝠だ。長藏さんと赤毛布がゐたから、好い樣なものの、蝙蝠とたつた二人限だつたら――正直な所降參する。

すると長藏さんが、暗闇の中で急に、

「おゝい」

と聲を揚げた。淋しい夜道で、急に人聲を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見ると一寸異な感じのするものだ。それも普通の話し聲なら、まだ好いが、おゝいと人を呼ぶ奴は氣味がよくない。山路で、黑闇で、人つ子一人通らなくつて、御負に蝙蝠なんぞと道伴になつて、いとゞ物騷な虛に乘じて、長藏さんが事ありげに聲を揚げたんである。事のあるべき筈でない時で、しかも事がありかねまじき場所でおゝいと來たんだから、突然と豫期が合體して、自分の頭に妙な響を與へた。此の聲が自分を呼んだんなら、何か起つたなとびくんとする丈で濟むんだが、五六間後から行く自分の注意を惹く爲とは受取れない程大きかつた。且聲の傳はつて行く方角が違ふ。此方を向いた聲ぢやない。おゝいと右左りに當つたが、立ち木に遮られて、細い道を向ふの方へ遠く逃げのびて、遙の先でおゝいと云ふ反響があつた。反響は慥にあつたが、返事はない樣だ。すると長藏さんは、前より一層大きな聲を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考へると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとぼけてゐるが其の時は中々とぼけちやゐなかつた。自分は此の聲を聞くと同時に蝙蝠が隱れたんだなと氣がついた。先へ行つたと思ふの が當り前で、まかり間違つても逃げたと鑑定をつけべき筈だのに、隱れたんだとすぐ胸先へ浮んで來たのは、餘つ程蝙蝠に祟られてゐたに違ない。此の祟は翌朝になつて太陽が出たらすつかり消えて仕舞つて、自分で自分を何て馬鹿だらうと思つた位だが、實際小僧やあの呼び聲を聞いた時は、一寸烈敷來た。

所が又反響が例の如く向ふへ延びて、突き當りがないもんだから、人魂の尻尾の樣に、幽かに消えて、其の反動が、有らん限りの木も山も谷もしんと靜まつた時、――何とも返事がない。此の反響が心細く繼續ながら消えて行く間、消えてから、凡ての世界がしんと靜まり返るまで、長藏さんと赤毛布と自分と三人が、暗闇に鼻を突き合せて默つて立つてゐた。あんまり好い心持ぢやなかつた。やがて、長藏さんが、

「少し急いだら、追つ附くべえ。御前さん好いかねえ」

と云つた。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ出した。元來此の場に臨んで急ぐなんて生意氣な事が出來る筈がないんだが、そこが妙なもので、急ぐ氣も、急ぐ力もない癖に受合つちまつた。定めし變な顏をして受合つたんだらうが、受合つたら急げても、急げないでも無茶苦茶に急いで仕舞つた。此の間はどこをどんな具合に通つたか、まあ斷然知らないと云つた方が穩當だらう。やがて長藏さんがぴたりと留つたんで、不圖氣がついた。すると一つ家の前へ出て居る。ランプが點いてゐる。ランプの灯が往來へ映つてゐる。はつと嬉しかつた。赤毛布がありゝ見える。さうして小僧もゐる。小僧の影が往來を横に切つて向ふの谷へ折れ込んでゐる。小僧にしては長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があらうとは丸で思ひがけなかつたし、其の上眼がくらんで、耳が鳴つて、夢中に急いで、どこ迄急ぐんだかあても希望もなく遣つて來て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしい樣に眼に這入つて來たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだとつく〳〵感心した。ランプがこんなに難有かつた事は今日迄まだ曾てない。後から聞いたら小僧は此のランプの灯迄拔け掛をして、そこで自分達を待つてたんださうだ。おゝいと云ふ聲も小僧やあと云ふ聲も聞えたんだが返事をしなかつたと云ふ話しだ。偉い奴だ。

同勢は是れで漸く揃つたが、此の先どうなる事だらうと思ひながら、相變らず神妙にしてゐると、長藏さんは自分達を路傍に置きつ放しにして、一人で家の中へ這入つて行つた。仕方がないから家と云ふが、實の所は、家ぢや勿體ない。牛さへゐれば牛小屋で馬さへ嘶けば馬小屋だ。何でも草鞋を賣る所らしい。壁と草鞋とランプの外に何にもないから、自分はさう鑑定した。間口は一間ばかりで、入口の雨戸が半分程閉てゝある。殘る半分は夜つぴて明けて置くんぢやないかしら。ことによると、敷居の溝に食ひ込んだなり動かないのかも知れない。屋根は無論藁葺で、其の藁が古くなつて、雨に腐やけた所爲か、崩れかゝつて漠然としてゐる。夜と屋根の繼目が分らない程、ぶくついて見える。其の中へ長藏さんは這入つて行つた。なんだか穴の中へでも潛り込んで行つた樣な心持だつた。さうして話してゐる。三人は表に待つてゐる。自分の顏は見えないが、赤毛布と小僧の顏は、小屋の中から斜に差してくるランプの灯でよく見える。赤毛布は依然として、散漫なものである。此男はたとひ地震がゆつて、梁が落ちて來ても、親の死目に逢ふか、逢はないかと云ふ大事な場合でも、いつでも、こんな顏をしてゐるに違ない。小僧は空を見てゐる。まだ物騷だ。

所へ長藏さんがあらはれた。然し往來へは出て來ない。敷居の上へ足を乘せて、此方を向いて立つた股倉から、ランプの灯丈が細長く出て來る。ランプの位置がいつの間にか低くなつたと見える。長藏さんの顏は無論よく分らない。

「御前さん、是れから山越をするのは大變だから、今夜は此處へ泊つて行かう。みんな這入るがいゝ」

自分は此の言葉を聞くと等しく、今迄の神妙が急に破裂して、身體がぐたりとなつた。此の牛小屋で一夜を明す事が、夫程の慰藉を自分に與へ樣とは、牛小屋を見た今が今迄、頓と氣がつかなかつた。矢張り神妙の結果泊る所が見附つても、泊る氣が起らなかつたんだらう。かうなると人間程御し易いものはない。無理でも何でもはい〳〵畏まつて聞いて、さうして少しも不平を起さないのみか大に嬉しがる。當時を思ひ出す度に、自分は尤も順良な又尤も勵精な人間であつたなと云ふ自信が伴つてくる。兵隊はあゝでなくつちや不可ない抔と考へる事さへある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと云ふ事も悟つた。——かう書いて見たが、讀み直すと何だが六づかしくつて解らない。實を云ふと、もつとずつとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなに六づかしくなつちまつた。例へば酒を飲む權利はないと自信して、酒の德を、あれどもなきが如くに見做す事さへ出來れば、德利が前に竝んでも、酒は飲むものだとさへ氣がつかずに居る位な所である。御互が泥棒にならずに濟むのも、つまりを云へば幼少の時から、人工的に此種の境界に馴らされてゐるからの事だらう。が一方から云ふと、こんな境界は人性の一部分を麻痺さした結果として出來上るもんだから、圖に乘つてきゆ〳〵押して行く

と、人間がみんな馬鹿になつちまふ。まあ泥棒さへしなければ好いとして、その他の精神器械は殘らず相應に働く事が出來る樣にしてやるのが何よりの功德だと愚考する。自分が當時の自分の儘で、のべつに今日迄生きてゐたならば、如何に順良だつて、如何に勵精だつて、馬鹿に違ない。だれの眼から見たつて馬鹿以上の不具だらう。人間であるからは、たまには怒るがいゝ。反抗するがいゝ。怒る樣に、反抗する樣に出來てゐるものを、無理に怒らなかつたり、反抗しなかつたりするのは、自分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一身體の毒である。それを迷惑だと云ふなら、怒らせない樣に、反抗させない樣に、御膳立をするが至當ぢやないか。

自分は當時種々の狀況で、萬事長藏さんの云ふ通りはい〳〵云つてゐたし、又そのはい〳〵を自然と思ひもするが、其の代り、今の樣な身分に居るからは、たとひ百の長藏さんが、七日七晩引つ張りつゞけに引つ張つたつて一寸も動きやしない。今の自分には此の方が自然だからである。さうしてかう變るのが人間の人間たる所だと思つてる。分り易い樣に長藏さんを引合に出したが、よく調べて見ると、人間の性格は一時間毎に變つて居る。變るのが當然で、變るうちには矛盾が出て來る筈だから、つまり人間の性格には矛盾が多いと云ふ意味になる。矛盾だらけの仕舞は、性格があつてもなくつても同じ事に歸着する。嘘だと思ふなら、試驗して見るがいゝ。他人を試驗するなんて罪な事をしないで、先づ吾身で吾身を試驗して見るがいゝ。坑夫に迄零落ないでも分る事だ。神さまなんかに聞いて見たつて、以上分ッ子ない。此の理窟がわかる神さまは自分の腹のなかにゐるばかりだ。抔と、學問もない癖に、學者めいた事を云つては濟まない。こんな景氣のいゝタンカを切る所存は毛頭なかつたんだが、實を云ふと斯う云ふ仔細である。

自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る〳〵と苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたんびに苦い顏をして謝罪つてゐた。自分ながら、どうも困つたもんだ、是ぢや普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくつちや信用を落して路頭に迷ふ樣な仕儀になると、ひそかに心配してゐたが、色々の境遇に身を置いて、前に述べた通りの試驗をして見ると、改良も何も入つたものぢやない。是れが自分の本色なんで、人間らしい所は外にありやしない。それから人も試驗して見た。所が矢つ張り自分と同じ樣に出來てゐる。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれて然るべき人間なんだから可笑しくなる。要するに御腹が減つて飯が食ひ度なつて、御腹が張ると眠くなつて、窮して濫して、達して道を行つて、惚れて一所になつて、愛想が盡きて夫婦別れをする迄の事だから、悉く臨機應變の沙汰である。人間の特色はこれより外にありやしない。と、かう感服してゐるんだから、一寸言つて見た迄である。然し世の中には學者だの坊主だの教育家だのと云ふ六づかしい仲間が大分居て、それ〴〵專門に研究してゐる事だから、自分丈、譯の分つた樣に辯じ立てゝは善くない。

そこで元氣のいゝ今の氣焰をやめて、再びもとの神妙な態度に復して、山の中の話をする。長藏さんが敷居の上に立つて、往來を向きながら、此處へ泊つて行かうと云ひ出した時、こんな破屋でも泊る事が出來るんだつたと、始めて意識したよりも、凡ての家と云ふものが元來泊る爲に建てゝあるんだなと、漸く氣が附いた位、泊る事は豫期してゐなかつた。それでゐて身體は蒟蒻の樣に疲れ切つてる。平生なら泊りたい、泊りたいで凡ての内臓が張切れさうになる筈だのに、沒自我の坑夫行、卽ち自滅の前座としての墮落と諦めを附けた上の疲勞だから、いくら身體に泊る必要があつても、身體の方から魂へ宛てゝ宿泊の件

を請求してゐなかつた。所へ泊ると命令が天から逆に魂に下つたんで、魂は一寸まごついたかたちで、取り敢ず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉しがつたから、魂も成程難有いと、始めて長藏さんの好意を感謝した。と云ふ譯になる。何となく落語じみて巫山戯てゐるが、實際此の時の心の狀態は、かう譬を借りて來ないと說明が出來ない。

自分は長藏さんの言葉を聞くや否や、急に神經が弛んで、立ち切れない足を引き摺つて、第一番に戸口の方に近寄つた。赤毛布はのそ〳〵這入つてくる。小僧は飛んで來た。飛んだんぢやあるまいが、草履の尻が勢よく踵へあたるんで、ぴしや〳〵云ふ音が飛ぶ樣に思はれた。

這入つて見るとぷんと臭つた。何の臭だか更に分らない。小僧が鼻をぴくつかせたので、小僧も此の臭に感じたなと氣が附いた。長藏さんと赤毛布は丸で無頓着であつた。土間から上へあがる段になつて、雜巾でもと思つたが、小僧は委細構はず、草履を脫いで上がつちまつた。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足である。ひどい奴だと眺めてゐると、長藏さんが

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。夫で氣味がわるいが、ほこりも拂はず上がつた。壁の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧は其の上へころりと轉がつてゐる。自分は尻丈卸して、障子――障子は二枚あつた――其の障子の影へ胡坐をかいた。此の障子は入口に立てゝあるから、振り向くと、長藏さんと赤毛布が草鞋を脫いでゐる。二人共腰から手拭を出して、ばた〳〵足をはたいてゐる。さうして、すぐ上がつて來た。足を洗ふのが面倒だと見える。所へ主人が次の間から茶と煙草盆を持つて來た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云ふと頗る尋常に聞えるが、其の實名ばかりで、一々說明すると、大變な誤解をしてゐたんだねと呆れ返るもの許りである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持つて來たには違ひない。さうして長藏さんと談話をし始めた。談話の筋は忘れたが、其の樣子から察すると、二人はもとからの知合で、御互の間には貸や借があるらしい。何でも馬の事をしきりに云つてた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事は丸で聞きもしない。まるで眼中にない譯でもあるまいが、さつき長藏さんが一人で談判に這入つた時に、殘らず聞いて仕舞つたんだらう。それとも長藏さんはたび〳〵こんな呑氣屋を銅山へ連れて行くんで、自然其の往き還りには此の主人の厄介になりつけてゐるから、別段氣にも留めないのかも知れない。

自分は、長藏さんと主人との話を聞きながら、居眠を始めた。いつから始めたか知らない。馬を賣損つて、どうとかしたと云ふ所から、段々判然しなくなつて、自然と長藏さんが消える。赤毛布が消える。小僧が消える。主人と茶と煙草盆が消えて、破屋迄も消えた時、こくりと眠が覺めた。氣がつくと頭が胸の上へ落ちてゐる。はつと思つて、擡げると甚だ重い。主人は矢つ張馬の話をしてゐる。まだ馬かと思つてゐるうちに、又氣が遠くなつた。氣が遠くなつたのを、遠いまゝにして打遣つて置くと、忽然ぱつと眼がいた。薄暗い部屋の中に、影の樣な長藏さんと亭主が膝を突き合せてゐる。丁度、借がどうとかしてハ、ハ、と亭主が笑つた所だつた。此亭主は額が長くつて、斜に頭の天邊迄引込んでゐるから、横から見ると切通しの坂位な勾配がある。さうして上になればなる程毛が生えてゐる。其の毛は五分位なのと一寸位なのとが交つて、不規則にしかも疎にもぢや〳〵してゐる。自分が居眠りからはつと驚いて、急に眼を開ける

と、第一に此頭が眸の底に映つた。ランプが煤だらけで暗いものだから、此頭も煤だらけになつて映つて來た。其の癖距離は近い。だから映つた影は明瞭である。自分は此の明瞭で且つ朦朧なる亭主の頭を居眠りの不知覺から我に返る咄嗟に不圖見たんである。此の時はあまり好い心持ではなかつた。それが爲、居眠りもしばらく見合せる樣な氣になつて、部屋中を見廻すと、向ふの隅に小僧が倒れてゐる。こちらの横に茨城縣が長く伸びてゐる。毛布の下から大きな足が見える。突當りが壁で、壁の隅に穴が開いて、穴の奥が眞黑である。上は一面の屋根裏で、寒い程黑くなつてる所へ、油煙とともにランプの灯があたるからよく見て居ると、藁葺の裏側が震へる樣に思はれた。

それから又眠くなつた。又頭が落ちる。重いから上げると又落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながら段々うつとりして、うつとりの極、胸の上へがくりと落ちるや否や、一足飛に正氣へ立ち戻つたが、三回四回と重なるにつけて、眼丈開けても氣は判然しない。ぼんやりと世界に歸つて、又ぞろすぐと不覺に陷つちまふ。夫から例の如く首が落ちる。微に生きてる樣な氣になる。かと思ふと又一切空に這入る。仕舞には、とう〳〵、いくら首がのめつて來ても、動じなくなつた。或はのめつたなり、頭の重みで横に打つ倒れちまつたのかも知れない。兎に角安々と夜明迄寢て、眼が覺めた時は、もう居眠りはしてゐなかつた。通例の如く身體全體を疊の上に附けて長くなつてゐた。さうして涎を垂れてゐる。——自分は馬の話を聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金の話を聞いて、又居眠りの續を復習してゐるうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長くなつたぎり、魂の音沙汰を聞かなかつたんだから、眼が覺めて、夜が明けて、世の中が土臺から陰と陽に引ッ繰り返つてゐるのを見るや否や、眼をあいて涎を垂れて、横になつた儘、ぢ

つとしてゐた。自覺があつて死んでたらこんなだらう。生きてるけれども動く氣にならなかつた。昨夜の事は一から十迄よく覺えてゐる。然し昨夜の一から十迄が自然と延びて今日迄持ち越したとは受け取れない。自分の經驗は凡てが新しくつて、かつ痛切であるが、其の新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云ふよりも、昨夜と今日の間に厚い仕切りが出來て、截然と區別がついた樣だ。太陽が出ると引き込む丈の差で、かう心に連續がなくなつては不思議な位自分で自分が當にならなくなる。要するに人世は夢の樣なもんだ。と一寸考へたもんだから、涎も拭かずに沈んでゐると、長藏さんが、うゝんと伸をして、寐たまゝ握り拳を耳の上迄持ち上げた。握り拳がぬつと眞直に疊の上を擦つて、腕のあり丈出た所で、勢がゆるんで、ぐにやりとした。又寐るかと思つたら、今度は右の手を下へさげて、凹んだ頰つぺたをぽり〳〵搔き出した。起きてるのかも知れない。其のうち、むにや〳〵何か云ふんで、矢つ張り眼が覺めてゐないなと氣が附いた時、小僧がむくりと飛び起きた。是は眞正の意味に於て飛起きたんだから、どしんと音がして、根太が拔けさうに響いた。すると、さすが長藏さんだけあつて、むにや〳〵を已めて、すぐ疊に附いた方の肩を、肘の高さ迄上げた。眼をぱちつかせてゐる。

かうなると、自分も何時迄沈んで居たつて際限がないから、起き上つた。長藏さんも全く起きた。小僧は立ち上がつた。寐てゐるものは赤毛布ばかりである。是は又呑氣なもんで、依然として毛布から大きな足を出してぐう〳〵鼾聲をかいて寐てゐる。それを長藏さんが起す。——

「御前さん。おい御前さん。もう起きないと御午迄に銅山へ行きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寐てゐる。仕方がないから長藏さんは毛布の肩へ手を掛て、

「おい、おい」
と搖り始めたんで、已を得ず、毛布の方でも「おい」と同じ様な返事をして、中途半端に立ち上つた。是でみんな起きた樣なもの丶、自分は顏も洗はず、飯も食はず、どうして好いか迷つてると、長藏さんが、
「ぢや、そろ〳〵出掛やう」
と云つて、眞先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつゞいて降りる。毛布も不得要領に土間へ大きな足をぶら下げた。かうなると自分も何とか片をつけなくつちやならないから、一番あとから下駄を突掛けて、長藏さんと赤毛布が草鞋の紐を結ぶのを、不景氣な懷手をして待つてゐた。
土間へ下りた以上は、顏を洗はないのかの、朝飯を食はないのかのと、當然の事を聞くのが、さも贅澤の沙汰の樣に思はれて、頓と質問して見る氣にならない。習慣の結果、必要とまで見做されてゐるものが、急に餘計な事になつちまふのは可笑しい樣だが、其後此の顚倒事件を布衍して考へて見たら、こんな、例は澤山ある。つまり世の中では大勢のやつてる事が當然になつて、一人丈でやる事が餘計の樣に思はれるんだから、當然にならうと思つたら味方を大勢拵へて、左も當然であるかの容子で不當な事を遣るに限る。遣つては見ないが屹度成功するだらう。相手が長藏さんと赤毛布でさへ自分には是れ程の變化を來たしたんでも分る。
すると長藏さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたもんだから、ふいと顏を上げた。さうして自分を見た。さうして、こんな事を云ふ。
「御前さん、飯は食はなくつても好いだらうね」

飯を食はなくつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まり樣がないから、自分はたゞ、
「好いです」
と答へて置いた。すると長藏さんは、
「食ひたいかね」
と云つて、にや〳〵笑つた。是れは自分の顏に飯が食ひたい樣な根性が幾分かあらはれた爲か、又は十九年來の豫期に反して起きたなり飯拔きの出立に、自然不平の色が出てゐた爲だらう。それでなければ草鞋の紐を結んで仕舞つてから、こんな事を聞く譯がない。現に長藏さんは、赤毛布にも小僧にも此の質問を呈出しなかつたんでも分る。今考へると、一寸兩人にも同じ事を聞いて見れば善かつた樣な氣もする。朝飯を食はないで五里十里と歩き出すものは宿無しか、又は準宿無しでなくつちやならない。目が醒めて、夜が明けてるのに、汁の煙も、漬物の香も、一向連想に乘つて來ないからは、行きなり放題に、今日は今日の命を取り留めて、其の日其の日の魂の供養をする呑氣屋で、世の中にあしたと云ふものがないのを當り前と考へる程に、不幸な又幸な人間である。自分は十九年來始めて、斯う云ふ人間と一つ所に泊つて、是れから又一所に歩き出すんだなと思つた。赤毛布と小僧の顏色を伺つて見ると少しも朝飯を豫期してる樣子がないんで、雙方共朝飯を食ひ慣けてゐない一種の人類だと勘づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先から、もう、坑夫以下に摺り落ちてゐたと云ふ事が分つた。然し分つたと云ふ許りで別に悲しくもなかつた。涙は無論出なかつた。たゞ長藏さんが、此の朝飯の經驗に乏しい人間に向つて、「御前さん達も飯が食ひたいかね」と尋ねて呉れなかつたのを、今では殘念に思つてる。食つた事が少いから、今迄

の習慣性で、「食はないでも好い」と答へるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云ふ意外の望に奬勵されて「食ひたい」と答へるか。――つまらん事だが何方か聞いて見たい。

長藏さんは土間へ立つて、一寸後ろを振り返つたが、

「熊さん、ぢや行つてくる。色々御世話樣」

と輕く力足を二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、まだ奥で寐てゐる。覗いて見ると、昨夕うつゝに氣味をわるくした、もぢや〳〵の頭が布團の下から出てゐる。此の亭主は敷蒲團を上へ掛けて寐る流儀と見える。長藏さんが、此もぢや〳〵の頭に話しかけると、頭は、むくりと疊を離れた。さうして熊さんの顔が出た。此顔は昨夜見た程妙でもなかつた。然し額がさかに痞けて、腦天迄長くなつてゐる事は、今朝でも爭はれない。熊さんは床の中から、

「いや、何にも御構申さなかつた」

と云つた。成程何にも構はない。自分丈布團をかけてゐる。

「寒かなかつたかね」

とも云つた。氣樂なもんだ。長藏さんは

「いゝえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後から、熊さんが欠伸交りに、

「ぢや、又歸りに御寄り」

と云つた。

夫れから長藏さんが往來へ出る。自分も一足後れて、小僧と赤毛布の尻を追つ懸けて出た。みんな大急ぎに急ぐ。かう云ふ道中には慣れ切つたもの許りと見える。何でも長藏さんの云ふ所によると、是れから山越をするんだが、午迄には銅山へ着かなくつちやならないから急ぐんださうだ。何故午迄に着かなくつちやならないんだか、譯が分らないが、聞いて見る勇氣がなかつたから、默つて食つ附いて行つた。すると成程登になつて來た。昨夕あれ程登つた積だのに、まだ登るんだから嘘の樣でもあるが實際見渡して見ると四方は山ばかりだ。山の中に山があつて、其山の中に又山があるんだから馬鹿々々しい程奥へ這入る譯になる。この模樣では銅山のある所は、定めし淋しいだらう。呼息を急いで登りながらも心細かつた。此處迄來る以上は、都へ歸るのは大變だと思ふと、何の醉興で來たんだか淺間しくなる。と云つて都に居り度ないから出奔したんだから、おいそれと歸りにくい所へ這入つて、親親類の目に懸からない樣に、朽果てゝ仕舞ふのは寧ろ本望である。自分は高い坂へ來ると、呼息を繼ぎながら、一寸留つては四方の山を見廻した。すると其の山がどれも是も、黑ずんで、凄い程木を被つてゐる上に、雲がかゝつて見る間に、遠くなつて仕舞ふ。遠くなると云ふより、薄くなると云ふ方が適當かも知れない。薄くなつた揚句は、次第次第に、深い奥へ引き込んで、今迄は影の樣に映つてたものが、影さへ見せなくなる。さうかと思ふと、雲の方で山の鼻面を通り越して動いて行く。しきりに白いものが、捲き返してゐるうちに、薄く山の影が出てくる。其の影の端が段々濃くなつて、木の色が明かになる頃は先刻の雲がもう隣りの峰へ流れてゐる。すると又後からすぐに別の雲が來て、折角見え出した山の色をほうとさせる。仕舞には、どこにどんな山があるか一向見當が附かなくなる。立ちながら眺めると、木も山も谷も滅茶々々になつて浮き出して來る。

頭の上の空さへ、際限もない高い所から手の届く邊まで落ちかゝつた。長藏さんは、

「こりや、雨だね」

と、歩きながら獨言を云つた。誰も答へたものはない。四人とも雲の中を、雲に吹かれる樣な、取り捲かれる樣な、又埋められる樣な有樣で登つて行つた。自分には此の雲が非常に嬉しかつた。此の雲のお蔭で自分は世の中から隱したい身體を十分に隱すことが出來た。さうして、さのみ苦しい思ひもしずに其の中を歩いて行ける。手足は自由に働いて、閉ぢ籠められた樣な窮屈も覺えない上に、人目にかゝらん德は十分ある。生きながら葬られると云ふのは全く此の事である。それが、その時の自分には唯一の理想であつた。だから此の雲は全く難有い。難有いといふ感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、まあ安心だと、ほつと一息した。今考へると何が安心だか分りやしない。全くの氣違だと云はれても仕方がない。仕方がないが、斯う云ふ自分が、時と場合によれば、翌が日にも、亦雲が戀しくならんとも限らない。それを思ふと何だか變だ。吾が身で吾が身が保證出來ない樣な、又吾が身が吾が身でない樣な氣持がする。

然し此の時の雲は全く嬉しかつた。四人が離れたり、かたまつたり、隔てられたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた時の景色は未だに忘れられない。小僧が雲から出たり這入つたりする。茨城の毛布が赤くなつたり白くなつたりする。長藏さんの、どてらが、わづか五六間の距離で濃くなつたり薄くなつたりする。さうして誰も口を利かない。さうして、無暗に急ぐ。世界から切り離された四つの影が、後になり先になり、殖もせず減もせず、四つの儘、引かれて合ふ樣に、彈かれて離れる樣に、又どうしても四つでなくてはならない樣に、雲の中をひたすら歩いた時の景色は未だに忘れられない。

自分は雲に埋まつてゐる。殘る三人も埋まつてゐる。天下が雲になつたんだから、世の中は自分共にたつた四人である。さうして其の三人が三人ながら、宿無である。顏も洗はず朝飯も食はずに、雲の中を迷つて歩く連中である。此の連中と道伴になつて登り一里、降り二里を足の續く限り雲に吹かれて來たら、雨になつた。時計がないんで何時だか分らない。空模樣で判斷すると、朝とも云はれるし、午過とも云はれるし、又夕方と云つても差支ない。自分の精神と同じ樣に世界もぼんやりしてゐるが、只一寸眼に附いたのは、雨の間から微かに見える山の色であつた。其色が今迄のとは打つて變つてゐる。何時の間にか木が拔けて、空坊主になつたり、ところ斑の禿頭と化けちまつたんで、丹砂の樣に赤く見える。今迄の雲で自分と世間を一筆に抹殺して、此處迄ふらつきながら、手足丈を急がして來た許りだから、此の赤い山が不圖眼に入るや否や、自分はは つと雲から醒めた氣分になつた。色彩の刺激が、自分にかう強く應へ樣とは思ひ掛けなかつた。——實を云ふと自分は色盲ぢやないかと思ふ位、色には無頓着な性質である。——そこで此の赤い山が、比較的烈しく自分の視神經を冒すと同時に、自分は愈銅山に近づいたなと思つた。蟲が知らせたと云へば、蟲が知らせたとも云へるが、實は此山の色を見て、すぐ銅を連想したんだらう。兎に角、自分が愈到着したなと直覺的に——世の中で直覺的と云ふのは大概此の位なものだと思ふが——所謂直覺的に事實を感得した時に、長藏さんが、

「やつと、着いた」

と自分が言ひたい樣な事を云つた。それから十五分程したら町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り拔けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦つて視覺を慥めたい位驚いた。それも昔の宿とか里

とか云ふ舊幕時代に緣のある樣な町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、凡てが苔の生えない、新しづくめの上に、白粉をつけた新しい女迄ゐるんだから、全く夢の樣な氣持で、不審が顏に出る暇もないうちに通り越しちまつた。すると橋へ出た。長藏さんは橋の上へ立つて、一寸水の色を見たが、

「是れが入口だよ。愈着いたんだから、其の積でゐなくつちや、不可ない」

と注意を與へた。然し自分には、どんな積でゐなくつちや不可ないんだか、些とも分らなかつたから、默つて橋の上へ立つて、入口から奥の方を見てゐた。左が山である。右も山である。さうして、所々に家が見える。矢つ張り木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。是も新しい。古ぼけて禿けてゐるのは山ばかりだつた。何だか又現實世界に引き摺り込まれる樣な氣がして、少しく失望した。長藏さんは自分が默つて橋の向を覗き込んでゐるのを見て、

「好いかね、御前さん、大丈夫かい」

と又聞き直したから、自分は、

「好いです」

と明瞭に答へたが、內心あまり好くはなかつた。何故だかしらないが、長藏さんは只自分に丈懸念がある樣子であつた。赤毛布と小僧には「好いかね」とも「大丈夫かい」とも聞かなかつた。頭から此の兩人は過去の因果で、坑夫になつて、銅山のうちに天命を終るべきものと認定してゐる樣な景色がありく〳〵と見えた。して見ると不信用なのは自分丈で、大分長藏さんから此奴は危ないなと睨まれてゐたのかも知れな

い。好い面の皮だ。

それから四人揃つて、橋を渡つて行くと、右手に見える家には中々立派なのがある。其の中で一番いかめしい奴を指して、あれが所長の家だと長藏さんが敎へて吳れた。序に左の方を見乍ら

「此方がシキだよ、御前さん、好いかね」

と云ふ。自分はシキと云ふ言葉を此の時始めて聞いた。餘つ程聞き返さうかと思つたが、大方これがシキなんだらうと思つて默つてゐた。あとから自分も此のシキと云ふ言葉を明瞭に理解しなければならない身分になつたが、矢つ張始めにぼんやり考へ附いた定義とさした違もなかつた。そのうち左へ折れて愈シキの方へ這入る事になつた。鐵軌に付いて段々上つて行くと、其處此處に粗末な小さい家が澤山ある。是れは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違であつた。此の小屋はどれも六疊と三疊二間で、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限つて貸してくれる規定であるから、自分の樣な一人ものは這入り度たつて這入れないんだつた。かう云ふ小屋の間を縫つて、飽きずに上つて行くと、今度は石崖の下に細長い橫幅ばかりの長屋が見える。さうして、其の長屋が澤山ある。始めは僅か二三軒かと思つたら、登るに從つて續々あらはれて來た。大きさも長さも似たもんで、みんな崖下にあるんだから位地にも變りはないが、向丈は各々違つてる。山坂を利用して、なけなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅澤は言つてゐられない。やつとの思ひで、なした地面へ否應なしに、方角のお構なく建てゝ仕舞つたんだから不規則なものだ。それに、第一、登つて行く道がくねつてる。あの長屋の右を歩いてるなと思ふと、いつの間にか其の長屋の前へ出て來る。あれ

は、すぐ頭の上だがと心待ちに待つてゐると、急に路が外れて遠くへ持つてかれて仕舞ふ。丸で見當が附かない。其の上此の細長い家から顔が出てゐる。家から顔が出てゐるのが珍らしい事もないんだが、其の顔がたゞの顔ぢやない。どれも、これも、出來てゐない上に、色が悪い。その悪さ加減が又、尋常でない。青くつて、黑くつて、しかも茶色で、到底都會に居ては想像のつかない色だから困る。病院の患者抔とは丸で比較にならない。自分が山路を登りながら、始めて此の顔を見た時は、シキと云ふ意味をよく了解しない癖に、成程シキだなと感じた。然しいくらシキでも、かう云ふ顔は澤山あるまいと思つて、登つて行くと、長屋を通るたんびに顔が出て居て、其顔がみんな同じである。仕舞にはシキとは恐ろしい所だと思ふ迄、いやな顔を澤山見せられて、又自分の顔を澤山見られて——長屋から出てゐる顔は屹度自分等を見てゐた。一種獰悪な眼附で見てゐた。——とう〳〵午後の一時に飯場へ着いた。

何故飯場と云ふんだか分らない。焚き出しをするから、さう云ふ名を附けたものかも知れない。自分は其の後飯場の意味をある坑夫に尋ねて、篦棒め、飯場たあ飯場でえ、何を云つてるんでえ、とひどく劍突を食つた事がある。凡て此の社會に通用する術語は、シキでも飯場でもジヤンボーでも、みんな偶然に成立して、偶然に通用してゐるんだから、減多に意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く閑もなし、答へる閑もなし、調べるのは大馬鹿となつてるんだから至極簡單で且つ全く實際的なものである。

さう云ふ譯で飯場の意味は今以て分らないが、兎に角崖の下に散在してゐる長屋を指すものと思へばいい。其の長屋へ漸く到着した。多くある長屋のうちで、何故此の飯場を選んだかは、長藏さんの一人極だから、自分には説明しにくい。が、此の飯場は長藏さんの專門御得意の取引先と云ふ譯でもなかつたらしい。長藏さんは自分を此の飯場へ押しつけるや否や、何時の間にか、赤毛布と小僧を連れて外の飯場へ出て行つて仕舞つた。それで二人は外の飯場の飯を食ふ樣になつたんだなと後から氣が附いた。二人の消息は其後一向聞かなかつた。銅山のなかでもついぞ顔を合せた事がない。考へると、妙なものだ。一膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布と、夕方の山から降つて來た小僧と落ち合つて、夏の夜を後になり先になつて、崩れさうな藁屋根の下で一所に寐た明日は、雲の中を半日かゝつて、目指す飯場へ漸く着いたと思ふと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなつちまふ。是れでは小説にならない。然し世の中には纏まりさうで、纏らない、云はゞ出來損ひの小説めいた事が大分ある。長い年月を隔てゝ振り返つて見ると、却つて此のだらしなく尾を蒼穹の奥に隱して仕舞つた經歷の方が興味の多いやうに思はれる。振り返つて思ひ出す程の過去は、みんな夢で、その夢らしい所に追懷の趣があるんだから、過去の事實それ自身に何處かほんやりした、曖昧な點がないと此の夢幻の趣を助ける事が出來ない。從つて十分に發展して來て因果の豫期を滿足させる事柄よりも、此赤毛布流に、頭も尻も祕密の中に流れ込んで只途中丈が眼の前に浮んでくる一夜半日の畫の方が面白い。小説になりさうで、丸で小説にならない所が、世間臭くなくつて好い心持だ。只に赤毛布ばかりぢやない。小僧もさうである。長藏さんもさうである。松原の茶店の神さんもさうである。もつと大きく云へば此一篇の「坑夫」そのものが矢張さうである。纏まりのつかない事實を事實の儘に記す丈である。小説の樣に拵へたものぢやないから、小説の樣に面白くはない。其の代り小説よりも神祕的である。凡て運命が脚色した自然の事實は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である。だから神祕である。と自分は常に思つてゐる。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分等が飯場に到着した時は無論二人とも一所であつた。此處で長藏さんが愈坑夫志願の談判を始めた。談判と云ふと面倒な樣だが、其實極めて簡單なものであつた。たゞ、此の男は坑夫になりたいと云ふから、どうか使つてくれと云つた許りである。自分の姓名も出生地も身元も閲歴も何にも話さなかつた。勿論話し度たつて、知らないんだから、話せ樣もないんだが、かう迄手つ取早く片附る了簡とは思はなかつた。自分は中學校へ入學した時の經驗から、いくら坑夫だつて、それ相應の手續がなくつちや採用されないもんだと許り思つてゐた。大方身元引受人とか保證人とか云ふものが證文へ判でも捺すんだらう、其の時は長藏さんにでも賴んで見樣位にまで、先廻りをして考へてゐた。所が案に相違して、談判を持ち込まれた飯場頭は――飯場頭だか何だか其の時は無論知らなかつた。眉毛の太くつて蒼髯の痕の濃い逞しい四十恰好の男だつた。――其の男が長藏さんの話を一通り聞くや否や、

「さうかい、夫ぢや置いて御出」

と左も無雜作に云つちまつた。丁度炭屋が土釜を臺所へ擔ぎ込んだ時の樣に思はれた。人間が遙々山越をして坑夫になりに來たんだとは認めてゐない。そこで自分は少々腹の中で此飯場頭を恨んだが、是れは自分の間違であつた。其譯は今直に分る。

飯場頭と云ふのは一の飯場を預かる坑夫の隊長で、此の長家の組合に這入る坑夫は、萬事此の人の了簡次第でどうでもなる。だから甚だ勢力がある。此の飯場頭と一分時間に談判を結了した長藏さんは、

「ぢや、よろしくお賴みまうします」

と云つたなり、赤毛布と小僧を連れて出て行つた。又歸つてくる事と思つたが、其の後一向影も形も見せないんで、全く、置去にされたと云ふ事が分つた。考へるとひどい男だ。此處迄引つ張つて來るときには、何の蚊のと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなると通り一片の挨拶もしない。それにしてもぼん引の手數料はいつ何時何處で取つたものか、是は今以て分らない。

かう云ふ次第で飯場頭からは、土釜の炭俵の如く認定される、長藏さんからは小包の樣に抛げ込まれる。少しも人間らしい心持がしないんで、大いに悄然としてゐると、出て行く三人の後姿を見送つた飯場頭は突然自分の方を向いた。其の顏附が變つてゐる。人を炭俵の樣に取扱ふ男とは、どうしても受取れない。全く東京邊で朝晩出逢ふ、萬事を心得た苦勞人の顏である。

「あなたは生れ落ちてからの勞働者とも見えない樣だが……」

飯場掛の言葉を此處迄聞いた時、自分は急に泣き度なつた。散ざつぱらお前さんで、厭になる程遣られた揚句の果、もう到底御前さん以上には浮ばれないものと覺悟をしてゐた矢先に、突然あなたの昔に歸つたから、思ひがけない所で自己を認められた嬉しさと、なつかしさと、夫から過去の記憶――自分はついに一昨日迄は立派にあなたで通つて來た――それや是やが寄つて、たかつて胸の中へ込み上げて來た上に、相手の調子が如何にも鄭寧で親切だから――つい泣きたくなつた。自分は其の後色々な目に逢つて、幾度となく泣きたくなつた事はあるが、擦れ枯しの今日から見れば、大抵は泣くに當らない事が多い。然し此の時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目になれば、出かねまいと思ふ。苦しい、つらい、口惜しい、心細い涙は經驗で消す事が出來る。難有涙もこぼさずに濟む。たゞ墮落した自己が、依然として昔

の自己であると他から認識された時の嬉し涙は死ぬ迄附いて廻るものに違ない。人間はかやうに手前勘の強いものである。此の涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分の爲に書生を置いて、書生の爲に置いてやつた樣な心持になつてると同じ事ぢやないかしら。

かう云ふ譯で、飯場掛りの言葉を一行ばかり聞くと、急に泣きたくなつたが、實は泣かなかつた。悄然とはしてゐたが、氣は張つてゐる。何處からか知らないが、抵抗心が出て來た。たゞ思ふ樣に口が利けないから、默つて向ふの云ふ事を聞いてゐた。すると飯場掛りは嬉しい程親切な口調で、かう云つた。——

「……まあどうして、斯んな所へ御出なすつたんだか、今の男が連れて來る位だから大概私にも樣子は知れてはゐるが——どうです、もう一遍考へて見ちやあ。屹度取ッ附坑夫になれて、金がうんと儲かるて え樣な旨い話でもしたんでせう。それがさ、實際遣つて見ると到底話の十が一にも行かないんだから詰らないです。第一坑夫と一口に云ひますがね。中々たゞの人に出來る仕事ぢやない、ことにあなたの樣に學校へ行つて教育なんか受けたものは、どうしたつて勤まりつ子ありませんよ。……」

飯場頭は此處迄來て、昵と自分の顏を見た。何とか云はなくつちやならない。幸ひ此の時はもう泣きたい所を通り越して、口が利ける樣になつてゐた。そこで自分はかう云つた。——

「僕は——僕は——そんなに金なんか欲しかないです。何も儲けるためにやつて來た譯ぢやないんですから、——夫や知つてるです、僕たつて知つてるです……」

と、此の時知つてるですを二遍繰り返した事を今だに記憶してゐる。甚だ穩かならぬ生意氣な、ものゝ云ひ樣だつた。若いうちは、たつた今迄悄氣てゐても、相手次第ですぐ附け上つちまう。まことに赤面の至

りである。然も其の知つてるですが、何を知つてるのかと思ふと、今自分を連て來た男、卽ち長藏さんは、一種の周旋屋であつて、凡ての周旋屋に共通な法螺吹きであると云ふ眞相をよく自覺して居ると云ふ意味なんだから、いくら知つてたつて自慢にならないのは無論である。それを念入に、瞞着れて來たんぢやない、萬事承知の上の坑夫志願だ抔と說明して見たつて今更どうなるものぢやない。所が年が若いと虛榮心の强いもので——今でも弱いとは云はないが——しきりに辯解に取り掛つたのは實に冷汗の出る程の愚であつた。幸ひ相手が、かう云ふ家業に似合はぬ篤實な男で、かつ自分の不經驗を氣の毒に思ふの餘り、此の生意氣を生意氣と知りながら大目に見て呉れたもんだから、打やされずに濟んだ。まことに難有い。此の飯場に住み込んだあとで、頭の勢力の廣大なるに驚くにつれて、僕は知つてるですを思ひ出しては獨り赧い顏をしてゐた。序に云ふが此の頭の名は原駒吉である。今以て自分は好い名だと思つてる。

原さんは別に厭な顏附もせずに、默つて自分の言譯を聞いて居たが、やがて頭を振り出した。其の頭は大きな五分刈で額の所が面摺の樣に拔き上がつてゐる。

一そりや物數奇と云ふもんでさあ。折角來たから是非遣るつたつて、何も家を出る時から坑夫になると思ひ詰めた譯でもないんでせう。云はゞ一時の出來心なんだからね。遣つて見りや、すぐ厭になつちまうな眼に見えてゐるんだから、廢すが好うがせう。現に書生さんで此處へ來て十日と辛抱したものあ、有りやしませんぜ。え？そりや來る。幾人も來る。來る事は來るが、みんな驚いて逃げ出しちまいまさあ。全く普通のものゝ出來る業ぢやありませんよ。惡い事は云はないから御歸んなさい。なに坑夫をしなくつたつて、口過丈なら骨は折れませんやあ」

原さんは茲に至つて、胡坐を崩して尻を宙に上げかけた。自分はどうしても落第しさうな按排である。大いに困つた。困つた結果、坑夫と云ふ事から氣を離して、自分丈を檢査して見ると、――何だか急に寒くなつた。袷はさつきの雨で濡れてゐる。洋袴下は穿いてゐない。東京の五月も此山の奥へ來ると丸で二月か三月の氣候である。坂を登つてゐる間こそ體溫で左程にも思はなかつた。原さんに拒絶される迄は氣が張つてゐたから、好かつた。然し飯場へ來て休息した上に、坑夫になる見込が殆ど切れたとなると、情ないのが寒いのと合併して急に顫へ出した。其の時の自分の顏色は定めし見るに堪へん程醜いもんだつたらう。此の時自分は又何となく、今しがた自分を置去にして、挨拶もせずに出て行つた長藏さんが戀しくなつた。長藏さんがゐたら、何とか盡力して坑夫にしてくれるだらう。汽車賃を出して呉れた位だから、方角のわかる所迄位は送り出して呉れるだらう。よし坑夫にしてくれない迄も、どうにか片をつけて呉れるだらう。汽車賃を出して呉れた位だから、方角のわかる所迄位は送り出して呉れさうなものだ。臺口を長藏さんに取られてから、懷中には一文もない。歸るにしても、歸る途中で腹が減つて山の中で行倒になる迄だ。いつその事今から長藏さんを追掛けて見樣か。飯場々々を探して歩いたら逢へない事もないだらう。逢つて是々だと泣き附いたら、今迄の交際もある事だから、好い智慧を貸してくれまいものでもない。然し別れ際に挨拶さへしない男だから、ひよつとすると……自分は原さんの前で實はこんな閑な事を、非常に忙しく、ぐる〳〵考へてゐた。好な原さんが前にゐるのに、あんまり下さらない、しかも消えてなくなつた長藏さん許りを相談相手の樣に思ひ込んだのは、どう云ふ理由だらう。こんな事はよくあるもんだから、いざと云ふ場合に、敵は敵、味方は味方と板行で押した樣に考へないで、敵のうちで味方を探したり、味方のうちで敵を見露はしたり、片方づかない樣に心を自由に活動させなく

つてはいけない。

弱輩な自分には此の機合がまだ呑み込めなかつたもんだから、原さんの前に立つて顫へながら、へどもどしてゐると、原さんも氣の毒になつたと見えて、

「あなたさへ歸る氣なら、及ばずながら相談にならうぢやありませんか」

と向ふから口を掛て呉れた。かう切つて出られた時に、自分ははつと有難く感じた。ばかりなら當り前だがはつと氣が附いた。――自分の相談相手は自分の志望を拒絶する此原さんを除いて、外にないんだと氣が附いた。氣がつくと同時に又口が利けなくなつた。是非坑夫にして呉れとも、歸るから旅費を貸してくれとも言ひかねて、矢つ張り立ちすくんでゐた。氣が附いても何にもならない、たゞ右の手で拳骨を拵へて寒い鼻の下を擦つた樣に記憶してゐる。自分は其の前寄席へ行つて、よく噺家がこんな手眞似をするのを見た事があるが、自分で其の通りを實行したのは、是れが初めてゞある。此の手眞似を見てゐた原さんが、今度はかう云つた。

「失禮ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ござんす。どうかして上げますから」

旅費は無論ない。一厘たりとも金氣は肌に着いてゐない。のたれ死を覺悟の前でも、金は持つてる方が心丈夫だ。況して慢性の自滅で滿足する今の自分には、たとひ白銅一箇の草鞋錢でも大切である。歸ると事だきまりさへすれば、頭を地に摺り附けても、原さんから旅費を惠んで貰つたらう。實際かうなると廉恥も品格もあつたもんぢやない。どんな不體裁な貰ひ方でもする。――大抵の人がさうなるだらう。又さうなつて然るべきである。――然し決して褒められた始末ぢやない。自分がこんな事を露骨にかくのは、

たゞ人間の正體を、事實なりに書くんで、書いて得意がるのとは譯が違ふ。人間の生地は是だから、是で差支ない抔と主張するのは、練羊羹の生地は小豆だから、羊羹の代りに生小豆を嚙んでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分は此の時の有樣を思ひ出す度に、なんで、あんな、さもしい料簡になつたものかと、吾ながら愛想が盡きる。斯う云ふ下卑た料簡を起さずに、一生を暮す事の出來る人は、經驗の足りない人かも知れないが、幸な人である。又自分等よりも遙に高尚な人である。生小豆のまづさ加減を知らないで、生涯練羊羹ばかり味はつてる結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭から僅かの合力を仰ぐ所であつた。それをやつとの事で喰ひ止めたのは、折角の好意で調へてくれる金も、二三日木賃宿で夜露を凌げば、すぐ無くなつて、無くなつた曉には、又當途もなく流れ出さなければならないと、冥々のうちに自覺したからである。自分は屑よく涙金を斷つた。斷つた表向は律義にも見える。自分もさう考へるが、よく〳〵詮索すると、慾の天秤に懸けた、利害の判斷から出てゐる事は慥である。其證據には補助を斷ると同時に、自分は、こんな事を云ひ出した。

「其の代り坑夫に使つて下さい。折角來たんだから、僕はどうしても遣つて見る氣なんですから」

「隨分醉興ですね」

と原さんは首を傾けて、自分を見詰めてゐたが、やがて溜息の樣な聲を出して、

「ぢや、どうしても歸る氣はないんですね」

と云つた。

「歸るつたつて、歸る所がないんです」

「だつて……」

「家なんかないんです。坑夫になれなければ乞食でもするより仕方がないです」

こんな押問答を二三度重ねてゐる中に、口を利くのが大變樂になつて來た。是れは思ひ切つて、無理な言葉を、出惡いと知りながら、我慢して使つた結果、おのづと拍子に乘つて來た勢ひに違ないんだから、まあ器械的の變化と見做しても差支なからうが、妙なもので、其器械的の變化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして來た。自分の言ひたい事が何の苦もなく口を出るに連れて――ある人はある場合に、自分の言ひ度ない事迄も調子づいてべらく〳〵饒舌る。舌はかほどに器械的なものである。――此の器械が使用の結果加速度の効力を得るに連れて、自分は段々大膽になつて來た。――

いや、大膽になつたから饒舌れたんだらう、君の云ふ事は顚倒ぢやないかと遣り込める氣なら、さうして置いてもいゝ。いゝが、夫はあまり陳腐で且時々嘘になる。嘘と陳腐で滿足しないものは自分の言分を尤もと首肯だらう。

自分は大膽になつた。大膽になるに連れて、どうしても坑夫に住み込んで遣らうと決心した。また饒舌つて居れば必ず坑夫になれるに違ないと自覺して來た。一昨日家を飛び出す間際迄は、夢にも坑夫にならうと云ふ分別は出なかつた。ばかりではない、坑夫になる爲の驅落と事が極まつてゐたならば、何となく恥づかしくなつて、まあ一週間よく考へた上にと、出奔の時期を曖昧に延ばしたかもしれない。逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊だか分らない坑掘になり下る目的の逃亡とは、何不足なく

生育つた自分の頭には影さへ射さなかつたらう。所が原さんの前で寒い奥齒を嚙しめながら、せう事なしの押問答をしてゐるうちに、自分はどうあつても坑夫になるべき運命、否天職を帶びてる樣な氣がし出した。此の山と此の雲と此の雨を凌いで來たからには、是非共坑夫にならなければ濟まない。萬一採用されない曉には自分に對して面目がない。――讀者は笑ふだらう。然し自分は當時の心情を眞面目に書いてるんだから、人が見て可笑しければ可笑しい程、其の時の自分に對して氣の毒になる。

妙な意地だか、負惜みだか、それとも行倒れになるのが怖くつて、歸り切れなかつた爲だか、――其の邊は自分にも曖昧だが、兎に角自分は、尤も熱心な語調で原さんを口說いた。

「……左樣云はずに使つて下さい。實際僕が不適當なら仕方がないが、まだ遣つて見ない事なんだから――折角山を越して遠方をわざ〳〵來た甲斐に、一日でも二日でも、いゝですから、まあ試しだと思つて使つて下さい。其の上で、到底役に立たないと事が極れば歸ります。屹度歸ります。僕だつて、それだけの仕事が出來ないのに、押を强く御厄介になつてる氣はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」

と昨日茶店の神さんが云つた通りを其儘圖に乘つて述べ立てた。後から考へると、是れは寧ろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聽する文句ではなかつた。そこで原さんは少し笑ひ出した。

「夫程お望みなら仕方がない。何も御緣だ。まあやつて御覽なさるが好い。其の代り苦しいですよ」と原さんは何氣なく裏の赤い山を覗く樣に見上げた。大方天氣模樣でも見たんだらう。自分も原さんと一所に山の方へ眼を移した。雨は上がつたが、暗く曇つてゐる。薄氣味の惡い程怪しい山の中の空合だ。此

の一瞬時に、自分の願が叶つて、自分はまづ山の中の人となつた。此の時「其の代り苦しいですよ」と云つた原さんの言葉が、妙に氣に掛り出した。人は、漸くの思ひで刻下の志を遂げると、すぐ反動が來て、却て志を遂げた事が急に恨めしくなる場合がある。自分が望み通り此處へ落ち附ける口頭の辭令を受け取つた時の感じは聊か之に類してゐる。

「ぢやね」――原さんは語調を改めて話し出した。――「ぢやね。何しろ明日の朝シキへ這入つて御覽なさい。案内を一人附けて上げるから。――それからと――さうだ、其の前に話して置かなくつちやなりませんがね。一口に坑夫と云ふと、譯もない仕事の樣に思はれませうが、中々外で聞いてる樣な生容易い業ぢやないんで。まあ取つ附けから坑夫になるなあ」と云つて自分の顏を眺めて居たが、やがて、

「其の體格ぢや、ちつと六づかしいかも知れませんね。坑夫でなくつても、好うがすかい」

と氣の毒さうに聞いた。坑夫になる迄には相當の階級と練習を積まなくつちやならないと云ふ事が茲で始めて分つた。成程長藏さんが坑夫々々と、さも名譽らしく坑夫を振り廻した筈だ。

「坑夫の外に何かあるんですか。こゝに居るものは、みんな坑夫ぢやないんですか」

と念の爲に聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした樣子もなく、すぐ其の所以を說明して呉れた。

「銅山にはね、一萬人も這入つてゝね。それが掘子に、シチウに、山市に、坑夫と、かう四つに分れてゐるんでさあ。掘子つてえな、一人前の坑夫に使へねえ奴がなるんで、まあ坑夫の下働ですね。シチウは早く云ふとシキの内の大工見た樣なものかね。夫から山市だが、こいつは、たゞ石塊をこつ〳〵缺いてる丈で、重に子供――さつきも一人來たでせう。あゝ云ふのが當分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざつと、

こんなものですよ。それで坑夫となると請負仕事だから、間が好いと日に一圓にも二圓にも當る事もあるが、掘子は日當で年が年中三十五錢で辛抱しなければならない。しかも其のうち五分は親方が取つちまつて、病氣でもしやうもんなら手當が半分だから十七錢五厘ですね。それで蒲團の損料が一枚三錢——寒いときは是非二枚要るから、都合で六錢と、それに飯代が一日十四錢五厘、御菜は別ですよ。——どうです。もし坑夫にいけなかつたら、掘子にでもなる氣はありますかね」

實の所はなりますと勢ひよく出る元氣はなかつたが、此處迄來れば、今更どうしたつて否だと斷られた義理のもんぢやない。そこで、出來る丈景氣よく、

「なります」

と答へてしまつた。原さんには此の答が斷然たる決心の樣に受けとれたか、それとも、瘠我慢の附景氣の如く響いたか、其邊は確と分らないが、何しろ此の一言を聞いた原さんは、機嫌よく、

「ぢやまあ、御上がんなさい。さうして、あした人を附けて上げるから、まあシキへ這入つて御覽なさいな。何しろ一萬人も居て、こんなに組々に分れてゐるんだから、飯場を一つでも預かつてると、毎日毎日何だ蚊だつて、うるさい事ばかりでね。折角頼むから置いてやる、すぐ逃げる。——一日に二三人は屹度逃げますよ。さうかと云つて、大人しくしてゐるかと思ふと、病氣になつて、死んぢまう奴が出て來て——どうも始末に行かねえもんでさあ。葬ひ許りでも日に五六組無い事あ、滅多にないからね。——まあ遣る氣なら本氣に遣つて御覽なさい。腰を掛けてちやゝ、足が草臥るだらう。此方へ御上り」

此の逐一を聞いてゐた自分はたとひ、掘子だらうが、山市だらうが一生懸命に働かなくつちあ、原さんに對して濟まない仕儀になつて來た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になる樣な不都合は決して爲まいと極めた。何しろ年が十九だから正直なものだつた。

そこで原さんの云ふ通り、足を拭いて尻を卸してゐるうちに、奥の方から婆さんが出て來て、——此の婆さんの出樣が甚だ突然で、一寸驚いたが、

「此方へ御出なさい」

と云ふから、好加減に御辭儀をして、後から尾いて行つた。小作な婆さんで、後姿の華奢な割合には、ぴんぴん跳ねる樣に活潑な歩き方をする。幅の狹い茶色の帶をちよつきり結にむすんで、なけなしの髪を頸窩へ片附て其心棒に鉛色の簪を刺してゐる。さうして襷掛であつた。何でも臺所か——臺所がなければ、——奥の方で、用事の眞つ最中に、案内の爲呼び出されたから、かう急がしさうに尻を振るんだらう。夫とも山育だからかしら。いや、飯場だから優長にしちやゐられない所以だらう。して見ると、今日から飯場の飯を食ひ出す以上は自分だつて安閑としちやゐられない。萬事此の婆さんの型で行かなくつちやなるまい。——なるまい。——と力を入れて、うんと思つたら、流石に草臥た手足が急になるまいで充滿して、頭と胸の組織が一寸變つた樣な氣分になつた。其の勢ひで廣い階子段を、案内に應じて、すとん〳〵と景氣よく登つて行つた。が自分の頭が階子段から、ぬつと一尺許り出るや否や、此の決心が、ぐうと退避だ。胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。疊數は何十枚だか知らないが遙の突き當り迄敷き詰めてあつて、其の間には一重の仕切りさへ見えない。丁度柔道の道場か、浪花節の席亭の樣な恰好で、しかも廣さは倍も三倍もある。だから、唯駄々ッ廣い感じ許りで、疊の上でも丸で野原へ出たとしき

や思へない。夫丈でも驚く價値は十分あるが、其の廣い原の中に大きな圍爐裏が二つ切つてある、そこへ人間が約十四五人宛かたまつてゐる。自分の決心が退避いだと云ふのは、卑怯な話だが、全く此の人間にあつたらしい。平生から強がつて居たには居たが、若輩の事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多に首を出した事はない。晴の場所となると、只でさへもじ〳〵する。所へもつて來て、突然坑夫の團體に生擒れたんだから、此の黒い塊を見るが早いか、聊か辟易ぢまつた。それも、たゞの人間ならいゝ。と云つちや意味がよく通じない。――たゞの人間が、坑夫になつてるなら差支ない。所が自分の胸から上が、階子段を出ると、等しく、此塊の各部分が、申し合せた樣に、此方を向いた。其の顏が――實は其の顏で全く畏縮して仕舞つた。と云ふのは其の顏がたゞの顏ぢやない。純然たる坑夫の顏であつた。さう云ふより別に形容し樣がない。坑夫の顏はどんなだらうと云ふ好奇心のあるものは、行つて見るより外に致し方がない。夫れでも是非說明して見ろと云ふなら、ざつと話すが、――頰骨が段々高く聳えてくる。顎が競り出す。同時に左右に突つ張る。眼が壺の樣に引ッ込んで、眼球を遠慮なく、奥の方へ吸ひ附けちまふ。小鼻が落ちる。――要するに肉と云ふ肉がみんな退却して、骨と云ふ骨が悉く吶喊展開するとでも評したら好からう。顏の骨だか、骨の顏だか分らない位に、稜々たるものである。劇しい勞役の結果早く年を取るんだとも解釋は出來るが、たゞ天然自然に年を取つたつて、あゝなるもんぢやない。丸味とか、溫味とか、優味とか云ふものは藥にしたくつても、探し出せない。まあ一口に云ふと獰猛だ。不思議にも此の獰猛な相が一列一體の共有性になつて居ると見えて、圍爐裏の傍の黑いものが等しく自分の方を向くと、またゝく間に獰猛な顏が十四五揃つた。向ふの圍爐裏を取捲いてる連中も同じ顏に違ひない。さつき坂を上がつてくるとき、長屋の窓から自分を見下してゐた顏も全く是である。して見ると組々の長屋に住んでゐる總勢一萬人の顏は悉く獰猛なんだらう。自分は全く退避んだ。

此の時婆さんが後を振り返つて、

「此方へ御出でなさい」

と、もどかしさうに云ふから、度胸を据ゑて、獰猛の方へ近附いて行つた。漸く圍爐裏の傍迄來ると、婆さんが、今度は、

「まあ此處へ御坐んなさい」

と差しづをしたが、唯好加減な所へ坐れと云ふ丈で、別に設けの席も何もないんだから、自分は黑い塊りを避けて、たつた一人疊の上へ坐つた。此の間獰猛な眼は、始終自分に食つ附いてゐる。遠慮も何もありやしない。さうして誰も口を利くものがない。取附端を見出す迄は、團體の中へ交り込む譯にも行かず、ぽつねんと獨り坊ッちで離れてゐるのは、獰猛の目標となる許だし、大いに困つた。婆さんは、自分を紹介する段ぢやない、器械的に「此處へ坐れ」と云つたなり、ちよつ切り結びの尻を振り立てゝ階子段を降りて行つて仕舞つた。廣い寄席の眞中にたつた一人取り殘されて、樂屋の出方一同から、冷かされてる樣なものだ、手持無沙汰は無論である。殊更今の自分に取つては心細い。のみならず袷一枚で甚だ寒い。寒いのは、此の五月の空に、かん〳〵炭を燒いて獰猛共が圍爐裏へあたつてゐるんでも分る。自分は仕方がないからてれ隱しに襯衣の釦をはづして腋の下へ手を入れたり、膝を立てゝ、足の親指を抓つて見たり、或は腿の所を兩手で揉んで見たり、色々遣つてゐた。かう云ふ時に、落付いた顏をして――顏ばかりぢや不

可ない、心から落ち付いて、平氣で坐つてる修業をして置かないと、大きな損だ。然し、十九や、そこいらでは到底覺束ない藝だから、自分は已を得ず、前記の通り色々馬鹿な眞似をしてゐると、突然、

「おい」

と呼んだものがある、自分は此の時丁度下を向いて鳴海絞の兵兒帶を締め直してゐたが、此の聲を聞くや否や、電氣仕掛の顏の樣に、首筋が急に釣つた。見ると先きの顏揃で、眼がみんな此方を向いて、光つてゐる。「おい」と云ふ聲は、どの顏から出たものか分らないが、どの顏から出たにしても大した變りはない。どの顏も獰猛で、よく見ると其の獰猛のうちに、輕侮と、嘲弄と、好奇の念が判然と彫り附けてあつたのは、首を上げる途端に發明した事實で、發明するや否や、非常に不愉快に感じた事實である。自分は仕方がないから、首を上げた儘「おい」の聲がもう一遍出るのを待つてゐた。此の間が約何秒かゝつたか知らないが、兎に角豫期の狀態で一定の姿勢に居つたものらしい。すると、いきなり、

「やに澄ますねえ」

と云つたものがある。此の聲はさつきの「おい」よりも少し皺枯てゐたから、大方別人だらうと鑑定した。然し返答をするべき性質の言葉でないから――字で書くと普通のねえの樣に見えるが、實はなよの命令を俱利加羅流に崩したんだから、甚だ下等である。――それで矢つ張り默つてた。たゞ內心では大いに驚いた。自分が此處へ來て言葉を交したものは原さんと婆さん丈けであるが、婆さんは女だから別として、原さんは思つたよりも叮嚀であつた。所が原さんは飯場頭である。頭ですら是れだから、平の坑夫は無論さう野卑ぢやあるまいと思ひ込んでゐた。だから、此の惡口が藪から棒に飛んで來た時には、こいつはと退

避む前に、まづおやつと毒氣を拔かれた。此處で一層の事毒突返したなら、袋叩きに逢ふか、又は平等の交際が出來るか、どつちか早く片が附いたかも知れないが、自分は何にも口答へをしなかつた。もと〳〵東京生れだから、此の際何とか受ける位は心得てゐたんだらう。それにも拘はらず、兄に類似した言語は無論、尋常の竹篦返しさへ控へたのは、――相手にならないと先方を輕蔑した爲だらうか――或は怖くつて何とも云ふ度胸がなかつたんだらうか。自分は前の方だと云ひたい。然し事實はどうも後の方らしい。兎も角も兩方交つてたと云ふのが一番穩の樣に思はれる。世の中には輕蔑しながらも怖いものが澤山もある。矛盾にやならない。

それは何方にしたつて構はないが、自分が此の惡口を聞いたなり、大人しく聞き流す料簡と見て取つた坑夫共は、面白さうにどつと笑つた。此方が大人なしければ大人なしい程、此の笑は高く響いたに違ない。銅山を出れば、世間が相手にして呉れない返報に、たま〳〵普通の人間が銅山の中へ迷ひ込んで來たのを、是幸ひと嘲弄するのである。自分から云へば、此の坑夫共が社會に對する恨みを、吾身一人で引き受けた譯になる。銅山へ這入る迄は、自分こそ社會に立てない身體だと思ひ詰めてゐた。そこで飯場へ上つて見ると、自分の樣な人間は仲間にしてやらないと云はん許りの取扱ひである。自分は普通の社會と坑夫の社會の間に立つて、立派に板挾みとなつた。だから此の十四五人の笑ひ聲が、ほてる程自分の顏の正面に起つた時は、悲しいと云ふよりは、恥づかしいと云ふよりは、手持無沙汰と云ふよりは、情ない程不人情な奴が揃つてると思つた。無教育は始めから知れてゐる。教育がなければ豫期出來ない程の無理な注文はしない積だが、なんぼ坑夫だつて、親の胎內から持つて生れた儘の、人間らしい所はあるだらう位に

心得てゐたんだから、此の寸法に合はない笑聲を聞くや否や、畜生奴と思つた。俗語に云ふ怒つた時の畜生奴ぢやない。人間と受取れない意味の畜生奴である。今では經驗の結果、人間と畜生の距離が大分詰つてるから、此の位の事をと、鈍い神經の方で相手にしないかも知れないが、何しろ十九年しか、使つてゐない新しい柔かい頭へ此のわる笑がじんと來たんだから、切なかつた。自分ながら思ひ出す度に、まことに痛はしい樣な、いぢらしい樣な、其の時の神經系統を其の儘眞綿に包んで大事に仕舞つて置いてやりたい樣な氣がする。

此惡意に充ちた笑が漸く下火になると、

「御前は何處だ」

と云ふ質問が出た。此の質問を掛けたものは、自分から一番近い所に坐つてゐたから、聲の出所は判然分つた。淺黄色の手拭染みた三尺帶を腰骨の上へ引き廻して、後向きの胡坐の儘、斜に顏丈此方へ見せてゐる。其片眼は生れ附きの赤んべんで、御負に結膜が一面に充血してゐる。

「僕は東京です」

と答へたら、赤んべんが、肉のない頰を凹まして、愚弄の笑ひを洩らしながら、三軒置いて隣りの坑夫を一寸顎でしやくつた。すると此の相圖を受けた、願人坊主が、入れ替つてこんな事を云つた、

「僕だなんて――書生ッ坊だな。大方女郎買でもして仕損つたんだらう。太え奴だ。全體此頃の書生ッ坊の風儀が惡くつて不可ねえ。そんな奴に辛抱が出來るもんか、早く歸れ。そんな瘠つこけた腕で出來る稼業ぢやねえ」

自分はだまつてゐた。あんまり默つてゐたので張合が拔けた所爲か、わい〳〵冷かすのが少し靜まつた。其の時一人の坑夫――是れは尋常な顏である。世間へ出しても普通に通用する位に眼鼻立が調つてゐた。自分は、冷かされながら、眼を上げて、黑い塊を見る度に、人數やら、着物やら、獰猛の度合やらを段々腹に疊み込んでゐたが、最初は總體の顏が總體に骨と眼で出來た上に獸慾の脂が浮いてゐる所ばかり眼に着いて、どれも、これも差別がない樣に思はれた。それが三度四度と重なるにつけて、四人五人と人相の區別が出來るに連れて、此の坑夫丈が一際目立つて見える樣になつた。年はまだ三十にはなるまい。體格は倔强である。眉毛と鼻の根と落ち合ふ所が、一段奥へ引つ込んで、始終鼻眼鏡で壓し附けてる樣に見える。其處に疳癪が拘泥してゐさうだが、之が爲に獰猛の度は却て減ずると云つても好い樣な特徵であつた。

――此坑夫が始めて此時口を利いた。――

「何故斯んな所へ來た。來たつて仕方がないぜ。儲かる所ぢやない。こゝに居る奴あ、みんな食詰もの許りだ。早く歸るが好からう。歸つて新聞配達でもするがいゝ。おれも元は是で學校へも通つたもんだが放蕩の結果とう〳〵、シキの飯を食ふ樣になつちまつた。おれの樣になつたが最後もう駄目だ。歸らうナつて、歸れなくなる。だから今のうちに東京へ歸つて新聞配達をしろ。書生はとても一月と辛抱は出來ないよ。惡い事は云はねえから歸れ。分つたらう」

是れは比較的眞面目な忠告であつた。此の忠告の最中は、さすがの獰惡派も大人しく交つ返しもせずに聞いてゐた。其の惰性で忠告が濟んだあとも、一時は靜であつた。尤も是れは此の坑夫に多少の勢力があるんで、其の勢力に對しての遠慮かも知れないと勘づいた。其の時自分は何となく心の底で愉快だつた。

此の坑夫だつて、外の坑夫だつて、人相にこそ少しの變化はあれ、矢つ張り一つ穴でこつ〳〵鑛塊を缺いてゐる分の事だらう。さう藝に巧拙のある筈はない。して見ると、此の男の勢力は全く字が讀めて、物が解つて、分別があつて――一口に云ふと教育を受けた所爲に違ない。自分は今こんなに馬鹿にされてゐる。殆ど最下等の勞働者にさへ齒されない人非人として、多勢の侮辱を受けてゐる。然し一度此の社會に首を突込んで、獰猛組の一人となりすましたら、一月二月と暮して行くうちには、此の男位の勢力を得る事は出來るかも知れない。出來るだらう。出來るに極つてゐると迄感じた。だから、いくら誰が何と云つても歸るまい、屹度此の社會で一人前以上になつて成功して見せる。――隨分思ひ切つて詰らない考へを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶つてゐる樣だ。そこで此の坑夫の忠告には謹んで耳を傾けてゐたが、別段先方の注文通りに、では歸りませうと云ふ返事もしなかつた。そのうち一旦靜まりかけた愚弄の舌が又動き出した。

「居る氣なら置いてやるが、此處にや、夫々掟があるから呑み込んで置かなくつちや迷惑だぜ」

と一人が云ふから、

「どんな掟ですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分もあるぢやねえか」

と、大變な大きな聲を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。實はあまり我味々々云ふから、默つて居樣かしらんとも思つたけれども、萬一掟を破つて、あとで苛い目に逢ふのが怖いから、まあ聞いて見た。すると他の坑夫が、すぐ、返事をした。

「仕樣のねえ奴だな。親分を知らねえのか。親分も兄弟分も知らねえで、坑夫にならうなんて料簡違えだ。早く歸れ」

「親分も兄弟分も居るから、だから、儲けやうたつて、さう旨かあ行かねえ。歸れ」

「儲かるもんか歸るが好い」

「歸れ」

「歸れ」

しきりに歸れと云ふ。しかも實際自分の爲を思つて歸れと云ふんぢやない。仲間入をさせて遣らないから出て行けと云ふんである。嘸儲けたいだらうが、さうは問屋で卸さない、こちとら丈で儲ける仕事なんだから、諦めて早く歸れと云ふんである。從つて何處へ歸れとも云はない。川の底でも、穴の中でも構はない勝手な所へ歸れと云ふんである。自分は默つてゐた。

此の形勢が此の儘で續いたら、どんな事にたち至つたか思ひ遣られる。敵は此の園爐裏の周圍許にや居ない。さつき一寸話した通り、向ふの方にも大きな輪になつて、黑く塊つてゐる。こつちの團體丈ですら持ち扱つてゐる所へ、彼方の群勢が加勢したら大事である。自分は愚弄されながらも、時々横目を使つて、未來の敵――かうなると、どれもこれも人間でさへあれば、敵と認定して仕舞ふ。――遠方には居るが、そろそろ押し寄せて來さうな未來の敵を、見てゐた。斯樣に自分の心が、左右前後と離れ離れになつて、しか

も獨立が出來ないものだから、物の後を追掛け、追ん廻はしてゐる程辛い事はない。なんでも敵に逢たら敵を呑むに限る。呑む事が出來なければ呑まれて仕舞ふが好い。もし兩方共困難ならぷつりと緣を截つて、獨立自尊の態度で敵を見てゐるがいゝ。敵と融合する事も出來ず、敵の勢力範圍外に心を持つてく事も出來ず、しかも敵の尻を喫がなければならないとなると、甚だしき損となる。從つて尤も下等である。自分はかう云ふ場合にたび〳〵遭遇して、色々な活路を研究して見たが、研究した程に、心が云ふ事を聞かない。だから茲に申す三策は、みんな釋迦の空說法である。もし講釋をしないでも知れ切つてる陳說なら、猶更言ふ丈が野暮になる。どうも正式の學問をしないと、かう云ふ所へ來て、取捨の區別が附かなくつて困る。

自分が四方八方に氣を配つて、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入つてゐると、

「御膳を御上がんなさい」

と云ふ婆さんの聲が聞えた。何時の間に婆さんが上がつて來たんだか、自分の魂が鳩の卵の樣に小さくなつて、萎縮した眞最中だつたから、御膳の聲が耳に入る迄は丸で氣が附かなかつた。見ると剝げた御膳の上に緣の缺けた茶碗が伏せてある。小さい飯櫃も乘つてゐる。箸は赤と黃に塗り分けてあるが、黃色い方の漆が半分程落ちて木地が全く出てゐる。御菜には糸蒟蒻が一皿附いてゐた。自分は伏目になつて此御膳の光景を見渡した時、大いに食ひたくなつた。實は今朝から水一滴も口へ入れてゐない。胃は全く空である。もし空でなければ、昨日食つた揚饅頭と薩摩芋がある許りである。飯の氣を離れる事約二晝夜になるんだから、如何に魂が萎縮してゐる此の際でも、御櫃の影を見るや否や食慾は猛然として咽喉元迄詰め寄せて來た。そこで、冷かしも、交ぜつ返しも氣に掛ける暇なく、見榮も糸瓜も棒に振つて、いきなり、お

櫃からしやくつて茶碗へ一杯盛り上げた。其の手數さへ面倒な位待ち遠しい程であつたが、例の剝箸を取り上げて、茶碗から飯をすくひ出さうとする段になつて――おやと驚いた。些ともすくへない。指の股に力を入れて箸をうんと底迄突つ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、矢張り駄目だ。飯はつる〳〵と箸の先から落ちて、決して茶碗の緣を離れ樣としない。十九年來未だ曾てない經驗だから、あまりの不思議に、此の仕損を二三度繰り返して見た上で、はてなと箸を休めて考へた。恐らく狐に撮まれた樣な風であつたんだらう。見てゐた坑夫共は又ぞろ、どつと笑ひ出した。自分は此の聲を聞くや否や、いきなり茶碗を口へ附けた。さうして光澤のない飯を一口搔き込んだ。すると笑ひ聲よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上丈へ魂が宿つたと思ふ位に變な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。此の壁土が唾液に和けて、口一杯に廣がつた時の心持は云ふに云はれなかつた。

「面あ見ろ。いゝ樣だ」

と一人が云ふと、

「御祭日でもねえのに、銀米の氣で居やがらあ。だから歸れつて敎えてやるのに」

と他のものが云ふ。

「南京米の味も知らねえで、坑夫にならうなんて、頭つから料簡違だ」

と又一人が云つた。

自分は嘲弄のうちに、術なく此の南京米を呑み下した。一口で已め樣と思つたが、折角盛り込んだものを、食つて仕舞はないと、又冷かされるから、熊の膽を呑む氣になつて、茶碗に盛つた丈は奇麗に腹の中

へ入れた。全く食慾の爲ではない。昨日食つた揚饅頭や、ふかし芋の方が、どの位御馳走であつたか知れない。自分が南京米の味を知つたのは、生れて是が始てゞある。

茶碗に盛つた丈は、かう云ふ譯で、どうにか、かうにか片附たが、二杯目は我慢にも盛ふ氣にならなかつたから、糸蒟蒻丈を食つて箸を置く事にした。此の位辛抱して無理に厭なものを口に入れてさへ、箸を置くや否や散々に嘲弄された。其の時は隨分つらい事と思つたが、其後日に三度宛は、必ず此の南京米に對はなくつちやならない身分となつたんで、流石の壁土も慣れるに連れて、所謂銀米と同じく、人類の食ひ得べきもの、否食つて然るべき滋味と心得る樣になつてからは、剝膳に向つて逡巡した當時が却て恥づかしい氣持になつた。坑夫共の冷かしたのも萬更無理ではない。今となると、こんな無經驗な貴族的の坑夫が一杯の南京米を苦に病む所に廻り合はせて、現狀を目擊したら、ことに因ると、自分でさへ、笑ふも知れない。冷かさない迄も、善意に笑ふ丈の價値は十分あると思ふ。人は色々に變化するもんだ。

南京米の事許り書いて濟まないから、もう已めにするが、此の時自分の失敗に對する冷評は、自然の儘にして拋つて置いたなら、何處まで續いたか分らない。所へ急に金盥を叩き合せる樣な音がした。一度でばない。二度三度と聞いてゐるうちに、ぢやらくん、ぢやらくん、ぢやららんと時を句切つて、拍子を取りながら叩き立てゝ來る。すると今度は木唄の聲が聞え出した。純粹の木唄では無論ないが、自分の知つてる限りでは、まあ木唄と云ふのが一番近い樣に思はれる。此時冷評は一時に已んだ。ひつそりと靜まり返る山の空氣に、ぢやらくん、ぢやららんが鳴り渡る間を、一種異樣に唄ひ囃して何物か近づいて來た。

「ジヤンボーだ」

と一人が膝頭を打たない許に、大きな聲を出すと、

「ジヤンボーだ。ジヤンボーだ」

と大勢口々に云ひながら、黑い塊がばらくになつて、窓の方へ立つて行つた。自分は何がジヤンボーなんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると同時に、氣分が急に暢達した所爲か、自分もジヤンボーを見度と云ふ餘裕が出來て、餘裕につれて元氣も出來た。つくくく考へるに、人間の心は水の樣なもので、押されると引き、引くと押して行く。始終手を出さない相撲をとつて暮らしてゐると云つても差支なからう。夫れで、みんなが立ち盡したあとから、自分も立つた。さうして矢つ張り窓の方へ歩いて行つた。黑い頭で下は塞がつてゐる上から脊伸をして見下すと、斜に曲つてる向の石垣の角から、紺の筒袖を着た男が二人出た。あとから又二人出た。是れはいづれも金盥を壓しつぶして薄つ片にした樣なものを兩手に一枚宛持つて居る。はゝあ、あれを叩くんだと思ふ拍子に、二人は兩手をぢやくんと打ち合はした。其の不調和な音が切つ立つた石垣に突き當つて、後の禿山に響いて、まだ已まないうちに、ぢやららんと又一組が後から鳴らし立てゝ現れた。たと思ふと又現れる。今度は金盥を持つてゐない。其の代り木唄ーーさつきは木唄と云つた。然し此の時、彼等の揚げた聲は、木唄と云はんよりは寧ろ浪花節で吶喊する樣な稀代な調子であつた。

「おい金公は居ねえか」

と、黑い頭の一つが怒鳴つた。後向だから顏は見えない。すると、

「うん金公に見せて遣れ」

とすぐ應じた者がある。此の言葉が終るか、終らない間に、五つ六つの黑い頭がずらりと此方を向いた。自分は又何か云はれる事と覺悟して仕方なしに、今迄の態度で立つてゐると、不思議にも振り返つた眼は自分の方に着いて居ない。廣い部屋の片隅に遠く走つた樣子だから、何物がゐる事かと、自分も後を追つ懸けて、首を捻ぢ向けると、――寐てゐる。薄い布團をかけて一人寐てゐる。

「おい金州」

と一人が大きな聲を出したが、寐て居るものは返事をしない。

「おい金しう起きろやい」

と怒鳴つける樣に呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人許窓を離れてとう〳〵迎に出掛た。被つてゐる布團を手荒にめくると、細帶をした人間が見えた。同時に、

「起きろつてば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云ふ聲も聞えた。やがて横になつてた男が、二人の肩に支へられて立ち上つた。さうして此方を向いた。其の時、其の刹那、其の顏を一目見た許りで自分は思はず慄とした。是れは只保養に寐てゐた人ではない。全くの病人である。しかも自分丈で起居の出來ない樣な重體の病人である。年は五十に近い。髯は幾日も剃らないと見えてぼう〳〵と延びた儘である。如何な獰猛も、かう憔悴ると憐れになる。憐れになり過ぎて、逆に又怖くなる。自分が此の顏を一目見た時の感じは憐れの極全く怖かつた。

病人は二人に支へられながら、釣れる樣に、利ない足を運ばして、窓の方へ近寄つてくる。此の有樣を見てゐた、窓際の多人數は、さも面白さうに囃し立てる。

「よう、金しう早く來いよ。今ジャンボーが通る所だ。早く來て見ろよ」

「己あジャンボーなんか見たかねえよ」

と病人は、無體に引き摺られながら、氣のない聲で返事をするうちに、見たいも、見たくないもありやしない。忽ち窓の障子の角迄壓し附けられて仕舞つた。

ぢや〳〵ん、ぢやららんとジャンボーは知らん顏で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ盡きないのかと、又脊延びをして見下した時、自分は再び慄とした。金盥と金盥の間に、四角な早桶が挾まつて、山道を宙に釣られて行く。上は白金巾で包んで、細い杉丸太を通した兩端を、水でも一荷賴まれた樣に、容赦なく擔いでゐる。其擔いでゐるもの迄も、此方から見ると、例の唄を陽氣にうたつてる樣に思はれる。――自分は此の時始めてジャンボーの意味を理解した。生涯如何なる事があつても、決して忘れられない程痛切に理解した。ジャンボーは葬式である。坑夫、シチウ、掘子、山市に限つて執行される、又執行されなければならない一種の葬式である。御經の文句を浪花節に唄つて、金盥の潰れる程に音樂を入れて、一荷の水と同じ樣に棺桶をぶらつかせて――最後に、半死半生の病人を、無理矢理に引き摺り起して、否と云ふのを抑へ附ける許りにして迄見せてやる葬式である。まことに無邪氣の極で、又冷刻の極である。

「金しう、どうだ、見えたか、面白いだらう」

と云つてる。病人は、

「うん、見えたから、床ん所迄連れてつて、寢かして吳れよ。後生だから」

と賴んでゐる。さつきの二人は再び病人を中へ挾んで、

「よつしよい〳〵」

と云ひながら、刻み足に、布團の敷いてある所迄連れて行つた。

此の時曇つた空が、粉になつて落ちて來たかと思はれる樣な雨が降り出した。ジヤンボーは此の雨の中を敲き立てゝ町の方へ下つて行く。大勢は

「又雨だ」

と云ひながら、窓を立て切つて、各々圍爐裏の傍へ歸る。此の混雜紛に自分も何時の間にか獰猛の仲間入りをして、火の近所迄寄る事が出來た。是れは偶然の結果でもあり、又故意の所作でもあつた。と云ふものは火の氣がなくつては甚だ寒い。袷一枚では迚も凌ぎ兼ねる程の山の中だ。それに雨さへ降り出した。雨と云へば雨、霧と云へば霧と云はれる位な微かな粒であるが、四方の禿山を罩め盡した上に、筒拔けの空を塗り潰して、しとゞと落ちて來るんだから、家の中に坐つて居てさへ、糠よりも小さい濕り氣が、毛穴から腹の底へ沁み込む樣な心持である。火の氣がなくつては到底遣り切れるものぢやない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、聊かながら圍爐裏のほとぼりを顏に受けてゐると、今度は存外にも度外視されて、思つたよりも調戯れずに濟んだ。是れは此方から進んで獰猛の仲間入りをした爲、向ふでも普通の獰猛として取扱ふべき奴だと勘辨してくれたのか、それとも先刻のジヤンボーで不意に氣が變つた成行として、自分の事をしばらく忘れてくれたのか、又は冷笑の種が盡きたか、或は毒突のに飽きたんだか、――何しろ自分が席を改めてから、自分の氣は比較的樂になつた。さうして圍爐裏の傍の話は矢つ張りジヤンボーで持ち切つてゐた。色々な聲がこんな事を云ふ。――

「あのジヤンボーは何處から出たんだらう」

「何處から出たつて御ジヤンボーだ」

「ことによると黑市組かも知れねえ。見當がさうだ」

「全體ジヤンボーになつたら何處へ行くもんだらう」

「御寺よ。極つてらあ」

「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」

「さうよ、そりや寺限で留りつ子ねえ譯だ。何處へ行くに違えねえ」

「だからよ。其行く先はどんな所だらうてえんだ。矢張こんな所かしら」

「そりや、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」

「己もさう思つてる。行くとなりや、どうも外へ行く譯がねえからな」

「いくら地獄だつて極樂だつて、矢つ張り飯は食ふんだらう」

「女もゐるだらうか」

「女のゐねえ國が世界にあるもんか」

ざつと、こんな談話だから、聞いてゐると滅茶々々である。それで始めのうちは冗談だと思つた。笑つても差支ないものと心得て、口の端をむづゝかせながら、一寸樣子を見渡した位であつた。所が笑ひたいのは自分丈で、圍爐裏を取り捲いてゐる顏はいづれも、彫り附けた樣に堅くなつてゐる。彼等は眞劍の眞面目で未來と云ふ大問題を論じてゐたんである。實に嘘としか受け取れない程の熱心が、各々の眉の間に

見えた。自分は此の時、此の有樣を一瞥して、さつきの笑ひたかつた念慮を忽ちのうちに一變した。こんな向ふ見ずの無鐵砲な人間が――カンテラを提げて、シキの中へ下りれば、もう二度と日の目を見ない料簡でゐる人間が――人間の器械で、器械の獸とも云ふべき此の獰猛組が、かほどに未來の事を氣にしてゐる樣とは、まことに豫想外であつた。して見ると、世間には、未來の保證をしてくれる宗教といふものが入用の筈だ。實際自分が眼を上げて、圍爐裏のぐるりに胡坐をかいて竝んだ連中を見渡した時には、遠慮に畏縮が手傳つて、七分方出來上つた笑ひを急に崩したと云ふ自覺は無論なかつた。只寄席を聞いてる積で眼を開けて見たら鼻の先に毘沙門樣が大勢居て、是はと威儀を正さなければならない氣持であつた。一口に云ふと、自分は此の時始めて、眞面目な宗教心の種を見て、半獸半人の前にも嚴格の念を起したんだらう。其の癖自分は未だに宗教心と云ふものを持つてゐない。

此時さつきの病人が、向ふの隅でううんと唸り出した。其唸り聲には無論特別の意味はない、單に普通の病人の唸り聲に過んのだが、ジヤンボーの未來に屈託してゐる連中には、一種のあやしい響の樣に思はれたんだらう。みんな眼と眼を見合した。

「金公苦しいのか」

と一人が大きな聲で聞た。病人は、ただ、

「ううん」

と云ふ。唸つてるのか、返事をしてゐるのか判然しない。すると又一人の坑夫が、

「そんなに鼻の事ばかり氣にするなよ。どうせ取られちまつたんだ。今更唸つたつてどうなるもんか。

質に入れた鼻だ。受出さなけりや流れるなあ當り前だ」

と、矢つ張り圍爐裏の傍へ坐つた儘、大きな聲で慰めてゐる。慰めてゐるんだか、惡口を吐いてゐるんだか疑はしい位である。坑夫から云ふと、何方も同じ事なんだらう。病人はたゞううんと挨拶――挨拶にもならない聲を微かに出す許りであつた。そこで大勢は懸合にならない慰藉を已めて、圍爐裏の周圍丈で舌の用を辨じてゐた。然し話題はまだ金さんを離れない。

「なあに、病氣せへしなけりや、金公だつて鼻を取られずに濟むんだあな。元を云やあ、矢つ張り自分が惡いからよ」

と一人が、金さんの病氣をさも罪惡の樣に評するや否や、

「全くだ。自分が病氣をして金を借りて、其の金が返せねえから、鼻を抵當に取られちまつたんだから、正直の所文句の附け樣がねえ」

と贊成したものがある。

「若干で抵當に入れたんだ」

と聞くと、向側から、

「五兩だ」

と誰だか、簡潔に敎へた。

「それで市の野郎が長屋へ下がつて、金しうと入れ代つた譯か。ハ、、、、」

自分は圍爐裏の側に坐つてるのが苦痛であつた。脊中の方がぞく〳〵する程寒いのに、腋の下から汗が

出る。

「金しうも早く癒つて、噂を受け出したら好からう」

「又、市と入れ代りか。世話あねえ」

一夫よりか、うんと稼いで、もつと價に踏める抵當でも取つた方が、氣が利いてらあ」

「違ねえ」

と一人が云ひ出すのを相圖に、みんなどつと笑つた。自分は此笑の中に包まれながら、どうしても笑ひ切れずに下を向いて仕舞つた。見ると膝を竝べて畏まつてゐた。馬鹿らしいと氣が附いて、胡坐に組み直して見た。然し腹の中は決して胡坐をかく程悠長ではなかつた。

其の内段々日暮に近くなつて來る。時間が移る許りぢやない。天氣の具合と、山が圍んでゐる所爲で早く暗くなる。默つて聞いてゐると、雨垂の音もしない樣だから、ことによると、雨はもう歇んだのかも知れない。然し此の暗さでは、矢つ張り降つてゐると云ふ方が當るだらう。窓は固り締め切つてある。戸外の模樣は分り樣がない。然し暗くつて濕ッぽい空氣が障子の紙を透して、一面に圍爐裏の周圍を襲つて來た。竝んでゐる十四五人の顏が次第々々に漠然する。同時に圍爐裏の眞中に山の樣にくべた炭の色が、ほてり返つて、少し宛赤く浮き出す樣に思はれた。丸で、自分は坑の底へ減入込んで行く、火は之に反して坑から段々競り上がつて來る、――ざつと、そんな氣分がした。時にぱつと部屋中が明るくなつた。見ると電氣燈が點いた。

「飯でも食ふべえ」

と一人が云ふと、みんな忘れものを思ひ出した樣に、

「飯を食つて、又交替か」

「今日は少し寒いぞ」

「雨はまだ降つてるのか」

「どうだか、表へ出て仰向て見な」

抔と、口々に罵り乍ら、立つて、階子段を下りて行つた。自分は廣い部屋にたつた一人殘された。自分の外にゐるものは病人の金さん許りである。此の金さんが矢つ張り微な聲を出して唸つてる樣だ。自分は圍爐裏の前に手を翳して胡坐を組みながら、横を向いて、金さんの方を見た。頭は出てゐない。足も引つ込ましてゐる。金さんの身體は一枚の布團の中で、小さく平つたくなつてゐる。氣の毒な程小さく平つたく見えた。其の内唸り聲も、どうにか、かうにか已んだ樣だから、又顏の向を易へて、圍爐裏の中を見詰めた。所がなんだか金さんが氣に掛かつて堪らないから、又横を向いた。すると金さんは矢つ張り一枚の布團の中で、小さく平つたくなつてゐる。さうして、森としてゐる。生きてるのか、死んでるのか、たゞ森としてゐる。唸られるのも、あんまり氣味の好いもんぢやないが、かう靜かにしてゐられると猶心配になる。心配の極は怖くなつて、一寸立ち懸けたが、まあ大丈夫だらう、人間はさう急に死ぬもんぢやないと、度胸を据ゑてまた尻を落ち附けた。

所へ二三人、下からどやく〳〵と階子段を上がつて來た。もう飯を濟ましたんだらうか、それにしては非常に早いがと、心持上がり段の方を眺めてゐると、思も寄らないものが、現れた。――黑か紺か色の判然

しない筒服を着てゐる。足は職人の穿く様な細い股引で、色は矢張り同じ紺である。それでカンテラを提げてゐる。のみならず二人が二人とも泥だらけになつて、濡れてゐる。さうして、口を利かない。突つ立つた儘自分の方をぎろりと見た。丸で強盜としきあ思へない。やがて、カンテラを抛り出すと、鉗を外して、筒袖を脱いだ。股引も脱いだ。壁に掛けてある廣袖を、めりやすの上から着て、尻の先に三尺帶をぐるりと囘しながら、矢つ張り無言の儘、二人してずしり〳〵と降りて行つた。すると又上がつて來た。今度のも濡れてゐる。泥だらけである。カンテラを抛り出す。着物を着換へる。ずしん〳〵と降りて行く。と又上がつて來る。かう云ふ風に入代り、入代りして、何でも餘程來た。いづれも底の方から眼球を光らして、一遍丈は屹度自分を見た。中には、

「手前は新前だな」

と云つたものもある。自分は只、

「えゝ」

と答へて置いた。幸ひ今度はさつきの樣に無暗には冷やかされずに、まあ無難に濟んだ。上がつて來るものも、來るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戯ふ暇がなかつたんだらう。其の代り一人に一度宛は必ず睨まれた。さうかうしてゐる内に、上がつて來るものが漸く絶えたから、自分は漸く寛容だ思ひをして、圍爐裏の炭の赤くなつたのを見詰めて、色々考へ出した。勿論纒まり樣のない。且考へれば考へる程馬鹿になる考へだが、火を見詰てゐると、炭の中にさう云ふ妄想がちら〳〵ちら〳〵燃えてくるんだから仕方がない。とう〳〵自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火氣に煽られながら、無暗に踊ををどつてる

樣な變な心持になつた時に、突然、

「草臥れたらうから、もう御休みなさい」

と云はれた。

見ると、さつきの婆さんが、立つてゐる。矢張襷掛の儘である。何時の間に上がつて來たものか、些とも氣が附かなかつた。自分の魂が遠慮なく火の中を馳け廻つて、艶子さんになつたり、澄江さんになつたり、親爺になつたり、金さんになつたり、――被布やら、廂髪やら、赤毛布やら、唸り聲やら、揚饅頭やら、華嚴の瀧やら――幾多無數の幻影が、圍爐裏の中に躍り狂つて、立ち騰る火の氣の裏に追つ追れつ、日向に浮ぶ塵と思はれる迄夥しく出て來た最中に、はつと氣が附いたんだから、眼の前にゐる婆さんが、不思議な位變であつた。然し寐ろと云ふ注意丈は明かに耳に聞えたに違ないから、自分はたゞ、

「えゝ」

と答へた。すると婆さんは後ろの戸棚を指して、

「布團は、あすこに這入つてゐるから、獨で出して御掛けなさい。一枚三錢づゝだ。寒いから二枚は入るでせう」

と聞くから、又

「えゝ」

と答へたら、婆さんは、夫れ限何にも云はずに、降りて行つた。是れで、自分は寐てもいゝと云ふ許可を得たから、正式に横になつても劒突を食ふ恐れはあるまいと思つて、婆さんの指圖通り戸棚を明けて見る

と、あつた。布團が澤山あつた。然しいづれも薄汚いもの許りである。自宅で敷いてゐたのとは丸で比較にならない。自分は一番上に乘つてゐるのを二枚、そつと卸した。さうして、電氣燈の光で見た。地は淺黄である。模樣は白である。其の上に垢が一面に塗り附けてあるから、六分方色變りがして、白い所抔は、通例なら我慢の出來にくい程どろんと、化けてゐる。其の上頗る堅い。搗き立ての伸し餅を、金巾に包んだ樣に、綿は綿でかたまつて、表布とは丸で緣故がない程の、こち〳〵したものである。

自分は此布團を疊の上へ平く敷いた。それから殘る一枚を平く掛けた。さうして、襯衣丈になつて、其の間に潛り込んだ。濕つぽい中を割り込んで、兩足をうんと伸ばしたら踵が疊の上へ出たから、又心持引つ込ました。延ばす時も曲げる時も、不斷の樣に輕くしなやかには行かない。みしりと音がする程、關節が窮屈に硬張つて、動きたがらない。じつとして、布團の中に膝頭を横たへてゐると、倦怠のを通り越して重い。腿から下を切り取つて、其の代りに筋金入りの義足を附けられた樣に重い。丸で感覺のある二本の棒である。自分は冷たくつて重たい足を苦に病んで、頭を布團の中に突つ込んだ。せめて頭丈でも暖にしたら、足の方でも折れ合つて呉れるだらうとの、果敢ない望みから出た窮策であつた。

然し流石に疲れてゐる。寒さよりも、足よりも、布團の臭ひよりも、煩悶よりも、厭世よりも――疲れてゐる。實に死ぬ方が樂な程疲れ切つてゐた。それで、横になるとすぐ――疊から足を引つ込まして、頭を布團に入れる丈けの所作を仕遂げたと思ふが早いか、眠て仕舞つた。ぐう〳〵正體なく眠て仕舞つた。是から先きは自分の事ながら到底書けない。……

すると、突然針で脊中を刺された。夢に刺されたのか、起きてゐて、刺されたのか、感じは頗る曖昧であつた。だからそれ丈の事ならば、針だらうが刺だらうが、頓着はなかつたらう。正氣の針を夢の中に引摺り込んで、夢の中の刺を前後不覺の床の下に埋めてしまふ分の事である。所がさうは行かなかつた。と云ふものは、刺されたなと思ひながらも、針の事を忘れる程にうつとりなると、又一つ、ちくりと遣られた。

今度は大きな眼を開いた。所へ又ちくりと來た。おやと驚く途端に又ちくりと刺した。是れは大變だと漸く氣が附きがけに、飛び上る程劇しく股の邊を遣られた。自分は此の時始めて、普通の人間に歸つた。さうして身體中至る所がちく〳〵してゐるのを發見した。そこでそつと襯衣の間から手を入れて、脊中を撫でゝ見ると、一面にざら〳〵する。最初指先が肌に觸れた時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹つたんだと思つた。所が指を肌に着けた儘、二三寸引いて見ると、何だか、ばら〳〵と落ちた。是れは只事でないと忽ち跳ね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら圍爐裏の傍へ行つて、親指と人差指の間に押へた、米粒程のものを、檢査して見ると、異樣の蟲であつた。實は此の時分には、まだ南京蟲を見た事がないんだから、果して是れがさうだとは斷言出來なかつたが――何だか直覺的に南京蟲らしいと思つた。かう云ふ下卑た所に直覺の二字を濫用しては濟まんが、外に言葉がないから、已を得ず高尚な術語を使つた。偖其の蟲を檢査してゐるうちに、非常に惡らしくなつて來た。圍爐裏の緣へ乘せて、ぴちりと親指の爪で壓し潰したら、云ふに云はれぬ青臭い蟲であつた。此の青臭い臭氣を嗅ぐと、何となく好い心持になる。――自分はこんな醜い事を眞面目にかゝねばならぬ程狂違染みてゐた。實を云ふと、此の青臭い臭氣を嗅ぐ迄は、恨を霽らした樣な氣がしなかつたのである。それだから捕つては潰し、捕つては潰し、潰すたんびに親指の

爪を鼻へあてがつて嗅いでゐた。すると鼻の奥へ詰つて來た。今にも涙が出さうになる。非常に情ない。それだのに、爪を嗅ぐと愉快である。此の時二階下で大勢が一度にどつと笑ふ聲がした。自分は急に蟲を潰すのを已めた。廣間を見渡すと誰もゐない。金さん丈が、平たくなつて靜かに寐てゐる。頭も足も見えない。其の外にたつた一人ゐた。尤も始めて氣が附いた時は人間とは思はなかつた。向ふの柱の中途から、窓の敷居へかけて、帆木綿の樣なものを白く渡して、其の幅のなかに包まつてゐたから、何だか氣味が惡かつた。然しよく見ると、白い中から黑いものが斜に出てゐる。さうして夫が人間の毬栗頭であつた。——廣い部屋には、自分と此の二人を除いて、誰もゐない。たゞ電氣燈がかん〳〵點いてゐる。大變靜かだ、と思ふと又下座敷でわつと笑つた。さつきの連中か、又は作業を濟まして歸つて來たものが、大勢寄つて巫山戲散らしてゐるに違ない。自分は茫乎して布團のある所迄歸つて來た。さうして裸體になつて、襯衣を振るつて、枕元にある着物を着て、帶を締めて、一番仕舞に敷いてある布團を叮嚀に疊んで戸棚へ入れた。それから後はどうして好いか分らない。時間は何時だか、夜は到底まだ明けさうにしない。腕組をして立つて考へてゐると、足の甲が又むづ〳〵する。自分は堪へ切れずに、

「えつ畜生」

と云ひながら二三度小躍をした。それから、右の足の甲で、左の上を擦つて、左の足の甲で右の上を擦つて、是れでもかと齒軋をした。しかし表へ飛び出す譯にも行かず、寐る勇氣はなし、と云つて、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣は固りない。先き毒突かれた事を思ひ出すと、南京蟲より餘つ程厭だ。夜が明ければいゝ、夜が明ければいゝと思ひながら、自分は表へ向いた窓の方へ歩いて行つた。すると其處に柱があつた。自分は立ちながら、此柱に倚つ掛つた。脊中を附けて腰を浮かして、足の裏で身體を持たしてゐると、兩足がずる〳〵疊の目を滑つて段々遠くへ行つちまふ。夫れから又眞直に立つ。又ずるずる滑る。又立つ。まづ斯んな事をしてゐた。幸ひ南京蟲は出て來なかつた。下では時々どつと笑ふ。

居ても立つてもと云ふのは喩だが、其の居ても立つてもを、實際に經驗したのは此の時である。だから坐るとも立つとも方の附かない運動をして、中途半端に紛らかしてゐた。所が其の運動をいつ迄根氣に遣つたものか覺えてゐない。いとゞ疲れてゐる上に、猶手足を疲らして、いかな南京蟲でも應へない程疲れ切つたんで、始めて寐たもんだらう。夜が明けたら、自分が摺り落ちた柱の下に、足だけ延ばして、脊を丸く蹲踞つてゐた。

是れ程苦しめられた南京蟲も、二日三日と過つにつれて、段々痛くなくなつたのは妙である。其の實、一箇月許りしたら、いくら南京蟲が居やうと、丸で米粒でも、ぞろ〳〵轉がつてる位に思つて、夜はいつでも、ぐつすり安眠した。尤も南京蟲の方でも日數を積むに從つて遠慮してくるさうである。其證據には新來のお客には、べた一面にたかつて、夜通し苛めるが、少し辛抱してゐると、向ふから、愛想をつかして、あまり寄り附かなくなるもんだと云ふ。毎日食つてる人間の肉は自然鼻につくからだとも敎へたものがあるし、いや肉の方に夫丈の品格が出來て、シキ臭くなるから、蟲も恐れ入るんだとも說明したものがある。さうして見ると此處の南京蟲と坑夫とは、性質が能く似てゐる。恐らく坑夫許りぢやあるまい、一般の人類の傾向と、此南京蟲とは矢張り同樣の心理に支配されてゐるんだらう。だから此解釋は人間と蟲けらを概括する所に面白味があつて、哲學者の喜びさうな、美しいものであるが、自分の考へを云ふと全く

さうぢやないらしい。蟲の方で氣兼をしたり、贅澤を云つたりするんぢやなくつて、食はれる人間の方で習慣の結果、無神經になるんだらうと思ふ。蟲は依然として食つてるが、食はれても平氣でゐるに違ない。尤も食はれて感じないのも、食はれなくつて感じないのも、趣こそ違へ、結果は同じ事であるから、是は實際上議論をしても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の辯は、どうでもいゝとして、自分が眼を開けて見たら、夜は全く明け放れてゐた。下ではもうがや〳〵云つてゐる。嬉しかつた。窓から首を出して見ると、又雨だ。尤も判然とは降つてゐない。雲の濃いのが糸になり損なつて、なつた丈が、細く地へ落ちる氣色だ。だから無暗に濛々とはしてゐない。次第々々に雨の方に片附いて、片附に從つて糸の間が透いて見える。と云つても見えるものは山ばかりである。しかも草も木も至つて乏しい、潤のない山である。これが夏の日に照り附けられたら、山の奥でも嘸暑からうと思はれる程赤く禿げてぐるりと自分を取り捲いてゐる。さうして殘らず雨に濡れてゐる。潤ひ氣のないものが、濡れてゐるんだから、土器に霧を吹いた樣に、いくら濡れても濡れ足りない。其の癖寒い氣持がする。それで自分は首を引つ込め樣としたら、一寸眼についた。――手拭を被つて、藁を腰に當てゝ、筒服を着た男が二三人、向ふの石垣の下にあらはれた。丁度昨日ジヤンボーの通つた路を逆に歩いて來る。遠くから見ると、如何にもしよぼ〳〵して氣の毒な程憐れである。自分も今朝からあゝなるんだなと、不圖氣が附いて見ると、人事とは思はれない程、向へ行く手拭の影――雨に濡れた手拭の影が情なかつた。すると雨の間から又古帽子が出て來た。其の後から又筒袖姿があらはれた。何でも朝の番に當つた坑夫がシキへ這入る時間に相違ない。自分は漸く窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一度

にどや〳〵と階子段を上つて來る。來たなと思つたが仕方がないから懷手をして、柱にもたれてゐた。五六人は見る間に、同じ出立に着更へて下りて行つた。後から又上がつてくる。又筒袖になつて下りて行く。とう〳〵飯場にゐる當番は悉く出拂つた樣だ。

かう飯場中活動して來ると、自分も安閑としちや居られない。と云つて誰も顔を御洗ひなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云ひに來て呉れない。いかな坊つちやんも、あまり手持無沙汰過ぎて困つちまつたから、思ひ切つて、のこ〳〵下りて行つた。心は無論落附いちやゐないが、態度丈は丸で宿屋へ泊つて、茶代を置いた御客の樣であつた。いくら恐縮しても自分には、是れより以外の態度が出來ないんだから全くの生息子である。下て見ると例の婆さんが、襷がけをして、草鞋を一足ぶら下げて奥から驅けて來た所へ、ばつたり出逢つた。

「顔は何處で洗ふんですか」

と聞くと、婆さんは、一寸自分を見たなりで、

「あつち」

と云ひ捨てゝ門口の方へ行つた。丸で相手にしちや居ない。自分にはあつちの見當がわからなかつたが、兎に角婆さんの出て來た方角だらうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな臺所へ出た。眞中に四斗樽を輪切にした樣なお櫃が据ゑてある。あの中に南京米の炊いたのが一杯詰つてるのかと思つたら、――何しろ自分が三度々々一箇月食つても食ひ切れない程の南京米なんだから、食はない前からうんざりしちまつた。――顔を洗ふ所も見附けた。臺所を下て長い流の前へ立つて、冷たい水で、申し譯の爲に頬邊を

撫でゝ置いた。かうなると叮嚀に顔なんか洗ふのは馬鹿々々しくなる。これが一歩進むと、顔は洗はなくつても宜いものと度胸が坐つてくるんだらう。昨日の赤毛布や小僧は全くかう云ふ順序を踏んで進化したものに違ない。

顔は漸く自力で洗つた。飯はどうなる事かと、又のそ〳〵臺所へ上つた。所へ幸ひ婆さんが表から歸つて來て膳立てをしてくれた。難有い事に味噌汁が付いてゐたんで、こいつを南京米の上から、ざつと掛けて、ざく〳〵と掻き込んだんで、今度は壁土の味を嚙み分ないで濟んだ。すると婆さんが、

「御飯が濟んだら、初さんがシキへ連れて行くつて待つてるから、早く御出なさい」

と、箸も置かない先から急き立てる。實はもう一杯位食はないと身體が持つまいと思つてた所だが、かう催促されて見ると、無論御代りなんか盛う必要はない。自分は、

「はあ、さうですか」

と立ち上がつた。表へ出て見ると、成程上り口に一人掛けてゐる。自分の顔を見て、

「御前か、シキへ行くなあ」

と、石でも打つ缺く樣な勢ひで聞いた。

「えゝ」

と素直に答たら、

「ぢや、一所に來ねえ」

と云ふ。

「此服裝でも好いんですか」

と叮嚀に聞き返すと、

「不可ねえ、不可ねえ。そんな服裝で這入るもんか。此處へ親分とこから一枚借りて來てやつたから、此服を着るがいゝ」

と云ひながら、例の筒袖を拋り出した。

「そいつが上だ。こいつが股引だ。そら」

と又股引を拋げつけた。取りあげて見ると、じめ〳〵する。所々に泥が着いてゐる。地は小倉らしい。自分もとう〳〵此御仕着を着る始末になつたんだなと思ひながら、絆を脱いで上下とも紺揃になつた。一寸見ると内閣の小使の樣だが、心持から云ふと、小使を拜命した時よりも遙に不景氣であつた。是で支度は出來たものと思込んで土間へ下ると、

「おつと待つた」

と、初さんが又勇み肌の聲を掛た。

「是を尻の所へ當てるんだ」

初さんが出して呉れたものを見ると、三斗俵坊つちの樣な藁布團に紐を附けた變挺なものだ。自分は初さんの云ふ通り、是を臀部へ縛り附けた。

「それが、アテシコだ。好しか。夫から鑿だ。こいつを腰ん所へ差してと……」

初さんの出した鑿を受け取つて見ると、長さ一尺四五寸もあらうと云ふ鐵の棒で、先が少し尖つてゐる。

是を腰へ差す。

「序に是も差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。確り受け取らねえと怪我をする」

成程重い。こんな槌を差して能く坑の中が歩けるもんだと思ふ。

「どうだ重いか」

「えゝ」

「それでも輕いうちだ。重いのになると五斤ある。——いゝか、差せたか、そこで一寸腰を振つて見な。大丈夫か。大丈夫なら是を提げるんだ」

とカンテラを出しかけたが、

「待つたり。カンテラの前に一つ草鞋を穿いちまいねえ」

草鞋の新しいのが、上り口にある。さつき婆さんが振ら下げてたのは、大方是れだらう。自分は素足の上へ草鞋を穿いた。緒を踵へ通してぐつと引くと、

「駑癡だなあ。そんなに締める奴があるかい。もつと指の股を寛めろい」

と叱られた。叱られながら、どうにか、かうにか穿いて仕舞ふ。

「さあ、是れで愈御仕舞だ」

と初さんは饅頭笠とカンテラを渡した。饅頭笠と云ふのか筍笠といふのか知らないが、何でも懲役人の被る樣な笠であつた。其の笠を神妙に被る。それからカンテラを提げた。此のカンテラは提げる樣に出來てゐる。恰好は二合入りの石油鑵とも云ふべきもので、そこへ油を注す口と、心を出す孔が開いてる上に、

細長い管が食つ附いて、其の管の先が一寸横へ曲がると、すぐ膨らんだカップになる。此のカップへ親指を突つ込で、其の親指の力で提げるんだから、指五本の代りに一本で事を濟ます甚だ實用的のものである。

「かう、穿めるんだ」

と初さんが、勝栗の樣な親指を、カンテラの孔の中へ突込んだ。旨い具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、カンテラを柱時計の振子の樣に、一三度振つて見せた。中々落ちない。そこで自分も、同じ樣に、調子をとつて搖して見たが矢つ張り落ちなかつた。

「左樣だ。中々器用だ。ぢや行くぜ、いゝか」

「えゝ、好ござんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。雨が降つてゐる。一番先へ笠へあたつた。仰向いて、空模樣を見やうとしたら、顎と、口と、鼻へぽつ〳〵とあたつた。それからあとは、肩へもあたる。足へもあたる。少し歩くうちには、身體中じめ〳〵して、肌へ拔けた濕氣が、皮膚の活氣で蒸し返される。然し雨の方が寒いんで、身體のほとぼりが段々冷めて行く樣な心持であつたが、坂へかゝると初さんが無暗に急ぎ出したんで、濡れながらも、毛穴から、雨を彈き出す勢ひで、とう〳〵シキの入口迄來た。

入口はまづ汽車の隧道の大きいものと云つて宜しい。蒲鉾形の天邊は二間位の高さはあるだらう。中から軌道が出て來る所も汽車の隧道に似てゐる。是れは電車が通ふ路なんださうだ。自分は入口の前に立つて、奥の方を透かして見た。奥は暗かつた。

「どうだ此處が地獄の入口だ。這入るか」
と初さんが聞いた。何だか嘲弄の語氣を帶びてゐる。さつき飯場を出て、此處まで來る途中でも、方々の長屋の窓から首を出して、
「昨日のだ」
「新來だ」
と口々に罵つてゐたが、其の樣子を見ると單に山の中に閉ぢ込められて物珍らしさの好奇心とは思へなかつた。其の言葉の奥底には屹度愚弄の意味がある。之を布衍して云ふと、一つには貴樣もとう〳〵斯んな所へ轉げ込んで來た、いゝ氣味だ、樣あ見ろと云ふ事になる。もう一つは、御氣の毒だが來たつて駄目だよ。そんな脂つこい身體で何が勤まるものかと云ふ事にもなる。だから「昨日のだ」「新來だ」と騷ぐうちには、自分が彼等と同樣の苦痛を嘗めなければならない程墮落したのを快く感ずると共に、到底此の苦痛には堪へがたい奴だとの輕蔑さへ加はつてゐる。彼等は他人を彼等と同程度に引き摺り落して喝采するのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返足の下迄蹴落して、墮落は同程度だが、墮落に堪へる力は彼等の方が却て上だとの自信をほのめかして滿足するらしい。自分は途上「昨日のだ」と聞くたんびに、懲役笠で顏を半分隱しながら通り拔けて、シキの入口迄來た。そこで初さんが又愚弄したんだから、自分は少しむつとして、
「這入れますとも。電車さへ通つてるぢやありませんか」
と答へた。すると初さんが、

「なに這入れる？豪義な事を云ふない」
と云つた。こゝで「這入れません」と恐れ入つたら、「それ見ろ」と直こなされるに極つてる。どつちへ轉んでも駄目なんだから別に後悔もしなかつた。初さんは、いきなり、シキの中へ飛び込んだ。自分も續いて這入つた。這入つて見ると、思つたよりも急に暗くなる。何だか足元がおつかなくなり出したには降參した。雨が降つてゐても外は明かるいものだ。其の上軌道の上はとにかく、兩側は頗る泥つてゐる。それだのに初さんは中つ腹でずん〳〵行く。自分も負けない氣でずん〳〵行く。
「シキの中で大人しくしねえと、すのこの中へ抛り込まれるから、用心しなくつちあ不可ねえ」
と云ひながら初さんは突然暗い中で立ち留つた。初さんの腰には鑿がある。五斤の槌がある。自分は暗い中で小さくなつて、
「はい」
と返事をした。
「よしか、分つたか。生きて出る料簡なら生意氣にシキなんかへ這入らねえ方が增しだ」
是れは向ふむきになつて、初さんが歩き出した時に、半分は獨り言の樣に話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑の中は反響が強いので、初さんの言葉がわん〳〵〳〵と自分の耳へ跳ねつ返つて來る。果して初さんの言ふ通りなら、飛んだ所へ這入つたもんだ。實は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫にならうと云ふ氣も起して見たんだが、本當に死ぬなら――こんな怖い商賣なら――殺されるんなら――すのこの中へ抛げ込まれるなら――すのことは全體どんなもんだらうと思ひ出した。

「すのことは何んなもんですか」
「なに？」
と初さんが後を振り向いた。
「すのことは何んなもんですか」
「穴だ」
「え？」
「穴だよ。――鑛を抛り込んで、纏めて下へ降げる穴だ。鑛と一所に抛り込まれて見ねえ……」
で言葉を切つて又ずん〳〵行く。
自分は一寸立ち留つた。振り返ると、入口が小さい月の様に見える。這入るときは、是れがシキならと思つた。聞いた程でもないと思つた。所が初さんに威嚇かされてから、如何な平凡な隧道も、大いに容子が變つて來た。懲役笠をたゝく冷たい雨が戀しくなつた。そこで振り返ると、入口が小さい月の様に見える。小さい月の様に見える程奥へ這入つたなと、振り返つて始めて氣が附いた。いくら曇つてゐても矢つ張り外が懐かしい。眞黑な天井が上から抑へ附けてるのは心持のわるいものだ。しかも此天井が段々低くなつて來る様に感ぜられる。と思ふと、軌道を横へ切れて、右へ曲つた。だら〳〵坂の下りになる。もう入口は見えない。振返つても眞暗だ。小さい月の様な浮世の窓は遠慮なくぴしやりと閉つて、初さんと自分は段々下の方へ降りて行く。降りながら手を延ばして壁へ觸つて見ると、雨が降つた様に濡れてゐる。
「どうだ、尾いて來るか」

と、初さんが聞いた。
「えゝ」
と大人なしく答へたら、
「もう少しで地獄の三丁目へ來る」
と云つたなり、又二人とも無言になつた。此の時行く手の方に一點の燈が見えた。暗闇の中の黑猫の片眼の様に光つてる。カンテラの灯なら散らつく筈だが、些とも動かない。距離もよく分らない。方角も眞直ぐやないが、兎に角見える。もし坑の中が一本道だとすれば、此の燈を目懸けて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分は何にも聞かなかつたが、大方是が地獄の三丁目なんだらうと思つて、這入つて行つた。すると、だら〳〵坂が漸く盡きた。路は平らに向ふへ廻り込む。其の突き當りに例の燈が點いてゐる。先つきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦々の所まで來た。距離も間近くなつた。
「愈三丁目へ着いた」
と、初さんが云ふ。着いて見ると、坑が四五疊程の大さに廣がつて、其處に交番位な小屋がある。さうして其の中に電氣燈が點いてゐる。洋服を着た役人が二人程、椅子の對ひ合せに洋卓を隔てゝ腰を掛けてゐた。表には第一見張所とあつた。是は坑夫の出入だの勞働の時間だのを檢査する所だと後から聞いて、始めて分つたんだが、其の當時には何の爲の設備だか知らなかつたもんだから、六七人の坑夫が、どす黑い顏を揃へて無言の儘、見張所の前に立つてゐたのを不審に思つた。是は時間を待ち合はして交替する爲である。自分は腰に鑿と槌を差してカンテラさへ提げては居るが、坑夫志願といふんで、シキの様子を見に

這入つた丈だから、まだ見習にさへ採用されてゐないと云ふ譯で、待ち合はす必要もないものと見えて、すぐ此溜を通り越した。其時初さんが見張所の硝子窓へ首を突つ込んで、一寸役人に斷つたが、役人は別に自分の方を見向もしなかつた。其代り立つてゐた坑夫はみんな見た。然し役人の前を憚つてだらう、全く一言も口を利いたものはなかつた。

溜を出るや否や坑の樣子が突然變つた。今迄は立つてあるいても、脊延びをしても屆きさうにもしなかつた天井が急に落ちて來て、眞直に歩くと時々頭へ觸る樣な氣持がする。是れがものゝ二寸も低からうものなら、岩へ打つかつて眉間から血が出るに違ない。と思ふと、松原をあるく樣に、有つ丈の脊で、野風雜にや遣つて行けない。おつかないから なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食つ附いて行つた。尤もカンテラは先き點けた。

すると三尺許り前にゐる初さんが急に四ん這ひになつた。おや、滑つて轉んだ。と思つて、後から突つ掛かりさうな所を、ぐつと足を踏ん張つた。この位にして喰ひ留めないと、坂だから、前へのめる恐がある。心持腰から上を反らす樣にして、初さんの起きるのを待ち合はしてゐると、初さんは中々起きない。矢つ張り這つてゐる。

「何うか、爲ましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。——はてな——怪我でもしやしないかしら——もう一遍聞いて見樣か——すると初さんはのこ〳〵歩き出した。

「何ともなかつたですか」

「這ふんだ」

「え？」

「這ふのだてえ事よ」

と初さんの聲は段々遠くなつて仕舞ふ。その聲で自分は不審を打つた。いくら向ふむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離から出るのに、急に潛つて仕舞ふ。聲が細いんぢやない。當り前の初さんの聲が袋のなかに閉ぢ込められた樣に曖昧になる。こりや只事ぢやないと氣が附いたから、透して見ると漸く分つた。今迄は尋常に歩けた坑が、こゝで忽ち狹くなつて、這はなくつちや拔られなくなつてゐる。其狹い入口から、初さんの足が二本出て居る。初さんは今胴を入れた許りである。やがて出てゐた足が一本這入つた。見てゐるうちに又一本這入つた。是で自分も四つん這ひにならなくつちや仕方がないと諦めを附けた。「這ふんだ」と初さんの敎へたのも決して無理ぢやないんだから、敎へられた通り這つた。所が右にはカンテラを提げてゐる。左の手の平丈を惜氣もなく氷の樣な泥だか岩だかへな土だか分らない上へぐしやりと突いた時は、寒さが二の腕を傳はつて肩口から心臟へ飛び込んだ樣な氣持がした。それでカンテラを下へ着けまいとすると、右の手が顏とすれ〳〵になつて、甚だ不便である。どうしたもんだらうと、此の姿勢の儘じつとしてゐた。さうして、右の手で宙に釣つてゐるカンテラを見た。所へぽたりと天井からしづくが垂れた。カンテラの灯がじいと鳴つた、油煙が顎から頰へかゝる。眼へも這入つた。それでも此の灯を見詰めてゐた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云ふ音がする。坑夫が作業をしてゐるに違ないが、どの位距離があるんだか、どの見當にあたるんだか、一向分らない。東西南北のある浮世の音ぢや

ない。自分は此の姿勢でともかくも二三歩歩き出した。不便は無論不便だが、歩けない事はない。只時々しづくが落ちてカンテラのじいと鳴るのが氣にかゝる。初さんは先へ行つて仕舞つた。頼はカンテラ一つである。其のカンテラがじいと鳴つて水の爲に消えさうになる。かと思ふと又明かるくなる。まあ宜かつたと安心する時分に、又ぽたりと落て來る。じいと鳴る。消えさうになる。非常に心細い。實は今迄も、しづくは始終垂れてゐたんだが、灯が腰から下にあるんで、一向氣がつかなかつたんだらう。灯が耳の近くへ來て、じいと云ふ音が聞える樣になつてから急に神經が起つて來た。だから這ふ方は猶遲くなる。しかもまだ三足しか歩いちやゐない。所へ突然初さんの聲がした。

「やい、好い加減に出て來ねえか。何を愚圖々々してゐるんだ。——早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんは慥に日が暮れちまうと云つた。

自分は這ひながら、咽喉佛の角を尖らす程に顎を突き出して、初さんの方を見た。すると一間許り向ふに熊の穴見た樣なものがあつて、其の穴から、初さんの顔が——顔らしいものが出てゐる。自分があまり手間取るんで、初さんが屈んで此方を覗き込んでる所であつた。此の一間をどうして拔け出したか、今ぢや善く覺えてゐない。何しろ出來る丈早く穴迄來て、首丈出すと、もう初さんは顔を引つ込まして穴の外に立つてゐる。其の足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉しやと狹い所を潛り拔けた。

「何をしてゐたんだ」

「あんまり狹いもんだから」

「狹いんで驚いちや、シキへは一足だつて踏ん込めつ子はねえ。陸の樣に地面はねえ所だ位は、どんな

頓珍漢だつて知つてる筈だ」

初さんは慥に坑の中は陸の樣に地面のない所だと云つた。此の人は時々思ひ掛けない事を云ふから、今度も慥にと但し書をつけて、其の確實な事を保證して置くんである。自分は何か云ひ譯をするたんびに、初さんから容赦なく遣つ附けられるんで、大抵は默つてゐたが、此の時はつい、

「でもカンテラが消えさうで、心配したもんですから」

と云つちまつた。すると初さんは、自分の鼻の先へカンテラを差し附けて、徐に自分の顔を檢査し始めた。さうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてゞすか」

「何うしてでも好いから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんは此時大きな聲を出して笑つた。

自分は喫驚して稀有な顔をしてゐた。

「冗談ぢやねえ。何が這入てると思ふ。種油だよ、しづく位で消てたまるもんか」

自分は是でやつと安心した。

「安心したか。ハ、、、」

と初さんが又笑つた。初さんが笑ふたんびに、坑の中がみんな響き出す。其の響が收まると前よりも倍靜

かになる。所へかあん、かあんと何處かで鑿と槌を使つてる音が傳はつて來る。

「聞えるか」

と、初さんが顯で相圖をした。

「聞えます」

と耳を峙てゝゐると、忽ち催促を受けた。

「さあ行かう。今度あ後れない樣に跟いて來な」

初さんは中々機嫌がいゝ。是れは自分が一も二もなく初さんに遣られてゐる所爲だらうと思つた。いくら手苛く極めつけられても、初さんの機嫌がいゝうちは結構であつた。かうなると得になる事が卽ち結構といふ意味になる。自分は是れ程墮落して、おめ〳〵初さんの尻を嗅で行つたら、路が左の方に曲り込んで又峻しい坂になつた。

「おい下りるよ」

と初さんが、後も向かず聲を掛けた。其の時自分は何となく東京の車夫を思ひ出して苦しいうちにも可笑しかつた。が初さんはそれとも氣が附かず下り出した。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になつてゐる。四五間づゝに折れてはゐるが、勘定したら愛宕樣の高さ位はあるだらう。是は一生懸命になつて、一所に降りた。降りた時にほつと息を吐くと、其息が何となく苦かつた。然し是は深い坑のなかで、空氣の流通が惡いからと許り考へた。實は此時既に身體も冒されてゐたんである。此苦い息で二三十間來ると又模樣が變つた。

今度は初さんが仰向けに手を突いて、腰から先を入れる。腰から入れる樣な藝をしなければ通れない程、坑の幅も高さも逼つて來たのである。

「斯うして拔けるんだ。好く見て置きねえ」

と初さんが云つたと思つたら、胴も頭もずる、ずると拔けて見えなくなつた。流石熟練の功はえらいもんだと思ひながら、自分も先づ足丈前へ出して、草鞋で探を入れた。所が全く宙に浮いてる樣で足掛りが些ともない。何でも穴の向ふは、がつくり落か、それでなくても、餘程勾配の急な坂に違ないと見當を附けた。だから頭から先へ突つ込めばのめつて怪我をする許り、又足を無暗に出せば引つ繰り返る丈と覺つたから、足を棒の樣に前へ寐かして、さうして後へ手を突いた。所が此所作が甚だ不味かつたので、手を突くと同時に、尻もべつたり突いて仕舞つた。ぴちやりと云つた。アテシコを傳はつて臀部へ少々感じがあつた。夫ほど強く尻餅を搗いたと見える。自分はしまつたと思ひながらも直兩足を前の方へ出した。ずるりと一尺ばかり振ら下げたが、まだ何處へも屆かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運ばせて、腰を押し出す樣に足を伸ばした。すると腿の所迄摺り落ちて、草鞋の裏が漸く堅いものに乘つた。自分は念の爲此の堅いものをぴちやく足の裏で敲いて見た。大丈夫なら手を離して此の堅いものゝ上へ立たうと云ふ料簡であつた。

「何で足ばかり、ばたくやつてるんだ。大丈夫だから、うんと踏ん張つて立ちねえな。意久地のねえ」

と、下から初さんの聲がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を拔けて眞直に立つた。

「丸で傘の化物の樣だよ」

と初さんが、自分の顏を見て云つた。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかつたから、別に笑ふ氣にもならなかつた。たゞ

「左樣ですか」

と眞面目に答へた。妙な事に此の返事が面白かつたと見えて、初さんは、又大きな聲を出して笑つた。さうして、此の時から態度が變つて、前よりは幾分か親切になつた。偶然の事がどんな拍子で他の氣に入らないとも限らない。却て、氣に入つてやらうと思つて仕出かす藝術は大抵駄目な樣だ。天巧を奪ふ樣な御世辭使は未だ曾て見た事がない。自分も我が身が可愛さに、其の後色々人の御機嫌を取つて見たが、どうも旨い結果が出て來ない。相手がいくら馬鹿でも、いつか露見するから怖いもんだ。用意をして置いた挨拶で、此の傘の化物に對する返事位に成功した場合は殆どない。骨を折つて失敗するのは愚だと悟つたから、近頃では宿命論者の立脚地から人と交際をしてゐる。たゞ困るのは演說と文章である。あいつは骨を折つて準備をしないと失敗する。其の代りいくら骨を折つても矢張り失敗する。つまりは同じ事なんだが、骨を折つた失敗は、人の氣に入らないでも、自分の弱點が出ないから、まあ準備をしてからやる事にしてゐる。いつかは初さんの氣に入つた樣な演說をしたり、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされさうで不可ないから、未だに遣らずにゐる。——それは此處には餘計な事だから、此の位で已めて又初さんの話を續けて行く。

其の時初さんは、笑ひながら、下から、自分に向つて、

「おい、さう眞面目くさらねえで、早く下りて來ねえな。日は短えやな」

と云つた。坑の中でカンテラを點けた、初さんは慥に日は短えやなと云つた。

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてる所迄行くと、初さんは、右へ曲つた。また段々が四五間續いてゐる。それを降り切ると、今度は初さんが左へ折れる。さうして又段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稻妻の樣に歩いて、段々を——さあ何町降りたか分らない。始めての道ではあるし、ことに暗い坑の中の事であるから自分には非常に長く思はれた。漸く段々を降り切つて、大分浮世とは緣が遠くなつたと思つたら急に五六疊の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り廣げたもので、上と下がすぼまつて、腹の所が膨らんでゐるから、丸で酒甕の中へでも落込んだ有樣である。あとから分つた話だが、是れは作事場と云ふんで、技師の鑑定で、此處には鑛脈があるとなると、そこを掘り擴げて作事場にするんである。だから通り路よりは自然廣い譯で、此の作事場を坑夫が三人一組で、請負仕事に引受ける。二週間と見積つたのが、四日で濟む事もあり、高が五日位と踏んだ作事に半月以上食ひ込む事もある。かう云ふ譯で、シキのなかに路が出來て、路のはたに銅脈さへ見附かれば、御構なくそこ丈を掘り拔いて行くんだから、電車の通るシキの入口こそ、平らでもあり、又一條でもあるが、下へ折れて第一見張所のあたりからは、右へも左へも條路が出來て、方々に作事場が建つ。その作事を仕舞ふと、又銅脈を見附けては掘り拔いて行くんだから、シキの中は細い路だらけで、又暗い坑だらけである。丁度蟻が地面を縱橫に拔いて歩く樣なものだらう。又は書蠹が本を食ふと見立てゝも差し支ない。つまり人間が土の中で、銅を食つて、食ひ盡すと、又銅を探し出して食ひにゆくんで無暗に路が澤山出來て仕舞つたんである。だから、いくらシキの中を通つても、たゞ通る丈で作事場へ出なければ坑夫には逢はない。かあん〳〵といふ音はするが、

音丈では極めて淋しいものである。自分は初さんに連れられて、シキへ這入つたが、たゞシキの様子を見るのが第一の目的であつた爲か、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をしてゐる所は、此の段々の下へ來て、初めて見た。——稻妻形に段々を下りるときは、無暗に下りる許りで、いくら下りても盡きないのみか、人つ子一人に逢はないものだから、甚だ心細かつたが、はじめて作事場へ出て、人間に逢つたら、大いに嬉しかつた。

見ると丸太の上に腰をかけてゐる。數は三人だつた。丸太は四つや丸太で、軌道の枕木位なものだから隨分の重さである。どうして、此處迄運んで來たか到底想像がつかない。是は天井の陷落を防ぐ爲、少し廣い所になると突つかい棒に張る爲に、シヽチウが必要な作事場へ置いて行くんださうだ。其の上に二人腰を掛けて、殘る一人が屈んで丸太へ向いてゐる。さうして三人の間には小さな木の壺がある。伏せてある。一人が此の壺を上から抑へてゐる。三人が妙な叫び聲を出した。抑へた壺を忽ち擧げた。下から賽が出た。

——所へ自分と初さんが這入つた。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カンテラが土の壁に突き刺してある。暗い灯が、ぎろりと光る三人の眼球を照らした。光つたものは實際眼球丈である。坑は固より暗い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黑く燃えて煙を吹いて居る所は、濁つた液體が動いてゐ樣に見えた。濁つた先が黑くなつて、煙と變化するや否や、此の煙が暗いものゝ中に吸ひ込まれて仕舞ふ。だから坑の中がほうとしてゐる。さうして動いてゐる。

カンテラは三人の頭の上に刺さつてゐた。だから三人のうちで比較的判然見えたのは、頭丈である。所

が三人共頭が黑いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つとも集つてゐたから、猶更變であつたが、自分が這入るや否や、三つの頭は忽ち離れた。其の間から、壺が見えたんである。壺の下から賽が見えたんである。壺と、賽と、三人の異な叫び聲を聞いた自分は、次に三人の顏を見たんである。能くはわからない顏であつた。一人の男は頰骨の一點と、小鼻の片傍丈が、灯に映つた。次の男は額と眉の半分に光が落ちた。殘る一人は總體にぼんやりしてゐる。只自分の持つてゐた、カンテラを四五尺手前から眞向に浴びた丈である。——三人は此の姿勢で、ぎろりと眼を据ゑた。自分の方に。

漸く人間に逢つて、やれ嬉しやと思つた自分は、此の三對の眼球を見るや否や、思はずぴたりと立ち留つた。

「手前は……」

と云ひ掛けて、一人が言葉を切つた。殘る二人はまだ口を開かない。自分も立ち留まつたなり、答へなかつた。——答へられなかつた。すると

「新めえだ」

と、初さんが、威勢のいゝ返事をしてくれた。本當の所を白狀すると、三人の眼球が光つて、「手前は……」と聞かれた時は、初さんの傍にゐる事も忘れて、唯おやつと思つた。立すくむと云ふのはこれだらう。立ちすくんで、硬くこわ張り掛けた所へ「新めえだ」と云ふ聲がした。此の聲が自分の左の耳の、つい後から出て、向ふへ通り拔けた時、成程初さんが附いてたなと思ひ出した。それが爲、こわ張りかけた手足も、中途で故へ引き返した。自分は一歩傍へ退いた。初さんに前へ出てもらふ積であつた。初さんは注文通り

出た。

「相變らず遣つてるな」

とカンテラを提げた儘、上から三人の眞中に轉がつてる、壺と賽を眺めた。

「どうだ仲間入は」

「まあよさう。今日は案内だから」

と初さんは取り合はなかつた。やがて、四つや丸太の上へうんとこしよと腰を卸して、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむ迄恐ろしかつた、自分は急に嬉しくなつて元氣が出て來た。初さんの側へ腰を卸ろす。アテシコの利目は、こゝで始めて分つた。旨い具合に尻が乘つて、柔らかに扁部へ應へる。且冷えないで、結構だ。實はさつきから、眼が少し眩らんで——眩らんだか、眩らまないんだか、坑の中ではよく分らないが、何しろ好い氣持ではなかつたが、かう尻を掛けて落ちつくと、大きに樂になる。四人が色々な話をしてゐる。

「廣本へは新らしい玉が來たが知つてるか」

「うん、知つてる」

「まだ買はねえか」

「買はねえ、お前は」

「おれか。おれは——ハ、、、」

と笑つた。是れは這入つて來た時、顔中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。其の證據には、笑つても笑はなくつても、顔の輪廓が殆ど同じである。

「隨分手廻しがいゝな」

と初さんも聊か笑つてゐる。

「シキへ這入ると、何時死ぬか分らねえからな。だれだつて、さうだらう」

と云ふ答があつた。此の時、

「御互に死なねえうちの事だなあ」

と一人が云つた。其の語調には妙に咏歎の意が寓してあつた。自分はあまり突然の樣に感じた。

さうしてゐるうちに、一間置いて隣りの男が突然自分に話しかけた。

「御前は何處から來た」

「東京です」

「此處へ來て儲やうたつて駄目だぜ」

と他のが、すぐ教へてくれた。自分は長藏さんに逢ふや否や儲かる〳〵を何遍となく聞かせられて驚いたが、飯場へ着くが早いか、今度は反對に、儲からない〳〵で立てつゞけに責められるんで、大いに辟易した。然し地の底ではよもやそんな話も出まいと思つて此處迄降りて來たが、人に逢へば又儲からないを繰り返された。あんまり馬鹿々々しいんで何とか答辯を仕樣かとも考へたが、滅多な事を云へば擲り附けられる丈だから、まあやめにして置いた。去ればと云つて返事をしなければ又遣り附けられる。そこで、か

う云つた。

「何故儲からないんです」

「此の銅山には神樣がゐる。いくら金を蓄めて出樣としたつて駄目だ。金は必ず戻つてくる」

「何の神樣ですか」

と聞いて見たら、

「達磨だ」

と云つて、四人ながら面白さうに笑つた。自分は默つてゐた。すると四人は自分を措いて頻に達磨の話を始めた。約十分餘りも續いたらう。其の間自分は外の事を考へてゐた。色々考へたうちに一番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服を着て、眞暗な坑のなかに屈んでゐる所を、艶子さんと澄江さんに見せたらばと云ふ問題であつた。氣の毒がるだらうか、泣くだらうか、それとも淺間しいと云つて愛想を盡かすだらうかと疑つて見たが、是は難なく氣の毒がつて、泣くに違ないと結論して仕舞つた。それで一目位は此の姿を二人に見せたい樣な氣がした。それから昨夜圍爐裏の傍で散々馬鹿にされた事を思ひ出して、あの有樣を二人に見せたらばと考へた。所が今度は正反對で、二人共傍にゐてくれないで仕合せだと思つた。もし見られたらと想像して眼前に、意氣地のない、大いに苛められてゐる自分の風體と、ハイカラの女を二人描き出したら、甚だ氣恥づかしくなつて腋の下から汗が出さうになつた。是で見ると、坑夫に墮落すると云ふ事實其の物は左程苦にならぬのみか、少しは得意の氣味で、たゞ坑夫になりたての幅の利かない所丈を、女に見せたくなかつた譯になる。自分の器量を下げる所は、誰にも隱したいが、ことに女には隱した

い。女は自分を賴る程の弱いものだから、賴られる丈に、自分は器量のある男だと云ふ證據を何處迄も見せたいものと思はれる。結婚前の男はことに此の感じが深い樣だ。人間はいくら窮した場合でも、時々は芝居氣を出す。自分がアテシコを臀に敷いて、深い坑のなかで、カンテラを提げた儘、休んだ時の考へは、全く芝居じみてゐた。ある意味から云ふと、是が苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云ふべき芝居は全く此處から發達したものと思ふ。自分は發達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落膽しながら得意がつて居た。

所へ突然肺臟を打ち拔かれたと思ふ位の大きな音がした。其の音は自分の足の下で起つたのか、頭の上で起つたのか、尻を懸けた丸太も、黑い天井も一度に躍り上つたから、分からない。自分の頸と手と足が一度に動いた。緣側に脛をぶらさげて、膝頭を丁と叩くと、膝から下がぴくんと跳ねる事がある。此の時自分の身體の動き方は全く是れに似てゐる。然し是れよりも倍以上劇烈に來た樣な氣がした。身體ばかりぢやない、精神が其通りである。一人芝居の眞最中でとんぼ返りを打つて、忽ち我れに歸つた。音はまだつゞいてゐる。落雷を土中に埋めて、自由の響きを束縛した樣に、澁つて、焦つて、陰に籠つて、抑へられて、岩に中つて、包まれて、激して、跳ね返されて、出端を失つて、ごうと吼えてゐる。

「驚いちや不可ねえ」

と初さんが云つた。さうして立ち上がつた。自分も立ち上がつた。三人の坑夫も立ち上がつた。

「もう少しだ。遣つちまうかな」

と、鑿を取り上げた。初さんと自分は作事場を來る。所へ煙が出た。煙硝の臭が、眼へも鼻へも口へも這

入つた。噎せつぽくつて苦しいから、後を向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始めだした。

「なんですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。實は先の音が耳に應へた時、こりや坑内で大破裂が起つたに違ないから、逃げないと生命が危ないと迄思ひ詰めた位だのに、初さんは益深く這入る氣色だから、氣味が悪いとは思つたが、何しろ自由行動のとれる身體ではなし、精神は無論獨立の氣象を具へてゐないんだから、いかに先輩だつて逃げていゝ時分には、逃げてくれるだらうと安心して、後を附けて出ると、むつとする程の煙が向ふから吹いて來たんで、こりや迂濶深入は出來ないわと云ふ腹もあつて、かた〳〵後を向く途端に、さつきの連中がもう、煙の中でかあん、かあん、鑛を叩いてゐるのが聞えたんで、それぢや矢つ張安心なのかと、不審のあまり此の質問を起して見たんである。すると初さんは、煙の中で、咳を二つ三つしながら、

「驚かなくつてもいゝ、ダイナマイトだ」

と教へてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえか、知れねえが、シキへ這入つた以上、仕方がねえ。ダイナマイトが恐ろしくつちや一日だつて、シキへは這入れねえんだから」

自分は默つてゐた。初さんは煙の中を押し分ける樣にずん〳〵潛つて行く。滿更苦しくない事もないんだらうが、一つは新參の自分に對して、景氣を見せる爲ぢやないかと思つた。それとも煙は坑から坑へ抜け切つて、陸の上なら、大抵晴れ渡つた時分なのに、路が暗いんで何時迄も煙が這つてゐる樣に感じたり噎ぽく思つたのかも知れない。さうすると自分の方が惡くなる。

いづれにしても苦い所を我慢して尾いて行つた。又胎内潛りの樣な穴を抜けて、三四間宛の段々を、右へ左へ折れ盡すと、路が二股になつてゐる。その條路の突き當りで、カラカララン と云ふ音がした。深い井戸へ石片を抛げ込んだ時と調子は似てゐるが、普通の井戸よりも、遙に深い樣に思はれた。と云ふものは、落ちて行く間に、側へ當つて鳴る音が、冴えてゐる。許りか、餘程長くつゞく。最後のカララン は底の底から出て、出るには餘程手間がかゝる。けれども一本道を、眞直に上へ抜ける丈で、外に逃道がないから、どんなに暇取ても、屹度出てくる。途中で消えさうになると、壁の反響が手傳つて、底で出た丈の響は、いかに微な遠くであつても、洩らす所なく上迄送り出す。——ざつと斯んな音である。カララン。カカラアン。……

初さんが留つた。

「聞えるか」

「聞えます」

「スハコへ鑛を落してる」

「はああ……」

「序だからスハコを見せて遣らう」

と、急に思ひ附いた樣な調子で、勢ひよく初さんが、一足後へ引いて草鞋の踵を向け直した。自分が耳の

方へ氣を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も續いて暗いなかへ這入る。
折れた路は僅か四尺程で行き當る。所を又右へ廻り込むと、一間許り先が急に薄明るく、縱にも横にも廣がつてゐる。其の中に黑い影が二つあつた。自分達が其の傍迄近附た時、黑い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力を後へ拔く拍子に、大きな箕を、斜に拋げ返した。箕は足掛りの板の上に落ちた。カカン、カラカランと云ふ音が遠くへ落ちて行く。一尺前は大きな穴である。廣さは疊二疊敷位はあるだらう。箕に入れたばらの鑛を、掘子が拋げ込んだ許りである。突き當りの壁は突立つてゐる。微なカンテラに照らされて、色さへしつかり分らない上が、一面に濡れて、濡れた所丈がきら〳〵光つてゐる。
「覗いて見ろ」
初さんが云つた。穴の手前が三尺許り板で張り詰めてある。自分は板の三分の一程迄踏み出した。
「もつと、出ろ」
と初さんが後から催促する。自分は躊躇した。是れでさへ踏板が外れゝば、何處迄落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云ふ時、土の上へ飛び退く手間が一尺丈遲くなる。一尺は何でもない樣だが、此處では平地の十間にも當る。自分は何分にも躊躇した。
「出ろやい。吝な野郎だな。そんな事で掘子が勤まるかい」
と云はれた。是れは初さんの聲ではなかつた。黑い影の一人が云つたんだらう。自分は振り返つて見なかつた。然し依然として足は前へ出なかつた。只眼丈が、露で光つた薄暗い向ふの壁を傳はつて、下の方へ、次第に落ちて行くと、約一間ばかりは、どうにか見えるが、それから先は眞暗だ。眞暗だから何處迄視線

に這入るんだか分らない。たゞ深いと思へば際限もなく深い。落ちや大變だと神經を起すと、後から脊中を突かれる樣な氣がする。足は依然として故の位地を持ち應へてゐた。すると、
「おい邪魔だ。一寸退きな」
と聲を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重さうに俵を抱へて立つてゐる。俵の大きさは米俵の半分位しかない。然し兩手で底を受けて、幾分か腰で支へながら、うんと氣合を入れてゐる所は、全く重さうだ。自分は此の體を見て、すぐ傍へ避けた。ざうして比較的安全な、板が折れても差支なく地面へ飛び退ける程の距離迄退いた。掘子は、俵で眼先がつかへてゐるから定めし劍呑がゐるだらうと思ひの外、容赦なく重い足を運ばして前へ出る。緣から二尺許り手前迄出て、足を揃へたから、もう留まるだらうと見てゐると、又出した。餘る所は一尺しきあない。其の一尺へ又五寸程切り込んだ。さうして行儀よく右左を揃へた。さうして、うんと云つた。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめつたと思ふ途端に、重い俵は、とんぼ返りを打つて、掘子の手を離れた。掘子はもとの所へ突つ立つてゐる。落た俵はしばらく音沙汰もない。と思ふと遠くでどさつと云つた。俵は底迄落切つたと見える。
「どうだ、あの藝が出來るか」
と初さんが聞いた。自分は、
「さうですねえ」
と首を曲げて、恐れ入つてた。すると初さんも掘子もみんな笑ひ出した。自分は笑はれても全く致し方がないと思つて、依然として恐れ入つてた。其の時初さんがこんな事を云つて聞かした。

「何になつても修業は要るもんだ。遣つて見ねえうちは、馬鹿にや出來ねえ。お前が掘子になるにしたつて、おつかながつて、手先許りで抛げ込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちゝまつて、肝心の穴へは這入りやしねえ。さうして、鑛の重みで引つ張り込まれるから、却つて劍呑だ。あゝ思ひ切つて胸から突き出してかゝらにや……」

と云ひ掛けると、外の男が、

「二三度スハコへ落ちて見なくつちや駄目だ。ハ、、、」

と笑つた。

後戻をして元の路へ出て、半町程行くと、掘子は右へ折れた。初さんと自分は眞直に坂を下りる。下り切ると、四五間平らな路を縫ふ樣に突き當つた所で、初さんが留まつた。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。實は餘程前から下りられない。然し中途で降參したら、落第するに極つてるから、我慢に我慢を重ねて、此處迄來た樣なものゝ、內心では其の內もうどん底へ行き着くだらう位の目算はあつた。そこへ持つて來て、相手がぴたりと留まつて、一段落附けた上、偖改めて、まだ下りる氣かと正式に尋ねられると、まだ下りるべき道程は決して一丁や二丁でないと云ふ意味になる。——自分は暗い乍ら初さんの顏を見て考へた。御免蒙らうかしらと考へた。かう云ふ時の出處進退は、全く相手の思はく一つで極る。如何な馬鹿でも、如何な利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよりも、初さんの顏色で判斷する方が早く片が附く。つまり自分の性格よりも周圍の事情が運命を決する場合である。性格が水準以下に下

落する場合である。平生築き上げたと自信してゐる性格が、滅茶苦茶に崩れる場合のうちで尤も顯著なる例である。——自分の無性格論は此處からも出てゐる。

前申す通り自分は初さんの顏を見た。すると、下り樣ぢやないかと云ふ親密な情合も見えない。下りなくつちや御前の爲にならないと云ふ忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云ふ威嚇もあらはれてゐない。下りたからうと焦らす氣色は無論ない。たゞ下りられまいと云ふ侮蔑の色で持ち切つてゐる。それは何ともなかつた。然し其の色の裏面には落第と云ふ切實な問題が潛んでゐる。此の場合に於ける落第は、名譽より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならない。

「下りませう」

と思ひ切つて、云つた。初さんは案に相違の樣子であつたが、

「ぢや、下り樣。其代り少し危ないよ」

と穩かに同意の意を表した。成程危ない筈だ。九十度の角度で切つ立つた、屏風の樣な穴を眞直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子が懸つてる。勾配も何にもない。此方の壁にぴつたり食つ附いて、棒を空にぶら下た樣に、覗くと端が見えかねる。どこ迄續いてゐるんだか、どこで縛りつけてあるんだか、丸で分らない。

「ぢや、己が先へ下るからね。氣を附けて來給へ」

と初さんが云つた。初さんが是れ程叮嚀な言葉を使はうとは思ひも寄らなかつた。大方神妙に下りませうと出たんで、幾分か憐愍の念を起したんだらう。やがて初さんは、ぐるりと引つ繰り返つて、正式に穴の

方へ尻を向けた。さうして屈んだ。と思ふと、足から段々這入つて行く。仕舞には顔丈が殘つた。やがて其の顔も消えた。顔が出てゐる間は、多少の安心もあつたが、黑い頭の先迄が、づぼりと穴へはまつた時は、流石に心配なのと心細いのとで、凝としてゐられなくつて、足をつま立てる樣にして、上から見下した。初さんは下りて行く。黑い頭とカンテラの灯丈が見える。其の時自分は氣味の惡いうちにも、かう考へた。初さんの姿が見えるうちに下りて仕舞はないと、下り損なふかも知れない。面目ない事が出來する。早くするに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向になつて初さんの樣に、膝を地に附けて、手で摺り下りながら、草鞋の底で段々を探つた。

兩手で第一段目を握つて、足を好加減な所へ掛けると、脊中が海老の樣に曲つた。それから、徐々足を伸ばし出した。眞直に立つと、カンテラの灯が胸の所へ來る。じつとしてゐると燻されて仕舞ふ、仕方がないから、片足下げる。手も之に應じて握り更へなくつちやならない。卸さうとすると、指で提げてるカンテラが、飛んだ所で、始末の惡い樣に動く。滅多に振ると、着物が燒けさうになる。大事を取ると壁へ打つかつて灯が揉み潰されさうになる。親指へカップを差し込んで、振子の樣に動かした時は、甚だ輕便な器械だと思つたが、かうなると非常に邪魔になる。其の上梯子の幅は狹い。段と段の間が頗る長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。そこへもつて來て恐怖が手傳ふ。さうして握り直すたんびに、段木がぬら〳〵する。鼻を押しつける樣にして、乏しい灯で透かして見ると、へな土が一面に粘いてゐる。上り下りの草鞋で踏付たものと思はれる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗いた。よせば善かつたが、つい覗いた。すると急にぐら〳〵と頭が廻つて、かたく握つた手がゆるんで來た。是は死ぬかも

知れない。死んぢや大變だと、嚙りついたなり、いきなり眼を閉つた。石鹼球の大きなのが、ぐる〳〵散らついてゐるうちに、初さんが降りて行く。本當を云ふと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶつた眼の前に湧いて出る石鹼球の中に、初さんが居る譯がない。然し現にゐる。さうして降りて行く。如何にも不思議であつた。今考へると、目舞のする前に、ちらりと初さんを見たに違ないんだが、ぐら〳〵と咄癡て、死ぬ方が怖くなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に嚙りついて眼を閉るや否や生き返つたんだらう。但しさう云ふ事が學理上あり得るものか、どうか知らない。其の當時は夢中である。坑は暗い、命は惜しい、頭は亂れてゐる。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行くんだか、足の下で降りて行くんだか滅茶苦茶であつた。が不思議な事に、眼を開けるや否や又下を見た。すると矢張り初さんが降りてゐる。しかも切つ立つた壁の向ふ側を降りてゐる樣だ。今度は二度目の所爲か、落ちる程眩暈もしなかつたんで、よくよく眸を据ゑて見ると、正に向ふ側を降りて行く。はてなと思つた。所へカンテラが又じいと鳴つた。保證つきの燈火だが、かうなると又心細い。初さんはずん〳〵行く樣だ。自分も此に至れば、全速力で降りるのが得策だと考へ付いた。そこでぬる〳〵する段木を握り更へ、握り更へて漸く三間ばかり下がると、足が土の上へ落ちた。踏んで見たが矢ッ張り土だ。念の爲、手を離さずに足元の樣子を見ると、梯子は全く盡きてゐる。踏んで居る土も幅一尺で切れてゐる。あとは筒抜の穴だ。其代り今度は向側に別の梯子が附いてゐる。手を延ばすと屆く樣に懸けてある。仕方がないから、自分は又此の梯子へ移つた。さうして出來る丈早く降りた。長さは前のと同樣である。すると又逆の方向に、依然として梯子が懸けてある。ど

うも是非に及ばない。又移つた。漸との思ひで是れも片付けると、新しい梯子は故の如く向側に懸つてゐる。殆ど際限がない。自分が六つめの梯子迄來た時は、手が怠くなつて、足が悸へ出して、妙な息が出て來た。下を見ると初さんの姿はとくの昔に消えてゐる。見れば見る程眞闇だ。自分のカンテラへはじいじいと點滴が垂れる。草鞋の中へは清水がしみ込んで來る。

しばらく休んでゐたら、手が拔けさうになつた。下り出すと足を踏み外しかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめつて逆さに頭を割る許りだと思ふと、どうか、かうか、段々を下り切る力が、どつかから出て來る。あの力の出所は到底分らない。然し此の時は一度に出ないで、少し宛、腕と腹と足へ煮染み出す樣に來たから、自分でも、ちやんと自覺してゐた。丁度試驗の前の晩徹夜をして、疲勞の結果、うつとりして急に眼が覺めると、又五六頁は讀めると同じ具合だと思ふ。かう云ふ勉强に限つて、何を讀んだか分らない癖に、とにかく讀む事は讀み通すものだが、それと同じく自分も慥に降りたとは斷言しにくいが、何しろ降りた事は慥である。下讀をする書物の內容は忘れても、頁の數は覺えてゐる如く、梯子段の數丈は明かに記憶してゐた。丁度十五あつた。十五下り盡しても、まだ初さんが見えないには驚いた。然し幸ひ一本道だつたから、どぎまぎしながらも、細い穴を這ひ出すと、漸く初さんが居た。しかも、例の樣に無敵な文句は竝べずに、

「どうだ苦しかつたか」

と聞いて呉れた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答へた。次に初さんが、

「もう少しだ我慢しちや、どうだ」

と奬勵した。次に自分は、

「又梯子があるんですか」

と聞いた。すると初さんが、

「ハ、、、もう梯子はないよ。大丈夫だ」

と好意的の笑を洩らした。そこで自分も我慢の爲序だと觀念して、又初さんの尻に附いて行くと、又下りる。さうして下りるに從つて路へ水が溜つて來た。ぴちやくしてゐる。其泥水が又馬鹿に冷たい。指の股が切られる樣である。けれども一面の水だから、折角水を拔いた足を、又無慘にも水の中へ落さなくつちやならない。片足を揚げると、五位鷺の樣に其の儘で立つてゐたくなる。夫でも仕方なしに草鞋の裏を着けるとぴちやりと云ふが早いか、水際から、魚の鰭の樣な波が立つ。其の片側がカンテラの灯できらきらと光るかと思ふと、すぐ落ち附いて故に歸る。折角平になつた上を又ぴちやりと踏み荒らす。魚の鰭がまた光る。かう云ふ風にして、奥へ奥へと這入つて行くと、水は段々深くなる。此處を潛り拔けたら、乾いた所へ出られる事かと、受け合はれない行先を宛にして、ぐるりと廻ると、足の甲でとまつてた水が急に脛迄來た。此の次にはと、辛抱して、右に折れると、がつくり落ちがして膝迄漬かつちまふ。かうなると、動くたんびにざぶくと云ふ。膝で切る波が渦を捲いて流れる。其渦が段々股の方へ押し寄せてくる。全く

危險だと思つた。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑のなかが、一杯になりやしないかと思ふと急に腰から腹の中迄が冷たくなつて來た。然るに初さんは辟易した體もなく、さつさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後から聞いて見たが、初さんは別に返事もしずに、依然として、ざぶり〳〵と水を押し分けて行く。自分の考へる所によると、いくら銅山でも水に漬かつてるては、仕事が出來る筈がない。かうどぶ附く以上は、何か變事でもあるか、又は廢坑へでも連れ込まれたに違ひない。いづれにしても災難だと、不安の念に冒されながら　もう一遍初さんに聞かうかしらと思つてるうち、水はとう〳〵腰迄來て仕舞つた。

「まだ這入るんですか」

と、自分は堪らなくなつたから、後から初さんを呼び留めた。此の聲は普通の質問の聲ではない。吾身を思ふの餘り、命が口から飛び出した樣なものである。だから、いざと云ふ間際には單音の叫聲となつてあらはれる所を、まだ初さんの手前を憚る丈の餘裕があるから、しばらく恐怖の質問と姿を變じた迄である。此の聲を聞きつけた時は、流石の初さんも水の中で留まつたなり、振り返つた。カンテラを高く差し上げる。眸を据ゑると、初さんの眉の間に八の字が寄つて來た。しかも口元は笑つてゐる。

「どうした。降參したか」

「いえ、此の水が……」

と自分は、腰の邊を、物凄さうに眺めた。初さんは毫も感心しない。矢つ張りにこ〳〵してゐる。出水の往來を、通行人が尻をまくつて面白さうに渉る時の樣に見えた。自分も是で疑ひは晴れたが、根が臆病だから、念の爲、もう一度、

「大丈夫でせうか」

を繰返した。此時初さんは益愉快さうな顏附だつたが、やがて眞面目になつて、

「八番坑だ。是れがどん底だ。水位あるなあ當前だ。そんなに、おつかながるにや當らねえ。まあ好いから此方へ來ねえ」

と中々承知しないから、仕方なしに、股迄濡らして附いて行つた。たゞさへ暗い坑の中だから、思ひ切つた喩を云へば、頭から暗闇に濡れてると形容しても差支ない。其の上本當の水、しかも坑と同じ色の水に濡れるんだから、心持の惡い所が、倍惡くなる。其の上水は踝から段々競り上がつて來る。今では腰迄漬かつてゐる。しかも動くたんびに、波が立つから、實際の水際以上迄が濡れてくる。さうして、濡れた所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よりも高く上がるから、つまりは一寸二寸と身體が腹迄冷えてくる。坑で頭から冷えて、水で腹迄冷えて、二重に冷え切つて、不知案内の所を海鼠の樣に附いて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞の樣に深く開いてる中から、水が流れて來る。さうして其の中でかあん〳〵と云ふ音がする。作事場に違ひない。初さんは、穴の前に立つた儘、

「そうら。此んな底でも働いてるものがあるぜ。眞似が出來るか」

と聞いた。自分は、胸が水に浸る迄、屈んで洞の中を覗き込んだ。すると奥の方が一面に薄明るく――明るくと云ふが、締りのない、取り留めのつかない、微な灯を無理に廣い間へ使つて、引つ張り足りないか

ら、折角の光が暗闇に壓倒されて、茫然と濁つてゐる體であつた。其の中に一段と黑いものが、斜めに岩へ吸ひ附いてゐる邊から、かあん〳〵と云ふ音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳ね返つたものが、纏まつて穴の口から出て來る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這入つて見るか」

と云ふ、自分はぞつと寒氣がした。

「這入らないでも好いです」

と答へた。すると初さんが、

「ぢや止めにして置かう。然し止めるなあ今日丈だよ」

と但し書を附けて、一應自分の顏を篤と見た。自分は案の定釣り出された。

「明日つから、此處で働くんでせうか。働くとすれば、何時間水に漬かつてる——漬かつてれば義務が濟むんですか」

「さうさなあ」

と考へてゐた初さんは、

「一晝夜に三回の交替だからな」

と說明してくれた。一晝夜に三回の交替なら一句切八時間になる。自分は黑い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくつてもいゝ」

初さんは突然慰めて呉れた。氣の毒になつたんだらう。

「だつて八時間は働かなくつちやならないんでせう」

「そりや極まりの時間丈は働かせられるのは知れ切つてらあ。だが心配しなくつてもいゝ」

「何うしてですか」

「好いてえ事よ」

と初さんは歩き出した。自分も默つて歩き出した。二三歩水をざぶ〳〵云はせた時、初さんは急に振り返つた。

「新前は大抵二番坑か三番坑で働くんだ。餘つ程樣子が分らなくつちや、此處迄下りちや來られねえ」

と云ひながら、にや〳〵と笑つた。自分もにや〳〵と笑つた。

「安心したか」

と初さんが又聞いた。仕方がないから、

「えゝ」

と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶ〳〵動く水が、急に膝迄減つた。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝迄落ちた。それで平らに續いてゐる。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉しかつた。それから先は、とん〳〵拍子に嬉しくなつて、曲れば曲る程地面が乾いて來る。仕舞にはぴちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る氣があるかと尋ねたが、是れは諸方のスノコから落ちて來た鑛を聚めて、第一坑へ揚げて、それから電車でシキの外へ運び

出す仕掛を云ふんだと聞いて、頭から御免蒙つた。いくら面白く運轉する器械でも、明日の自分に用のない所は見る氣にならなかつた。器械を見ないとすると是れで、まあ坑内の模樣を一應見物した譯になる。そこで案内の初さんが歸るんだと云ふ通知を與へてくれた。腰きり水に漬かるのは、如何な初さんも一度で澤山だと見えて、歸りには比較的濡れないで濟む路を通つてくれた。それでも十間程は腫ら脛迄水が押し寄せた。此の十間を通るときに、樣子を知らない自分は又例の所へ來たなと感附て、往きに臍の近所が氷りつきさうであつた事を思ひ出しつゝ、今か今かと冷たい足を運んで行つたが、鴉の嘴と善い方へばかり、食ひ違つて　行けば行くほど、水が淺くなる。足が輕くなる。遂には又乾いた路へ出て仕舞つた。初さんに、

「もう濟んだでせうか」

と聞いて見ると、初さんは只笑つてゐた。其の時は自分も愉快だつたが、しばらくすると、例の梯子の下へ出た。水は胸迄位我慢するが此の梯子には、――せめて歸り路丈でも好いから、遁れたかつたが、矢つ張り丁度其の下へ出て來た。自分は蜀の棧道と云ふ事を人から聞いて覺えてゐた。此の梯子は、棧道を逆に釣るして、未練なく傾斜の角度を拔きにしたものである。自分は其處へ來ると急に足が出なくなつた。突然脚氣に罹つた樣な心持になると、思はず、腰を後へ引つ張られた。引つ張られたのは初さんに引つ張られたのかと思ふ讀者もあるかもしれないが、さうぢやない。さう云ふ氣分が起つたんで、强ひて形容すれば、疝氣に引つ張られたとでも敍したら善からう。何しろ腰が伸せない。尤も是れは逆棧道の祟りだと一概に斷言する氣でもない、さつきから案内の初さんの方で、大分御機嫌が好いので、相手の寛大な御情

に附け上つて、奮發の箍が次第々々に緩んだのも慥な事實である。何しろ、歩けなくなつた。此の腰附を見てゐた初さんは、

「どうだ歩けさうもねえな。丸で屁つぴり腰だ。ちつと休むが好い。おれは遊びに行つて來るから」

と云つたぎり、暗い所を潛つて、何處へか出て行つた。

あとは云ふ迄もなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地びたへ着けた。アテシコはかう云ふときに非常な便利になる。御蔭で、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚れたりする憂ひがない丈、慘憺なうちにも、まだ嬉しい所があつた。さうして、硬く曲つた脊中を壁へ倚たせた。是れより以上は横のものを竪にする氣もなかつた。たゞ其の儘の姿勢で向ふの壁を見詰めてゐた。身體が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身體が怠けるのか、とにかく、雙方相ひ合つて、生死の間に彷徨してゐたと見えて、しばらくは萬事が不明瞭であつた。始めは、どうか一尺立方でもいゝから、明かるい空氣が吸つて見たい樣な氣がしたが、段々心が昏くなる。と坑のなかの暗いのも忘れて仕舞ふ。どつちがどつちだか分らなくなつて朦朧のうちに合體調和して來た。然し決して寐たんぢやない。しんとして、意識が稀薄になつた迄である。然し其の稀薄な意識は、十倍の水に溶いた婆婆氣であるから、いくら不透明でも正氣は失はない。丁度差し向ひの代りに、電話で話しをする位の程度――もしくは是れよりも少しく不明瞭な程度である。斯樣に水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世の日が烈し過ぎて困る自分には――東京にも田舍にも居り終せない自分には――煩悶の解熱劑を頓服しなければならない自分には――神經纖維の端の端迄寄つて來た過度の刺激を散らさなければならない自分には――必要であり、願望であり、理想である。長藏さんに

引張られながら、道々空想に描いた坑夫生活よりも、慥に上等の天國である。もし驅落か自滅の第一着なら、此の境界は自滅の――第何着か知らないが、兎に角終局地を去る事遠からざる停車場である。自分は初さんに置いて行かれた少時の休憩時間内に、圖らずも此の自滅の手前迄、突然釣り込まれて、――まあ、どんな心持がしたと思ふ。正直に云へば嬉しかつた。然し嬉しいと云ふ自覺は十倍の水に溶き交ぜられた正氣の中に遊離してゐるんだから、外の娑婆氣と同じく、劇烈には來ない。矢つ張り稀薄である。けれど自覺は慥にあつた。正氣を失はないものが、嬉しいと云ふ自覺だけを取り落す譯がない。自分の精神狀態は活動の區域を狹められた片輪の心的現象とは違ふ。一般の活動を恣にする自由の天地は故の如くに存在して、活動其の物の强度が減却して來たのみだから、平常の我と此の時の我との差はたゞ濃淡の差である。其の最も淡い生涯の中に、淡い喜びがあつた。

もし此狀態が一時間續いたら、自分は一時間の間滿足してゐたらう。一日續いたら一日の間滿足したに違ない。もし百年續いたにしても、矢張嬉しかつたらう。所が――此處で又新しい心の活作用に現參した。

といふのは生憎、此の狀態が自分の希望通同じ所に留つてゐてくれなかつた。動いて來た。油の盡きかかつたランプの灯の樣に動いて來た。意識を數字であらはすと、平生十のものが、今は五になつて留まつてゐた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零にならなければならない。自分は此の經過に連れて淡くなりつゝ變化する嬉しさを自覺してゐた。此の經過に連れて淡く變化する自覺の度に於て自覺してゐた。嬉しさは何處迄行つても嬉しいに違ない。だから理窟から云ふと、意識がどこ迄降つて行かうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、滿足するより外に道はない筈である。所が段々と競り卸して來て、愈零に近くなつた時、突然として暗中から躍り出した。こいつは死ぬぞと云ふ考へが躍り出した。すぐに續いて、死んぢや大變だと云ふ考へが躍り出した。自分は同時に、豁と眼を開いた。足の先が切れさうである。膝から腰迄が血が通つて氷りついてゐる。腹は水でも詰めた樣である。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思ふと、「死ぬぞ、死んぢや大變だ」迄が順々につながつて來て、そこで、ぷつりと切れてゐる。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作になる。つまり「死ぬぞ」で命の方向轉換をやつて、やつてからの第一所作が眼を開いた譯になるから、二つのものは全く離れてゐる。それで全く續いてゐる。續いてゐる證據には、眼を開いて、身の周圍を見た時に、「死ぬぞ……」と云ふ聲が、まだ耳に殘つてゐた。慥かに殘つてゐた。自分は聲だの耳だのと云ふ字を使ふが、外には形容しやうがないからである。形容所ではない、實際に「死ぬぞ……」と注意して呉れた人間があつたとしきや受け取れなかつた。けれども、人間は無論ゐる筈はなし。と云つて、神――神は大嫌だ。矢つ張り自分が自分の心に、あわてゝ思ひ浮べた迄であらうが、夫程人間が死ぬのを苦に病んでゐやうとは夢にも思ひ浮べなかつた。これだから自殺抔は出來ない筈である。かう云ふ時は、魂の段取が平生と違ふから、自分で自分の本能に支配されながら、丸で自覺しないものだ。氣を附けべき事と思ふ。此の例なども、解釋のしやうでは、神が助けて呉れたともなる。自分の影身に附き添つてゐる――まあ戀人が多い樣だが――さう云ふ人々の魂が救つたんだともなる。年の若い割に、自分が此の聲を艶子さんとも澄江さんとも解釋しなかつたのは、己惚の强い割には感心である。自分は生れつき夫程詩的でなかつたんだらう。

そこへ初さんがひよつくり歸つて來た。初さんを見るが早いか、自分の意識は愈明瞭になつた。是れ

から例の逆棧道を登らなくつちやならない事も、明日から、鑿と槌でかあん〳〵遣らなくつちやならない事も、南京米も、南京蟲も、ジヤンボーも達磨も一時に殘らず分つて仕舞ひ、さうして最後に自分の墮落が尤も明かに分つた。

「些たあ氣分は好いか」

「えゝ少しは好い樣です」

「ぢや、そろ〳〵登つて遣らう」

と云ふから、禮を云つて立つてゐると、初さんは景氣よく段木を掴へて片足踏ん掛けながら、

「登りは少し骨が折れるよ。其の積で尾いて來ねえ」

と振り返つて、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になつて、下から見上ると、初さんは登つて行く。猿の樣に登つて行く。そろ〳〵登つて呉れる樣子も何もありやしない。早くしないと又置いてきぼりを食ふ恐れがある。自分も思ひ切つて登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちに成程と感心した。初さんの云ふ通り非常に骨が折れる。全く疲れてゐる許りぢやない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か脊の重みを梯子に託する事が出來る。然し上りになると、全く反對で、稍ともすると、身體が後へ反れる。反れた重みは、兩手で持ち應へなければならないから、二の腕から肩へかけて一段毎に餘分の稅がかゝる。のみならず、手の平と五本の指で、此の〴〵高を握らなければならない。それが前に云つた通りぬる〳〵する。梯子を一つ片附けるのは容易の事ではない。しかも夫が十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなつた。手を離しさへすれば眞暗闇に逆落しになる。離すまいとすれば肩が拔ける許りだ。自分は七番目の梯子の途中で火焰の樣な息を吹きながら、つく〴〵勞働の困難を感じた。さうして熱い涙で眼が一杯になつた。

二三度上瞼と下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覺はぼうつとしてゐる。五寸と離れない壁さへ慥には分らない。手の甲で擦らうと思ふが、生憎兩方とも塞がつてゐる。自分は口惜くなつた。何故こんな猿の眞似をする樣に零落たのかと思つた。倒れさうになる身體を、出來る丈前の方にのめらして、梯子に倚れる丈倚れて考へた。休んだと註釋する方が適當かも知れない。たゞ中途で留まつたと云ひ切つても宜しい。何しろ動かなくなつた。又動けなくなつた。凝として立つてゐた。カンテラのじいと鳴るのも、足の底へ清水が沁み込むのも、全く氣が附かなかつた。從つて何分過つたのか頓と感じに乘らない。すると又熱い涙が出て來た。心が存外慥かであるのに、眼丈が霞んでくる。いくら瞬をしても駄目だ。湯の中に眸を漬けてる樣だ。くしや〳〵する。焦心たくなる。癇が起る。奮興の度が烈しくなる。さうして、身體は思ふ樣に利かない。自分は齒を食ひ締つて、兩手で握つた段木を二三度搖り動かした。無論動きやしない。一層の事、手を離しちまはうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ碎ける方が、早く片が附いていゝ。とむら〳〵と死ぬ氣が起つた。――梯子の下では、死んぢや大變だと飛び起きたものが、梯子の途中へ來ると、急に太い短い無分別を起して、全く死ぬ氣になつたのは、自分の生涯に於ける心理推移の現象のうちで、尤も記憶すべき事實である。自分は心理學者でないから、かう云ふ變化を、どう說明したら適切であるか知らないけれども、心理學者は却て、實際の經驗に乏しい樣にも思ふから、杜撰ながら、一應自分の愚見丈を述べて、參考にしたい。

アテシコを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覺悟であつた。から心に落ち附きが有る。刺激が少い。さう云ふ狀態で壁へ倚りかゝつてゐると、其の狀態がなだらかに進行するから、自然の勢ひとして段々氣が遠くなる。魂が沈んで行く。かう云ふ場合に於ける精神運動の方向は、いつも極まつたもので、必ず積極から出立して次第に消極に近づく徑路を取るのが普通である。所が其の普通の徑路を行き盡くして、もう是れがどん詰だと云ふ間際になると、魂が割れて二樣の所作をする。第一は順風に帆を上げる勢ひで、此どん底迄流れ込んで仕舞ふ。すると夫限死ぬ。でなければ、大切の手前迄行つて、急に反對の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命が忽ち確實になる。自分が梯子の下で經驗したのは此の第二に當る。だから死に近づきながら好い心持に、三途の此方側迄行つたものが、順路をてく〳〵引き返す手數を省いて、急に、娑婆の眞中に出現したんである。自分は之を死を轉じて活に歸す經驗と名づけてゐる。

所が梯子の中途では、全く之と反對の現象に逢つた。自分は初さんの後を追つ懸けて登らなければならない。其の初さんは、とつくに見えなくなつて仕舞つた。心は焦る、氣は揉める、手は離せない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。——萬事が痛切である。自覺の强度が次第々々に劇しくなる許りである。だから此の場合に於ける精神運動の方向は、消極より積極に向つて登り詰める狀態である。偖て其の狀態がいつ迄も進行して、奮興の極度に達すると、矢張り二樣の作用が出る譯だが、とくに面白いと思ふのは其一つ、——卽ち積極の頂點からとんぼ返りを打つて、魂が消極の末端にひよつくり現はれる奇特である。平たく云ふと、生きてる事實が明瞭になり切つた途端に、命を棄て樣と決心する現象を云ふんである。自分は之を活上より死に入る作用と名けてゐる。此の作用は矛盾の如く思はれるが實際から云ふと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行はれるものである。論より證據發奮して死ぬものは奇麗に死ぬが、いぢけて殺されるものは、どうも旨く死に切れない樣だ。人の身の上は兎に角、かう云ふ自分が好い證據である。梯子の途中で、えゝ忌々しい、死んじまへと思つた時は、手を離すのが怖くも何ともなかつた。無論例の如くどきん抔とは決してしなかつた。所がいざ死なうとして、手を離しかけた時に、又妙な精神作用を承當した。

自分は元來が小說的の人間ぢやないんだが、まだ年が若かつたから、今迄浮氣に自殺を計畫した時は、いつでも花々しく遺つて見せたいと云ふ念があつた。短銃でも九寸五分でも立派に——つまり人が賞めてくれる樣に死んで見度と考へてゐた。出來るならば、華嚴の瀑迄でも出向きたい抔と思つた事もある。然しどうしても便所や物置で首を縊るのは下等だと斷念してゐた。其虛榮心が、此の際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。詰り出す丈の餘地があつたから出したに相違あるまいから、自分の決心は如何に眞面目であつたにしても、左程差し逼つてはゐなかつたんだらう。然し此の位斷乎として、現に梯子段から手を離しかけた、最中に首を出す位だから、相手も中々淺い勢力を張つてゐたに違ない。尤も是れは死んで銅像になりたがる精神と大した懸隔もあるまいから、普通の人間としては別に怪しむ可き願望とも思はないが、何しろ此の際の自分には、ちと贅澤過ぎた樣だ。然し此の贅澤心の爲に、自分は發作性の急往生を思ひとまつて、不束ながら今日迄生きてゐる。全く今はの際にも弱點を引張つてゐた御蔭である。

話すとかうなる。――愈死んぢまへと思つて、體を心持後へ引いて、手の握をゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、此處で死んだつて冴えない。待て待て、出てから華厳の瀑へ行けと云ふ號令――號令は變だが、全く號令のやうなものが頭の中に響き渡つた。ゆるめかけた手が自然と緊つた。曇つた眼が、急に明かるくなつた。カンテラが燃えてゐる。仰向くと、泥で濡れた梯子段が、暗い中迄續いてゐる。是非共登らなければならない。もし途中で挫折すれば犬死になる。暗い坑で、誰も人のゐない所で、日の目も見ないで、鑛と同じ樣にころげ落ちて、それつきり忘れられるのは――案内の初さんにさへ忘れられるのは――よし見附かつても半獸半人の坑夫共に輕蔑されるのは無念である。是非共登り切つちまはなければならない。カンテラは燃えてゐる。梯子は續いてゐる。梯子の先には坑が續いてゐる。坑の先には太陽が照り渡つてゐる。廣い野がある、高い山がある。野と山を越して行けば華厳の瀑がある。――どうあつても登らなければならない。

左の手を頭の上迄伸ばした。ぬらつく段木を指の痕のつく程強く握つた。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺上げた。カンテラの灯は暗い中を竪に動いて行く。坑は層一層と明かるくなる。踏み棄て、去る段々は次第々々に暗い中に落ちて行く。吐く息が黑い壁へ當る。熱い息である。さうして時々は白く見えた。次には口を結んだ。すると鼻の奥が鳴つた。梯子はまだ盡きない。懸崖からは水が垂れる。ひらりとカンテラを翻へすと、崖の面を掠めて弓形にじいと、消えかゝつて、手の運動の止まる所へ落ち附いた時に、又眞直に油煙を立てる。又翻へす。灯は斜めに動く。梯子の通る一尺幅を外れて、がんがらがんの壁が眼に映る。ぞつとする。眼が眩む。眼を閉つて、登る。灯も見えない、壁も見えない。たゞ暗い。手と足が動いてゐる。動く手も動く足も見えない。手障足障丈で生きて行く。生きて登つて行く。生きると云ふのは登る事で、登ると云ふのは生きる事であつた。それでも――梯子はまだある。

それから先は殆ど夢中だ。自分で登つたのか、天佑で登つたのか殆ど判然しない。たゞ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云ふ事を覺つた時に、坑の中へぴたりと坐つた。

「どうした。上がつて來たか。途中で死にやしねえかと思つて、――あんまり長えから。見に行かうかと思つたが、一人ぢや氣味がわるいからな。だけども、好く上がつて來たな。えらいや」

と待ちかねて、もぢ〳〵してゐた初さんが大いに喜んで呉れた。何でも梯子の上で餘つ程心配してゐたらしい。自分はたゞ、

「少し氣分が悪るかつたから途中で休んでゐました」

と答へた。

「氣分が悪い？そいつあ困つたらう。途中つて、梯子の途中か」

「えゝ、まあさうです」

「ふうん。ぢや明日は作業も出來めえ」

此の一言を聞いた時、自分は糞でも食へと思つた。誰が土龍の眞似なんかするものかと思つた。是れでも美しい女に惚れられたんだと思つた。坑を出れば、すぐ華厳の瀑迄行くんだと思つた。さうして立派に死ぬんだと思つた。最後に半時も斯んな獸を相手にして居られるものかと思つた。そこで、自分は初さんに向つて、簡單に、

「宜ければ上がりませう」
と云つた。初さんは怪訝な顔をした。
「上がる？元氣だなあ」
自分は「馬鹿にするねえ、此の明盲目め。人を見損なやがつて」と云ひたかつた。然し口丈は叮嚀に、一言、
「えゝ」
と返事をして置いた。初さんはまだ愚圖々々してゐる。驚いたと云ふよりも、矢張り馬鹿にした愚圖つき方である。
「おい大丈夫かい。冗談ぢやねえ。顔色が悪いぜ」
「ぢや僕が先へ行きませう」
と自分はむつとして歩き出した。
「不可ねえ、不可ねえ。先へ行つちや不可ねえ、後から尾いて來ねえ」
「さうですか」
「當前だあな。人つけ。誰が案内を置き去にして、先へ行く奴があるかい。何でい」
と初さんは、自分を拂ひ退けない許りにして、先へ出た。出たと思ふと急に速力を增した。腰を折つたり、四つに這つたり、脊中を横つ丁にしたり、頭丈曲げたり、坑の恰好次第で色々に變化する。さうして非常に急ぐ。丸で土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間の樣である。畜生中つ腹で急ぎやがるなと、

此方も負けない氣で歩き出したが、そこへ行くと、いくら氣許り張つてゐても駄目だ。五つ六つ角を曲つて、下りたり上つたり、我多つかせてゐるうちに、初さんは見えなくなつた。と思ふと、何とかして、何とか、てゝゝゝと云ふ歌を唄ふ。初さんの姿が見えないのに、初さんの聲丈は、坑の四方へ反響して、籠つた樣に打ち返してくる。意地の悪い野郎だと思つた。始めのうちこそ、追つ附いて遣るから今に見てゐろと云ふ勢で、根限り這つたり屈んだりしたが、殘念な事には初さんの歌が段々遠くへ行つて仕舞ふ。そこで自分は追ひ附く事は一先づ斷念して、初さんのてゝゝゝを道案内にして進む事にした。當分は夫で大概の見當が附いたが、仕舞には其のてゝゝゝも怪しくなつて、とう〳〵丸で聞えなくなつた時には、流石に茫然とした。一本道なら初さんなんどを頼りにしなくつても、自力で日の當る所迄歩いて出て見せるが、何しろ、長年掘荒した坑だから、丸で土蜘蛛の根據地見た樣に色々な穴が、飛んでもない所に開いてゐる。滅多な穴へ這入るとまた腰きり水に漬る所か、でなければ、例の逆さの棧道へ出さうで容易に踏み込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留つて、カンテラの灯を見詰めながら考へた。往きには八番坑迄下りて行つたんだから歸りには是非共電車の通る所まで登らなければならない。どんな穴でも上りならば好いとする。其代り下りなら引返して、又出直す事にする。さうして迂路ついてゐたら、どこかの作事場へ出るだらう。出たら坑夫に聞くとしやう。かう決心をして、東西南北の判然しない所を好い加減に迷つて居た。非常に氣が急いて息が切れたが、滅茶々々に歩いた爲に足の冷たいの丈は癒つた。然し中々出られない。何だか同じ路を往つたり來たりする樣な案排で、あんまり、もどかしいものだから、壁へ頭を打けて割つちま

いたくなつた。どつちを割るんだと云へば無論頭を割るんだが、幾分か壁の方も割れるだらう位の癇癪が起つた。どうも歩けば歩く程天井が邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋の底で踏む段々が邪魔になる。坑總體が自分を閉ぢ込めて、いつ迄立つても出して呉れないのが尤も邪魔になる。此の邪魔ものゝ一局部へ頭を擲きつけて、責めて罅でも入らしてやらうと――やらない迄も時々思ふのは、早く華嚴の瀑へ行きたいからであつた。さうかうしてゐるうちに、向ふから一人の掘子が來た。ばらの銅をスノコへ運ぶ途中と見えて例の箕を抱いてよち〳〵カンテラを搖りながら近づいた。此の灯を見附た時は、嬉しくつて胸がどきりと飛び上がつた。もう大丈夫と勇んで近寄つて行くと、近寄るがものはない、向ふでも此方へ歩いて來る。二つのカンテラが一間許りの距離に近寄つた時、待ち受けた樣に、自分は掘子の顏を見た。すると其顏が非常な蒼ん藏であつた。此坑のなかですら、只事とは受取れない蒼ん藏である。明海へ出して、青い空の下で見たら、大變な蒼ん藏に違ない。それで口を利くのか厭になつた。こんな奴の癖に人に調戯たり、嬲つたり、辱しめたりするのかと思つたら、猶々道を聞くのが厭になつた。死んだつて一人で出て見せると云ふ氣になつた。手前共に口を聞く樣な安つぽい男ぢやないと、腹の中で慥に申し渡して擦れ違つた。向ふは何にも知らないから、是れは無論だまつて擦れ違つた。行く先は暗くなつた。カンテラは一つになつた。氣は益〻焦慮つて來た。けれども中々出ない。たゞ道は何處迄もある。右にも左にもある。自分は右にも這入つた、又左にも這入つた、又眞直にも歩いて見た。然し出られない。愈〻出られないのかと、少しく途方に暮れてゐる鼻の先で、かあん〳〵と鳴り出した。五六歩で突き當つて、折れ込むと、小さな作事場があつて、一人の坑夫がしきりに槌を振り上げて鑿を敲いてゐる。敲くたんびに鑛が壁

から落ちて來る。其の傍に俵がある。是はさつきスノコへ投げ込んだ俵と同じ大きさで、もう一杯詰つてゐる。掘子が來て擔いで行く許りだ。自分は今度こそこいつに聞いて遣らうと思つた。が肝心の本人が一生懸命にかあん〳〵鳴らしてゐる。おまけに顏もよく見えない。丁度いゝから少し休んで行かうと云ふ氣が起つた。幸ひ俵がある。此の上へ尻を卸せば、持つて來いの腰掛になる。自分はどさつとアテシコを俵の上に落した。すると突然かあん〳〵が已んだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。鑿を持つた儘である。

「何を爲やがるんでい」

鋭い聲が穴一杯に響いた。自分の耳には敲き込まれる樣に響いた。高い影は大股に歩いて來る。見ると、足の長い、胸の張つた、體格の逞しい男であつた。顏は脊の割に小さい。其輪廓が稍判然する所迄來て、男は留まつた。さうして自分を見下した。口を結んでゐる。二重瞼の大きな眼を見張つてゐる。鼻筋が眞直に通つてゐる。色が赭黑い。たゞの坑夫ではない。突然として云つた。

「貴樣は新前だな」

「さうです」

自分の腰は此の時既に俵を離れてゐた。何となく、向ふから近附いてくる坑夫が恐ろしかつた。今迄一萬餘人の坑夫を畜生の樣に輕蔑してゐたのに、――誓つて死んで仕舞はうと覺悟をしてゐたのに、――大股に歩いて來た坑夫が忽ち恐ろしくなつた。然し、

「何でこんな所を迷子ついてゐるんだ」

と聞き返された時には、稍安心した。自分の樣子を見て、故意に俵の上へ腰を卸したんでないと見極めた

語調である。
「實は昨夕飯場へ着いて、樣子を見に坑へ這入つた許です」
「一人でか」
「いゝえ、飯場頭から人を附けて呉れたんですが……」
「さうだらう、一人で這入れる所ぢやねえ。どうした其の案内は」
「先へ出ちまいました」
「先へ出た？手前を置き去りにしてか」
「まあ、さうです」
「太え野郎だ。よし〳〵今に己が送り出してやるから待つてろ」
と云つたなり、又鑿と槌をかあん〳〵鳴らし始めた。自分は命令の通り待つてゐた。此の男に逢つたら、もう一人で出る氣がなくなつた。死んでも一人で出て見せると威張つた決心が、急に何處へか行つて仕舞つた。自分は此變化に氣が附いてゐた。それでも別に恥かしいとも思はなかつた。人に公言した事でないから構はないと思つた。其の後人に公言した爲に、遣らないでも濟む事、遣つてはならない事を毎度遣つた。人に公言すると、しないのとは大變な違があるもんだ。その内かあん〳〵が已んだ。坑夫は又自分の前まで來て、胡坐をかきながら、
「一寸待ちねえ。一服やるから」
と、煙草入を取り出した。茶色の、皮か紙か判然しないもので、股引に差し込んである上から筒袖が被さ

つてゐた。坑夫は旨さうに腹の底迄吸つた煙を、鼻から吹き出してゐる間に、短い羅宇の中途を、煙草入の筒でぽんと拂いた。小さい火球が雁首から勢ひよく飛び出したと思つたら、坑夫の草鞋の爪先へ落てじゅうと消えた。坑夫は殼になつた煙管をぷつと吹く。羅宇の中に籠つた煙が、一度に雁首から出た。坑夫は其時始めて口を利いた。
「御前は何處だ。斯んな所へ全體何しに來た。身體つきは、すらりとしてゐる樣だが。今迄働いた事はねえんだらう。どうして來た」
「實は働いた事はないんです。が少し事情があつて、來たんです。……」
と迄は云つたが、坑夫には愛想が盡きたから、もう、歸るんだとは云はなかつた。死ぬんだとは猶更云はなかつた。然し今迄の樣に、腹の内で畜生あつかひにして、口先許り叮嚀にしてゐたのとは大分趣が違ふ。自分はたゞ洗ひ攫ひ自分の思はくを話して仕舞はない丈で、話した丈は眞面目に話したんである。すこしも裏表はない。腹から叮嚀に答へた。坑夫はしばらくの間默つて雁首を眺めてゐた。それから又煙草を詰めた。煙が鼻から出だした眞最中に口を開いた。
自分が其の時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼の教育である。教育から生ずる、上品な感情である。見識である。熱誠である。最後に彼の使つた漢語である。——彼れは坑夫抔の夢にも知り樣筈がない漢語を安々と、恰も家庭の間で昨日迄常住坐臥使つてゐたかの如く、使つた。自分は其の時の有樣をいまだに眼の前に浮べる事がある。彼れは大きな眼を見張つたなり、自分の顏を熟視した儘、心持頸を前の方に出して、胡坐の膝へ片手を逆に突いて、左の肩を少し聳して、右の指で煙管を握つて、薄い

唇の間から奇麗な齒を時々あらはして、――こんな事を云つた。句の順序や、單語の使ひ方は、慥かな記憶を其の儘寫したものである。たゞ語聲丈はどうしやうもない。――

「龜の甲より年の功と云ふことがあるだらう。こんな賤しい商賣はしてゐるが、まあ年長者の云ふ事だから、參考に聞くがいゝ。青年は情の時代だ。おれも覺がある。情の時代には失敗するもんだ。君もさうだらう。己もさうだ。誰でも左樣に極つてる。だから、察してゐる。君の事情と己の事情とは、どの位違ふか知らないが、何しろ察してゐる。咎めやしない。同情する。深い事故もあるだらう。聞いて相談になれる身體なら聞きもするが、シキから出られない人間ぢや聞いたつて、仕方なし、君も話して呉れない方がいゝ。おれも……」

と云ひ掛けた時、自分は此男の眼附が多少異樣にかゞやいてゐたと云ふ事に氣がついた。何だか大變感じてゐる。之が當人の云ふ如くシキを出られない爲か、又は今云ひ掛けたおれもの後へ出て來る話の爲か、一寸分り悪いが、何しろ妙な眼だつた。しかも此の眼が鋭く自分を見詰めてゐる。さうして其の鋭いうちに、懷舊と云ふのか、沈吟と云ふのか、何だか、人を引き附けるなつかしみがあつた。此の黑い坑の中で、人氣は此の坑夫丈で、此の坑夫は今や眼丈である。自分の精神の全部はたちまち此の眼球に吸ひ附けられた。さうして彼の云ふ事を、とつくり聞いた。彼はおれもを二遍繰り返した。

「おれも、元は學校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。所が二十三の時に、ある女と親しくなつて――詳しい話はしないが、それが基で容易ならん罪を犯した。罪を犯して氣が附いて見ると、もう社會に容れられない身體になつてゐた。もとより醉興でした事ぢやない、已を得ない事情から、已を得ない罪を犯したんだが、社會は冷刻なものだ。內部の罪はいくらでも許すが、表面の罪は決して見逃さない。おれは正しい人間だ、曲つた事が嫌だから、つまりは罪を犯す樣にもなつたんだが、さて犯した以上は、どうする事も出來ない。學問も棄てなければならない。功名も拋たなければならない。萬事が駄目だ。口惜しいけれども仕方がない。其の上制裁の手に捕へられなければならない。（故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云ふ言語を使用した。）然し自分が悪い覺がないのに、無暗に罪を着るなあ、どうしても己の性質として出來ない。そこで突つ走つた。逃げられる丈逃げて、此處迄來て、とうゝシキの中へ潛り込んだ。それから六年といふもの、つひに日光を見た事がない。毎日々々坑の中でかんかん敲いてゐる許りだ。丸六年敲いた。來年になればもうシキを出たつて構はない、七年目だからな。然し出ない、又出られない。制裁の手には捕まらないが、出ない。かうなりや出たつて仕方がない。娑婆へ歸れたつて、娑婆でした所業は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹ん中にあるだらう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は藪から棒の質問に、用意の返事を持ち合せなかつたから、はつと思つた。自分の腹ん中にあるのは、昔處ろではない。一二年前から一昨日迄持ち越した現在に等しい過去である。自分は一層の事自分の心事を此男の前に打ち明けて仕舞はうかと思つた。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮る如くに、話の續きを始めた。

「六年此處に住んでゐるうちに人間の汚ない所は大抵見悉した。でも出る氣にならない。いくら腹が立

つても、いくら嘔吐を催しさうでも、出る氣にならない。然し社會には、――日の當る社會には――此處よりまだ苦しい所がある。それを思ふと、辛抱も出來る。たゞ暗くつて狹い所だと思へば夫れで濟む。身體も今ぢや銅臭くなつて、一日もカンテラの油を嗅がなくつちや居られなくなつた。然し――然しそりやおれの事だ。君の事ぢやない。君がさうなつちや大變だ。生きてる人間が銅臭くなつちや大變だ。いや、どんな決心でどんな目的を持つて來ても駄目だ。決心も目的もたつた二三日で突ッつき殺されてしまふ。それが氣の毒だ。いかにも可哀想だ。理想も何にもない鑿と槌より外に使ふ術を知らない野郎なら、それで結構だが。然し君の樣な――君は學校へ行つたらう。――何處へ行つた。――えゝ？まあ何處でもいゝ。それに若いよ。シキへ抛り込まれるには若過るよ。こゝは人間の屑が抛り込まれる所だ。全く人間の墓所だ。生きて葬られる所だ。一度踏ん込んだが最後、どんな立派な人間でも、出られつこのない陷穽だ。そんな事とは知らずに、大方ボン引の言ひなり次第になつて、引張られて來たんだらう。それを君の爲に悲しむんだ。人一人を墮落させるのは大事件だ。殺しちまう方がまだ罪が淺い。墮落した奴はそれ丈害をする。他人に迷惑を掛ける。――實はおれも其の一人だ。が、かうなつちや墮落してゐるより外に道はない。いくら泣いたつて、悔んだつて墮落してゐるより外に道はない。だから君は今のうち早く歸るがいゝ。君が墮落すれば、君の爲にならない許りぢやない。――君は親があるか……」

自分はたゞ一言あると答へた。

「あれば猶更だ。それから君は日本人だらう……」

自分は默つてゐた。

「日本人なら、日本の爲になる樣な職業に就いたら宜からう。學問のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く歸るがよからう。東京なら東京へ歸るさ。さうして正當な――君に適當な――日本の損にならない樣な事をやるさ。何と云つても此處は不可ない。旅費がなければ、おれが出してやる。だから歸れ。分つたらう。おれは山中組にゐる。山中組へ來て安さんと聞きやあすぐ分る。尋ねて來るが好い。旅費はどうでも都合してやる」

安さんの言葉は是で終つた。坑夫の數は一萬人と聞いてゐた。其一萬人は悉く理非人情を解しない畜類の發達した化物とのみ思ひ詰めた此の時、此の人に逢つたのは全くの小說である。夏の土用に雪が降つたよりも、坑の中で安さんに說諭された方が、餘程の奇蹟の樣に思はれた。大晦日を越すとお正月が來る位は承知してゐたが、地獄で佛と云ふ諺も記憶してゐたが、窮まれば通ずといふ熟語も習つた事もあるが、困つた時は誰か來て助けて呉れさうなものだ位に思つて、芝居氣を起しては困つてゐた事も度々あるが、――此の時は丸で違ふ。眞から一萬人を畜生と思ひ込んで、其の畜生が又悉く自分の敵だと考へ詰めた最强度の斷案を、忘るべからざる痛忿の焰で、胸に燒き附けた折柄だから、猶更此の安さんに驚かされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に翻へし得る程の力を以て、自分の耳に應へた。

しばらくは二人して默つてゐた。安さんは一應云ふ丈の事を云つて仕舞つたんだから、口を利かない筈であるが、自分は先方に對して、何とか返事をする義務がある。義務とかいては安さんに濟まない。心底から感謝の意を表した上で、自分の考へも少し聞いてもらひたいのは山々であつたが、何分にも鼻の奥が詰つて不自由である。しかも强ひて言葉を出さうとすると、口へ出ないで鼻へ拔けさうになる。夫れを我

慢すると、唇の兩端がむづ〳〵して、小鼻がぴく付いて來る。やがて鼻と口を塞かれた感動が、出端を失つて、眼の中にたまつて來た。睫が重くなる。瞼が熱くなる。大に困つた。安さんも妙な顔をしてゐる。二人ともばつが惡くなつて、差し向ひで胡坐をかいた儘、默つてゐた。其の時次の作事場で鑿や敲く音がかあん〳〵鳴つた。今考へると、自分と安さんが默然と顔を見合せてゐた場所は、地面の下何百尺位な深さだか、それを正確に知つて置きたかつた。都會でも、こんな奇遇は少い。銅山の中では有らう筈がない。日の照らない坑の底で、世から、人から、歴史から、太陽からも、忘れられた二人が、難有い誨を垂れて尊とい涙を流した舞臺があらうとは、胡坐をかいて、默然と互に顔を見守つてゐた本人より外に知るものはあるまい。

安さんは又煙草を呑み出した。ぷかり〳〵と煙が出た。其の煙が濃く出ては暗がりに消え、濃く出ては暗がりに消える間に、自分は漸く聲が自由になつた。

「難有いです。成程あなたの仰やる通り人間のゐる所ぢやないでせう。僕もあなたに逢ふ迄は、今日限り銅山を出樣かと思つてたんです。……」

流石山を出て死ぬ積だつたとは云ひかねたから、茲處で一寸句を切つたら、

「そりや猶更だ。早速歸るがいゝ」

と、安さんが勢ひをつけて呉れた。自分は矢つ張り默つてゐた。すると、

「だから旅費はおれが拵へてやるから」

と云ふ。自分は先きから旅費々々と聞かされるのを、只善意に解釋してゐたが、左ればと云つて毫も貰ふ氣は起らなかつた。昨日飯場頭の合力を斷つた時の料簡と同じかと云ふと、其とも違ふ。昨日は是非貰ひたかつた、地平へ手を突いて迄貰ひたかつた。然し草鞋錢を貰ふよりも、坑夫になる方が得だと勘定したから、手を出して頂きたい所を、無理に斷つたんである。安さんの旅費は始めから貰ひたくない。好意を空しくすると云ふ點から見れば、貰はなければ濟まないし、坑夫を已めるとすれば貰ふ方が便利だが、それにも拘らず貰ひたくなかつた。是は今から考へると、全く向ふの人格に對して、貰つては恥づべき事だ。こちらの人格が下がるといふ念から萌したものらしい。先方が如何にも立派だから、此方も出來る丈立派にしたい、立派にしなければ、自分の體面を損ふ虞がある。向ふの好意を享けて、相當の滿足を先方に與へるのは、此方も悅ばしいが、受けるべき理由がないのに、濫りに自己の利得のみを標準に置くのは、乞食と同程度の人間である。自分は此の尊敬すべき安さんの前で、自分は乞食である、乞食以上の人物でないと云ふ事實上の證明を與へるに忍びなかつた。年が若いと馬鹿な代りに存外奇麗なものである。自分は、

「旅費は頂きません」

と斷つた。

此の時安さんは、煙草を二三ぷく吸して、煙管を筒へ入れかけてゐたが、自分の顔をひよいと見て

「こりや失敬した」

と云つたんで、自分は非常に氣の毒になつた。もし遣るから貰つて置けとでも强ひられたなら屹度受けたに違ない。其の後氣をつけて、人が金を貰ふ所を見てゐると、始めは一應辭退して、後では大抵懷へ入れる樣だが、是は全く此の心理狀態の發達した形式に過ぎないんだらうと思ふ。幸ひ安さんがえらい男で、

「こりや失敬した」と云つて呉れたんで、自分は此の形式に陥らずに濟んだのは難有かつた。

安さんはすぐさま旅費の件を撤回して

「だが東京へは歸るだらうね」

と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍つた際だから、ことによれば、旅費丈でも溜めた上、歸る事にしやうと云ふ腹もあつたんで、

「よく考へて見ませう。いづれ其の中又御相談に參りますから」

と答へた。

「さうか。それぢや、兎に角路の分る所迄送つてやらう」

と煙草入を股引へ差し込んで、上から筒服の胴を被せた。自分はカンテラを提げて腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑は存外登り安かつた。例の段々を四五遍通り拔けて、二度程四つん這ひになつたら、可成天井の高い、眞直に立つて歩ける樣な路へ出た。それをだら〳〵と廻り込んで、右の方へ登り詰めると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電氣燈の見える所で留つた。

「ぢや、是で別れ樣。あれが見張所だ。あすこの前を右へ附いて上がると、軌道の敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくつちやあ出られない。晩には歸る。五時過ならゐるから、暇があつたら來るがいゝ。氣を附けて行き玉へ。左樣なら」

安さんの影は忽ち暗い中へ這入つた。振り向いて、一口禮を云つた時は、もうカンテラが角を曲つてゐた。自分は一人でシキの入口を出た。ふら〳〵長屋迄歸つて來る。途中で色々考へた。あの安さんと云ふ

男が、順當に社會の中で伸びて行つたら、今頃は何に成つてゐるか知らないが、どうしたつて坑夫より出世してゐるに違ない。社會が安さんを殺したのか、安さんが社會に對して濟まない事をしたのか――あんな男らしい、すつきりした人が、さう無暗に亂暴を働く譯がないから、ことによると、安さんが惡いんでなくつて、社會が惡いのかも知れない。自分は若年であつたから、社會とはどんなものか、其の當時明瞭に分らなかつたが、何しろ、安さんを追ひ出す樣な社會だから碌なもんぢやなからうと考へた。安さんを最辰にする所爲か、どうも安さんが逃げなければならない罪を犯したとは思はれない。社會の方で安さんを殺したとして仕舞はなければ氣が濟まない。其の癖今云ふ通り社會とは何者だか要領を得ない。たゞ人間だと思つてゐた。其の人間が何故安さんの樣な好い人を殺したのか猶更分らなかつた。だから社會が惡いんだと斷定はして見たが、一向社會が憎らしくならなかつた。唯安さんが可哀想であつた。出來るなら自分と代つてやりたかつた。自分は自分の勝手で、自分を殺しに此處まで來たんである。厭になれば歸つても差支ない。安さんは人間から殺されて、仕方なしに此處に生てゐるんである。歸らうたつて、歸る所はない。どうしても安さんの方が氣の毒だ。

安さんは墮落したと云つた。高等教育を受けたものが坑夫になつたんだから、成程墮落に違ない。けれども其の墮落がたゞ身分の墮落ばかりでなくつて、品性の墮落も意味してゐる樣だから痛ましい。安さんも達磨に金を注ぎ込むのかしら、坑の中で一六勝負をやるのかしら、ジャンボーを病人に見せて調戯のかしら、女房を抵當に――まさか、そんな事もあるまい。昨日着き立ての自分を見て愚弄しないものゝないうちで、安さん丈は暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めて呉れた。安さんは坑夫の仕事はしてゐる

が、心迄の坑夫ぢやない。夫れでも墮落したと云つた。墮落の底に死んで活きてゐんだと云つた。それ程墮落したと自覺してゐながら、生きて働いてゐる。生きてかん〳〵敲いてゐる。生きて——自分を救はうとしてゐる。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

かう決心をして、何でも構はないから、一先坑夫になつた上として、出來る丈急ぎ足で歸つて來ると、長屋の半丁許手前に初さんが石へ腰を掛けて待つてゐる。雨は歇んだ。空はまだ曇つて居るが、濡れる氣遣はない。山から風が吹いて來る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉しい。自分が嬉しさの餘り、疲れた足を擦りながら、いそ〳〵近附いてくると、初さんは奇怪な顔をして、

「やあ出て來たな。よく路が分つたな」

と云つた。自分が案内に附けられながら、他を置き去りにして、何とかして何とか、てゝゝゝと云ふ唄をうたつて、大いに焦して置いて、他が大迷つきに、迷つついて、穴の角へ頭を打つ附けて割つて見樣と迄思つた揚句、やつとの事で安さんの御情で出て來れば、「よく路が分つたな」と空とぼけてゐる。其の癖親方が怖いものだから、途中で待ち合せて、一所に連れて歸らうと云ふ目算である。自分は石へ腰を掛けて薄笑ひをしてゐる此の案内の頭の上へ唾液を吐きかけてやらうかと思つた。然し自分は死ぬのを斷念したばかりである。當分は此所に留まらなくつちやならない身體である。唾液を吐きかければ、喧嘩になる丈である。喧嘩をすれば負る丈である。負た上にスノハコの中へ打ち込れては折角死ぬのを斷念した甲斐がない。そこで、斯う云ふ答をした。

「どうか、かうか出て來ました」

すると初さんは猶更不思議な顔をして、

「へえ。感心だね。一人で出て來たのか」

と聞いた。其の時自分は年の割にはうまくやつた。旨くやつたと云ふ位だから、たゞ自分の損にならないやうにと云ふ丈で、それより以外に賞める價値のある所作ぢやないが、兎に角十九にしては、中々複雜な曲者だと思ふ。と云ふのは、かう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉の先迄出たんである。所をとう〳〵云はずに仕舞つたのが自慢なのだ。隨分くだらない自慢だが譯を話せば、こんな料簡であつた。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。此の安さんがわざ〳〵第一見張所の傍迄見送り知らずの自分を親切に連れて來て呉れたと云ふ事が知れ渡れば、此の案内者は面目を失ふに極つてゐる。責任のある自分が、責任を抛り出して、先へ坑を飛び出して仕舞つたと分る以上は——しかもそれが惡意から出たと明瞭に證據だてられる以上は、此奴は親方に對して濟ましちやゐられない。となると後で屹度敵を打つだらう。無責任が露見るのは痛快だが——自分は決して寛大の念に制せられたなんて耶蘇教流の嘘はつかない。——そこ迄は痛快だが、敵打は大に迷惑する。實の所自分は此の迷惑の念に制せられた。それで、

「えゝ、色々路を聞いて出て來ました」

と大人しい返事をして置いた。

初さんは半分失望した樣な、半分安心した樣な顔附をしたが、やがて石から腰を上げて、

「親方の所へ行かう」

と又歩き出した。自分は默つて尾いて行つた。昨日親方に逢つたのは飯場だが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁程上ると、石垣で二方の角を取つて平した地面の上に二階建がある。家は左程見苦しくもないが、家の外には木も庭もない。相變らず二階の窓から惡魔が首を出してゐる。入口迄來て、初さんが外から聲を掛けると、窓をがらりと明けて、飯場頭が顏を出した。米利安の襯衣の上へどてらを着た儘である。

「歸つたか。御苦勞だつた。まあ彼方へ行つて休みねえ」

と云ふが早いか初さんは消えてなくなつた。後は二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立つた儘、談話をした。

「どうです」

「大概見て來ました」

「何處迄降りました」

「八番坑迄降りました」

「八番坑迄。そりや大變だ。隨分ひどかつたでせう。それで……」

と心持首を前の方へ出した。

「それで——矢つ張り居る積です」

「矢つ張り」

と繰り返したなり、飯場頭は眤と自分の顏を見てゐた。自分も默つて立つてゐた。二階からは依然として

首が出てゐる。おまけに二つ許り殖えた。此の顏を見ると、厭で厭で堪らない。飯場へ歸つてから、此の顏に取り卷かれる事を思ひ出すと、ぞつとする。それでも居る氣である。どんな辛抱をしても居る氣である。然し「矢つ張り居る積です」と斷然答へて置いて、二階の顏を不意に見上げた時には、さすがに情なかつた。こんな奴と一所に置いて呉れと、手を合せて拜まなければ始末がつかない樣になり下がつたのかと思ふと、身體も魂も鹽を懸けた海鼠の樣にたわいなくなつた。其の時飯場頭は漸く口を利いた。奇麗さつぱりと利いた。

「ぢや置く事にしやう。だが規則だから、醫者に一遍見て貰つてね。健康の證明書を持つて來なくつちや不可ない。——今日と——今日は、もう遲いから、明日の朝、行つて見て貰つたらよからう。——診察場かい。診察場は是れから南の方だ。上がつて來る時、見えたらう。あの青いペンキ塗りの家だ。ぢや今日は疲れたらうから、飯場へ歸つて緩くり御休み」

と云つて窓を閉てた。窓を閉てる前に自分は一寸頭を下げて、飯場へ引返した。緩くり御休と云つて呉れた飯場頭の親切は難有いが、緩くり寐られる位なら、こんなに苦しみはしない。起きてゐれば獰猛組、寐れば南京蟲に責められる許だ。たま〳〵飯の蓋を取れば咽喉へ通らない壁土が出て來る。——然し居る。居ると極めた以上は、どうしても居て見せる。少くとも安さんが生きてるうちは居る。シキの人間がみんな南京蟲になつても、安さんさへ生きて働いてるうちは、自分も生きて働く考へである。かう考へながら半丁程の路を降りて飯場へ歸つて、二階へ上がつた。上がると案のじやう大勢圍爐裏の傍に待ち構へてる。自分はくさ〳〵したが、出來る丈何喰はぬ顏をして、邪魔にならない樣な所へ坐つた。すると始まつ

た。皮肉だか、冷評だか、罵詈だか、滑稽だか、のべつに始まつた。一々覺えてゐる。生涯忘れられない程に、自分の柔らかい頭を刺激したから、よく覺えてゐる。然し一々繰返す必要はない。先づ大體昨日と同じ事と思へば好い。自分は急に安さんに逢ひたくなつた。例の夕食を我慢して二杯食つて、みんなの眼につかない樣にそつと飯場を抜け出した。

山中組はジヤンボーの通つた石垣の間を抜けて、だら〳〵坂の降り際を、右へ上ると斜に頭の上に被さつてゐる大きな槐の奥にある。夕暮の門口を覗いたら、一人の掘子がカンテラの燈で筒服の掃除をしてゐた。中は存外靜かである。

「安さんは、もうお歸りになりましたか」

と叮嚀に聞くと、掘子は顏を上げて一寸自分を見た儘、奥を向いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて來たよ」

と呼び出しにかゝるや否や、安さんは待つてたと云はん許りに足音をさせて出て來た。

「やあ來たな。さあ上れ」

見ると安さんは唐綾の着物に豆絞か何にかの三尺を締めて立つてゐる。丸で東京の馬丁の樣な服裝である。是れには少し驚いた。安さんも自分の樣子を眺めて首を傾けて、

「成程東京を走つた儘の服裝だね。おれも昔はさう云ふ着物を着たこともあつたつけ。今ぢや是れだ」

と兩袖の袵を引つ張つて見せる。

「何と見える。車引かな」

と云ふから、自分は遠慮してにや〳〵笑つてゐた。安さんは、

「ハ、、、根性は是れよりまだ墮落してゐるんだ。驚いちや不可ない」

自分は何と答へていゝか分らないから、矢張りにや〳〵笑つて立つてゐた。此の時分は手持無沙汰でさへあればにや〳〵して濟ましたもんだ。そこへ行くと安さんは自分より遙か世馴れてゐる。此の體を見て、

「さつきから來るだらうと思つて待つてゐた。さあ上れ」

と向ふから始末をつけて呉れた。此の人は世馴れた知識を應用して、世馴れない人を救ける方の側だと感心した。こいつを逆にして馬鹿にされつけてゐたから特別に感心したんだらう。そこで安さんの云ふ通り長屋へ上つて見た。部屋は矢つ張り廣いが、自分の泊つた所程でもない。電氣燈は點いてゐる。圍爐裏もある。たゞ人數が少い、しめて五六人しかゐない。しかも、それが向ふに塊つてゐるから、此方はたつた二人である。そこで又話を始めた。

「何時歸る」

「歸らない事にしました」

安さんは馬鹿だなあと云はない許りの顏をして呆れてゐる。

「あなたの仰しやつた事は、よく分つてゐます。然し僕だつて、醉興に此處迄來た譯ぢやないんですから、歸るつたつて歸る所はありません」

「ぢや矢つ張り世の中へ顏が出せない樣な事でもしたのか」

と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向ふの方がぎよつとしたらしい。

「さうでもないんですが――世の中へ顔が出したくないんです」
と答へると、自分の態度と、自分の顔附と、自分の語勢を注意してゐた安さんが急に噴き出した。
「冗談云つちや不可ねえ。そんな醉狂があるもんか。世の中へ顔が出し度ないた何の事だ。贅澤ぢやねえか。そんな身分に一日でも好いからなつて見てえ位だ」
「代れゝば代つて上げたいと思ひます」
と至極眞面目に云ふと、安さんは、又噴き出した。
「どうも手の附け樣がないね。考へて御覽な。世の中へ顔が出し度ないものがさ、此シキへ顔が出したくなれるかい」
「些とも出したくはありません。仕方がないから――仕方がないんです。昨夕も今日も散々苛責られました」
安さんは又笑ひ出した。
「太え野郎だ。誰が苛責た。年の若いものつらまへて。よし〳〵おれが今に敵を打つてやるから。其の代り歸るんだぜ」
自分は此の時大變心丈夫になつた。猶々留まる氣になつた。あんな獰猛も此方さへ強くなりや些とも恐ろしかないんだ、十把一束に罵倒する位の勇氣が段々出てくるんだと思つた。そこで安さんに敵は取つてくれないでも好いから、どうか歸さずに當分置いて貰へまいかと賴んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、氣の毒さうな顔をして、呆れ返つてゐたが、

「それぢや、居るさ。――何も賴むの賴まないのつて、そりや君の勝手だあね。相談するがものはないや」
「でも、あなたが承知して下さらないと、居にくいですから」
「折角さう云ふんなら、當分にするが可い。長く居ちや不可ない」
自分は謹んで安さんの旨を領した。實際自分も其の考へでゐたんだから、是は決して御交際の挨拶ではなかつた。それから色々な話をしたがシキの中の述懷と大した變りはなかつた。たゞ安さんの兄さんが高等官になつて長崎にゐると云ふ事を聞いて、大いに感動した。安さんの身になつても、兄さんの身になつても、定めし苦しいだらうと思ふにつけ、自分と自分の親と結びつけて考へ出したら何となく悲しくなつた。歸る時に安さんが出口迄送つて來て、相談でもあるなら何時でも來るが好いと云つてくれた。
表へ出ると、いつの間にか曇つた空が晴れて、細い月が出てゐる。路は存外明るい、其の代り大變寒い。袷を通して、襯衣を通して、蒲鉾形の月の光が肌迄浸み込んで來る樣だ。兩袖を胸の前へ合せて、其の中へ鼻から下を突込んで肩を出來る丈け聳やかして歩行き出した。身體はいぢけてゐるが腹の中はさつきより大分豐かになつた。何の當分のうちだ。馴れゝばさう苦にする事はない。何しろ一萬餘人もかたまつて、毎日々々一所に働いて、一所に飯を食つて、一所に寢てゐるんだから、自分だつて七日も練習すれば、一人前に墮落する事は出來るに違ない。――此時自分の頭の中には、墮落の二字が此通りに出て來た。然したゞ此場合に都合のいゝ文字として湧いて出た迄で、墮落の内容を明かに代表してゐなかつたから、別に恐ろしいとも思はなかつた。それで、比較的元氣づいて飯場へ歸つて來た。五六間手前迄來ると、何だか

わい〳〵云つてゐる。外は淋しい月である。自分は内の騒ぎを聞いて、淋しい月を見上げて、暫ら〻立つてゐた。さうしたら、どうも這入るのが厭になつた。月を浴びて外に立つてゐるのも、つらくなつた。安さんの所へ行つて泊めてもらひたくなつた。一歩引き返して見たが、あんまりだと氣を取り直して、のそ〳〵長屋へ這入つた。横手に廣い間があつて、上り口からは障子で立て切つてある。電氣燈が頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎは正に此中から出る。自分は下駄を脱いで、足音のしない様に、障子の傍を通つて、二階へ上がつた。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡した時、ほつと一息ついた。部屋には誰もゐない。

たゞ金さんが平たく煎餅の様になつて寐てゐる。夫れから例の帆木綿にくるまつて、ぶら下がつてゐる男もゐる。然し兩方とも極めて靜かだ。居ても居ないと同じく、部屋は漠然としてたゞ廣いものだ。自分は部屋の眞中迄來て立ちながら考へた。床を敷いて寐たものだらうか、但しは着のみ着の儘で、ごろりと横になるか、又は昨夕の通り柱へ倚れて夜を明さうか。ごろ寐は寒い、柱へ倚り懸るのは苦しい。どうかして布團を敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てゝゐるから、南京蟲がゐても寐られるかも知れない。それに蒲團の奇麗なのを選つたらよからう。殊更日によつて、南京蟲の數が違はないとも限るまい。と色々な理窟をつけて布團を出して、そうつと潛り込んだ。

此の晩の經驗を記憶の儘、こゝに書きつけては、自分がお話しにならない馬鹿だと吹聽する事になるばかりで、外に何の利益も興味もないから已める。一口に云ふと、昨夜と同じ様な苦しみを、昨夜以上に受けて、寐るが早いか、すぐ飛び起きちまつた。起きた後で、あれ程南京蟲に螫されながら、何故性懲もなく又布團を引つ張り出して寐たもんだらうと後悔した。考へると、全くの自業自得で、しかも常識のあるものなら誰でも避けられる、又避けなければならない自業自得だから、我れながら淺ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭になつて、布團の上へ胡坐をかいた儘、考へ込んでゐると、又猛烈にちくりと螫された。臀と股と膝頭が一時に飛び上がつた。自分は五位鷺の様に布團の上に立つた。さうして、四圍を見廻した。さうして泣き出した。仕方がないから、紺の兵兒帶を解いて、四つに折つて、裸の身體中所嫌はず、ぴしやぴしや敲き始めた。それから着物を着た。さうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に倚りかゝつた。家が戀しくなつた。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六疊の間が戀しくなつた。戸棚に這入つてる更紗の布團と、黒天鵞絨の半襟の掛かつた中形の搔捲が戀しくなつた。三十分でも好いから、あの布團を敷いて、あの搔捲を懸けて、暖たかにして樂々寐て見たい、今頃は誰があの部屋へ寐てゐるだらうか。それとも自分が居なくなつてから後は、机を据ゑたまんま、空ん胴にしてあるかしらん。さうすると、あの布團も搔卷も、疊んだなり戸棚に仕舞つてあるに違ない。勿體ないもんだ。父も母も澄江さんも艶子さんも南京蟲に食はれないで仕合せだ。今頃は熟睡してゐるだらう。羨ましい。——夫れとも寐られないで、のつそつして居るかしらん。父は寐られないと疳癪を起して、夜中に灰吹をぽん〳〵敲くのが癖だ。煙草を呑むんだと云ふが、煙草は假託で、實は、腹立紛れに敲き附るんぢやないかと思ふ。今頃はしきりに敲いてるかも知れない。苦々しい倅だと思つて敲いてるかも知れない。どうなつたらうと心配の餘り眼を覺まして敲いてるか。どつちにしても氣の毒だ。然し此方ぢや夫程にも思つてゐないから、先方でもさう苦にしちや居まい。母は寐られないと手水に起きる。中庭の小窓を明けて、手を洗つて、棧を卸すのを忘れ

て、翌朝よく父に叱られてゐる。昨夜も今夜も屹度叱られるに違ない。澄江さんはぐう〳〵寐てゐる――どうしても寐てゐる。自分の居る前では、丸くなつたり、四角になつたり色々な藝をして、人を釣つてるが、居なくなれば、すぐに忘れて、平生の通り御膳をたべて、能く寐る女だから、是非に及ばない。あんな女は、今迄見た新聞小説には決して出て來ないから、始めは不思議に思つたが、ちやんと證據があるんだから確かである。かう云ふ女に戀着しなければならないのは、餘ッ程の因果だ。隨分憎らしいと思ふが、憎らしいと思ひながらも矢ッ張惚れ込んでゐるらしい。不都合な事だ。今でも、あの色の白い顔が眼前にちら〳〵する。怪しからない顔だ。艶子さんは起きてゐる。さうして泣いてゐるだらう。甚だ氣の毒だ。然し此方で惚れた覺もなければ、又惚れられる樣な惡戯をした事がないんだから、いくら起きてゐても、泣いて呉れても仕方がない。氣の毒がる事は、いくらでも氣の毒がるが仕方がない。構はない事にする。――そこで最後には、外の事はどうともするから、たゞ安々と樂寐がさせて貰ひたい。不斷の白い飯も蟲唾が走る樣に食ひたいが、それよりか南京蟲のゐない床へ這入りたい。三十分でも好いからぐつすり寐て見たい。其の後でなら腹でも切る。……

かう考へてゐると又夜が明けた。考へてゐる途中で何時か寐たものと見えて、眼が覺めた時は、何にも考へてゐなかつた。それからあとは、のそ〳〵下へ降りて行つて、顔を洗つて、南京米を食ふ。萬事昨日の通りだから、省いて仕舞ふ。九時の例刻を待ちかねて病院へ出掛ける。病院は一昨日山を登つて來る時に見た、青いペンキ塗の建物と聞いてゐるから道も家も間違へ樣がない。飯場を出て二丁ばかり行くと、すぐ道端にある。木造ではあるが中々立派な建築で、廣さも可成だけに、獰猛組とは丸で不釣合である。

野蠻人が病氣をするんでさへ既に不思議な位だのに、病氣に罹つたものを治療してやる爲の器械と藥品と醫者と建物を具へ附けたんだから、世の中は妙だと云ふ感じがすぐに起る。丸で泥棒が金を出し合つて、小學校を建てゝ子弟を通學させてる樣なもんだ。文明と蒙昧の兩極端が此のペンキ塗の青い家の中で出逢つて、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧が益ぴん〳〵蒙昧になつてくる。下手に食ひ違つた結果が起るもんだ。と考へながら歩いて來ると、又鬼共が窓から首を出して眺めてゐる。折角の考へも此の氣味のわるい顔を見上げると忽ち崩れて仕舞ふ。あの顔のなかに安さんの樣なのが、たつた一つでもあれば、生き返る程嬉しいだらうに、どれもこれも申し合せた樣に獰猛の極致を盡してゐる。あれぢや、どうしたつて病院の必要がある筈がないと迄思つた。

天氣丈は好都合にすつかり晴れた。赤土を劈た樣な山の壁へ日が當る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受けて、まだ乾かない。其の上照る日をいくらでも吸ひ込んで行く。景色は晴れがましいうちに濕とりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を見ると、眞蒼な色が笑み割れさうに濃く重なつてゐる。風は全く落ちた。昨夕と今朝とでは殆ど十五度以上も違ふ樣である。道傍に、たつた一つ蒲公英が咲いてゐる。勿體ない程奇麗な色だ。是も獰猛とは丸で釣り合ない。

病院へ着いた。和土の廊下が地面と擦れ〳〵に五六間續いてゐる突き當りに、診察室と云ふ札が懸つて、手前の右手に控所と書いてある。今云つた一間幅の廊下を横切て、控所へ這入ると、下は矢張り和土で、ベンチが二脚程竝べてある。小さい硝子窓には受附と楷書で貼り附けてある。自分は此の窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙片を出すと、窓の中に腰を掛けてゐた二十二三の若い男が、其の紙片を受取つて、

ありもしない眉へ八の字を寄せて、六づかしさうに篤と眺めた上、

「こりや御前か」

と、左も横風に云つた。あまり好い心持ではなかつた。何の必要があつて、かう自分を輕蔑するんだか不平に堪へない。それで單に、

「えゝ」

と出來る丈愛嬌のない返事をした。受附は、それぢや、まだ挨拶が足りないと云はん許りに、しばらくは自分を睨めてゐたが、こつちも夫つ切り口を結んで立つてゐたもんだから、

「少し待つてゐろ」

と、ぴしやりと硝子戸を締て出て行つた。草履の音がする。あんなにばた〳〵云はせなくつても好さゝうなもんだと思つた。

自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなか〳〵歸つて來ない。ぼんやりしてゐると、眼の前にジヤンボーが出て來た。金さんがよつしよい〳〵と擔がれて來る所が見える。あれでも病院が必要なのかと思つた。何の爲に藥を盛つて、患者を施療するのか、ほとんど意義をなさない。こんな體裁のいゝ僞善はない。病人はいぢめる丈いぢめる。ジヤンボーは嚙したい丈嚙す。其の代り醫者にかけてやると云ふのか。鄭重の至りである。

「おい、彼方へ廻れ」

と突然受附の聲がした。見ると受附は硝子窓の中に威丈高に突立つて、自分を眼下に睥睨してゐる。自分

は控所を出た。右へ折れて、廊下傳ひに診察場へ上がつたら、藥の臭がぷんとした。此の臭を嗅ぐと等しく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思ひ出した。死んで此處の土になつたら不思議なものだ。かう云ふのを運命といふんだらう。運命の二字は昔から知つてたが、たゞ字を知つてる丈で意味は分らなかつた。意味は分つても、納得が六づかしかつた。西洋人が筍を想像する樣に定義丈を心得て滿足してゐた。けれども人間の一大事たる死と云ふ實際と、人間の獸類たる坑夫の住んでゐるシキとを結び附けて、二三日前迄不足なく生ひ立つた坊つちやんを突然宙に釣るして、此の二つの間に置いたとすると、坊つちやんは始めて成程と首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云ふ事が分る。すると今迄只の山であつたものが、たゞの山でなくなる。たゞの土であつたものが唯の土でなくなる。青い許りと思つた空が、青い丈では濟まなくなる。此の病院の、此の診察場の、此の藥品の、此の臭ひ迄が夢の樣な不思議になる。元來此の椅子に腰を掛けてゐる本人からしてが、何物だか殆ど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭に見える丈で、どんな意味のある世界か薩張り見當がつかない。自分は、診察場と藥局とをかねた此の一室の椅子に倚つて、敷物と、洋卓と、藥瓶と、窓と、窓の外の山とを見廻した。尤も明瞭な視覺で見廻したが、凡てがたゞ一幅の畫と見える丈で、其の他には何物をも認める事が出來なかつた。

そこへ戸を開けて、醫者があらはれた。其の顏を見ると、矢つ張り坑夫の類型である。黑のモーニングに縞の洋袴を着て、襟の外へ頸を突き出して、

「御前か、健康診斷をして貰ふのは」

と云つた。此の語勢には、馬に對しても、犬に對しても、是非腹の內で云ふべき程の敬意が籠つてゐた。

「えゝ」
と自分は椅子を離れた。
「職業は何だ」
「職業つて別に何にもないんです」
「職業がない。ぢや、今迄何をして生きてゐたのか」
「たゞ親の厄介になつてゐました」
「親の厄介になつてゐた。親の厄介になつて、ごろ〳〵してゐたのか」
「まあ、さうです」
「ぢや、ごろつきだな」
自分は答をしなかつた。
「裸になれ」
自分は裸になつた。醫者は聽診器で胸と脊中を一寸視た上、いきなり自分の鼻を撮んだ。
「息をして見ろ」
息が口から出る。醫者は口の所へ手を宛てがつた。
「今度口を塞ぐんだ」
醫者は鼻の下へ手を宛てた。
「どうでせう。坑夫になれますか」

「駄目だ」
「何處か悪いですか」
「今書いてやる」
醫者は四角な紙片へ、何か書いて抛り出す樣に自分に渡した。見ると氣管支炎とある。
氣管支炎と云へば肺病の下地である。肺病になれば助かり樣がない。成程さつき藥の臭を嗅で死ぬんだなと蟲が知らせたのも無理はない。今度は愈死ぬ事になりさうだ。是から先二三週間もしたら、金さんの樣によつしよい〳〵でジャンボーを見せられて、其揚句には自分がとう〳〵ジャンボーになつて、それから思ふ存分囃し立てられて、敲き立てられて、――尤も新參だから囃して呉れるものも、敲いて呉れるものも、ないかも知れないが――とゞの詰りは、――どうなる事か自分にも分らない。それは分らなくつても宜ろしい。生きて動いてゐる今ですら分らない。たゞ世界がのべつ、のつぺらぼうに續いてゐるうちにあざやかな色が幾通りも竝んでる許りである。坑夫は世の中で、尤も穢ないものと感じてゐたが、斯樣に萬物を色の變化と見ると、穢ないも穢なくないもある段ぢやない。どうでも構はないから、どうとも勝手にするがいゝ、自分が懷手をしてゐたら運命が何とか始末をつけて呉れるだらう。死んでもいゝ、生きてもいゝ。華嚴の瀑抔へ行くのは面倒になつた。東京へ歸る？何の必要があつて歸る。どうせ二三度咳をせくうちの命だ。此處迄運命が吹き附けて呉れたもんだから、運命に吹き拂はれる迄は、此處にゐるのが、一番骨が折れなくつて、一番便利で、一番順當な譯だ。此處に居て、たゞ墮落の修業さへすれば、死ぬ迄は持てるだらう。肺病患者にほかの修業は六づかしいかも知れないが、墮落の修業なら――ふと往きに眠

に附いた蒲公英に出逢つた。さつきは勿體ない程美しい色だと思つたが、今見ると何ともない。何故之が美しかつたんだらうと、しばらく立ち留まつて、見てゐたが、矢つ張り美しくない。それから又あるき出した。だら〳〵坂を登ると、自然と顔が仰向になる。すると例の通り長屋から、坑夫が頬杖を突いて、自分を見下してゐる。さつき迄はあれ程厭に見えた顔が丸で土細工の人形の首の様に思はれる。醜くも、怖くも、憎らしくもない。たゞの顔である。日本一の美人の顔がたゞの顔である如く、坑夫の顔もたゞの顔である。さう云ふ自分も骨と肉で出來たたゞの人間である。意味も何もない。

自分はかう云ふ狀態で、無人の境を行く樣な心持で、親方の家迄やつて來た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がらりと障子をあけて出た。かう云ふ娘がこんな所に居やう筈がないんだから、平生ならはつと驚く譯だが、此の時は丸で何の感じもなかつた。たゞ器械の樣に挨拶をすると、娘は片手を障子へ掛た儘、奥を振り向いて、

「御父さん。御客」

と云つた。自分は此の時、これが飯場頭の娘だなと合點したが、たゞ合點した迄で、娘がまだ其處に立つてゐるのに、娘の事は忘れて仕舞つた。所へ親方が出て來た。

「どうしたい」

「行つて來ました」

「健康診斷を貰つて來たかい。どれ」

自分は右の手に握つてゐた診斷書を、つい忘れて、おや何處へやつたらうかと、始めて氣が附いた。

「持つてるぢやないか」

と親方が云ふ。成程持つてゐたから、皺を伸して親方に渡した。

「氣管支炎。病氣ぢやないか」

「え、駄目です」

「そりや困つたな。どうするい」

「矢つ張り置いて下さい」

「そいつあ、無理ぢやないか」

「ですが、もう歸れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいゝですから。何でもしますから」

「何でもするつたつて、病氣ぢや仕方がないぢやないか。困つたな。然し折角だから、まあ考へて見樣。明日迄には大概樣子が分るだらうから又來て見るがいゝ」

自分は石のやうになつて、飯場へ歸つて來た。

其の晩は平氣で圍爐裏の側に胡坐をかいてゐた。坑夫共が何と云つても相手にしなかつた。相手にする料簡も出なかつた。いくら騒いでも、愚弄ても、よしんば踏んだり蹴たりしても、彼等は自分と共に一枚の板に彫り附けられた一團の像の樣に思はれた。寐るときは布團は敷かなかつた。やはり圍爐裏の傍に胡坐をかいて居た。みんな寐着いてから、自分も其場へ假寐をした。圍爐裏へ炭を繼ぐものがないので、火の氣が段々弱くなつて、寒さが次第に增して來たら、眼が覺めた。襟の所がぞく〳〵する。それから起き

て表へ出て空を見たら、星が一杯あつた。あの星は何しに、あんなに光つてるのだらうと思つて、又内へ這入つた。金さんは相變らず平たくなつて寐てゐる。金さんはいつジャンボーになるんだらう。自分と金さんとどつちが早く死ぬだらう。安さんは六年此のシキに這入つてると聞いたが、この先何年鑛を敲くだらう。矢つ張り仕舞には金さんの樣に平たくなつて、飯場の片隅に寐るんだらう。さうして死ぬだらう。

――自分は火のない圍爐裏の傍に坐つて、夜明迄考へつゞけてゐた。その考へはあとから、あとから、仕切りなしに出て來たが、何れも干枯びてゐた。涙も、情も、色も香もなかつた。怖い事も、恐ろしい事も、未練も、心殘りもなかつた。

夜が明けてから例の如く飯を濟まして、親方の所へ行つた。親方は元氣のいゝ聲をして、

「來たか、丁度好い口が出來た。實はあれから色々探したがどうも思はしい所がないんでね、――少し困つたんだが。とう〳〵旨い口を見附た。飯場の帳附だがね。是や無ければ、なくつても濟む。現に今迄は婆さんが遣つてた位だが、折角の御賴みだから。どうだね夫ならどうか、おれの方で周旋が出來樣と思ふが」

「はあ難有いです。何でも遣ります。帳附と云ふと、どんな事をするんですか」

「なあに譯はない。たゞ帳面をつける丈さ。飯場にあゝ多勢ゐる奴が、やゝ草鞋だ、やゝ豆だ、ヒジキだつて、毎日色々なものを買ふからね。そいつを一々帳面へ書き込んどいて貰やあ好いんだ。なに品物は婆さんが渡すから、たゞ誰が何をいくら取つたと云ふ事が分る樣にして置いてくれゝば夫れで結構だ。さうすると此方で其の帳面を見て勘定日に差し引いて給金を渡す樣にする。――なに力業ぢやないから、誰

でも出來る仕事だが、知つての通りみんな無筆の寄合だからね。君がやつて呉れると此方も大變便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりませう」

「給金は少くつて、まことに御氣の毒だ。月に四圓だが。――食料を別にして」

「それで澤山です」

と答へた。然し別段に嬉しいとも思はなかつた。漸く安心したと迄は固り行かなかつた。自分の鑛山に於ける地位は是でやつと極つた。

翌日から自分は臺所の片隅に陣取つて、かたの如く帳附を始めた。すると今迄あの位人を輕蔑してゐた坑夫の態度ががらりと變つて、却て向ふから御世辭を取る樣になつた。自分も早速墮落の稽古を始めた。南京米も食つた。南京蟲にも食はれた。町からは毎日々々ボン引が椋鳥を引張つて來る。子供も毎日連れられてくる。自分は四圓の月給のうちで、菓子を買つては子供にやつた。然し其の後東京へ歸らうと思つてからは斷然已めにした。自分は此の帳附を五箇月間無事に勤めた。さうして東京へ歸つた。――自分が坑夫に就ての經驗は是れ丈である。さうしてみんな事實である。其の證據には小說になつてゐないんでも分る。

5
4

昭和三年四月五日印刷
昭和三年十月二十四日發行

漱石全集第四卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　漱石全集刊行會
東京市神田區南神保町十六番地

右代表者　岩波茂雄

印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

（模木製本）

566
49

566
49